岩 波 文 庫

32-066-3

インド古典説話集

カター・サリット・サーガラ

(三)

岩 本　裕 訳

岩 波 書 店

目次

マダナ・マンチュカー姫の物語

ナラヴァーハナダッタ王子の誕生

一

ヴァツァ王ウダヤナは首都カウシャームビー*に留って、一つの傘蓋の下に征服された大地を統治しました。幸福な王は宰相ヤウガンダラーヤナと将軍ルマンヴァットに国政の重責を委ねて、みずからは侍従ヴァサンタカを相手に逸楽に耽りました。王はみずから琵琶を弾いてヴァーサヴァダッター妃とパドマーヴァティー妃とともに音楽に興じ、王の奏でる琵琶の音は王妃の甘美な歌声と合し、彼の指の顫動は数々の微妙な音色をあらわしました。また、王宮の屋根があたかも彼の威光によって輝くかのように、月光に白く映えるとき、敵どもの誇りを呑みつくすかのように、彼は滝つ瀬なす酒を飲みほしました。彼が後宮に退くと、薔薇色に輝く美女が愛慾をいやます酒を黄金の盃に容れて彼に捧げましたが、その酒は彼を愛欲の王国の支配者に即位させる灌頂の水のようでありました。赤く甘美で透明なアーサヴァ酒*を二人の妃の間に置くと、彼女たちの顔容がそれに映りましたが、それは情熱が燃え溢れて二人の妃の姿の焼きつけられた彼の心さながらでありました。彼の眼は彼女たちの柳眉を眺めて飽くことはなく、彼女たちの顔は愛情の色に映えていましたが、嫉妬と怒りの色は少しも見られませんでした。彼の催す酒宴は、酒を満した数々の玻璃の盃がならべられて、あたかも朝日の光に赤く映える白蓮の池のようでありました。また、時に、王はパラーシャ樹*のように暗緑色の鎧を着て、弓矢を携え、猟師を連れて、みずからの姿と同じ色をした、野獣の棲む森を歩き廻りました。太陽がその密な光線で暗黒の塊を消散させるように、彼は矢で泥土にまみれた野猪の群を射殺しました。彼が斑鹿に突進するとき、怖れて逃げまどう斑鹿の群は、あたかも彼が嘗て征服した四方角の流し眼さながらでありました。また、彼が野牛を倒したとき、大地はその血で真赤となり、野牛の角で突かれるのを免れたことを恭しく感謝するために伺候した森の蓮華のようでありました。逆鉤のついた投槍が獅子の開いた口に突き刺さり、咆吼とともにその生命が絶えるとき、彼は快心の喜びに溢れました。彼はまた森の洞穴に犬をひそませ、路には網を張りました。彼は自己の武器を唯一の頼りとして狩猟の楽しみを行っていましたが、時にはこのような手段も用いました。

このように逸楽に耽溺していました王が、あるとき政庁に出御していますと、ナーラダ仙がやって来ました。ナーラダ仙の身体からは光彩が放たれ、光り輝く太陽が天から降臨して、王家を祝福するかのようでありました。王は聖仙に繰返し拝礼し、厚くもてなしましたので、聖仙は満悦し、一瞬立止って、王に語りました。

「ヴァツァ王よ、聴け。簡単に話をしよう。そなたにパーンドゥ王*という祖先があった。この威光ある王に、丁度そなたと同様に、二人の妃があった。一人をクンティーと言い、他をマードリーと言った。このパーンドゥ王は四方の海に縁どられた大地を征服して幸福であったが、狩猟に耽溺して、あるとき森に行った。そのとき、彼は鹿の姿をして妻と交わっていたキンダマという聖仙を鹿と誤って、矢を放って射殺した。この聖仙は鹿の姿を捨てて、もとの姿を現じ、嗄れ

る声でパーンドゥ王を呪詛したので、王は絶望して弓を捨ててしまった。

『汝は無思慮にも、心の赴くままに楽しんでいた余を殺したれば、汝は妻と交わるときに死すべし。』

と、キンダマ仙から呪詛されて、パーンドゥ王は恐怖から性的快楽を絶って、二人の妃を連れて、寂静な苦行林に隠棲した。あるとき、その呪詛に誘惑されて、愛するマードリーと交わり、突然に死んでしまった。従って、ヴァツァ王よ、まこと狩猟は王者たちの迷妄であり、そのためにみずから殺した野獣のように殺された王者もある。まこと狩猟は、怖ろしく咆吼し、生肉のみを欲し、泥にまみれ、髪を逆立て、槍を歯とするラークシャシー（羅刹女）にも似ており、どうして幸運な結果を得るをえようか。従って、狩猟の楽しみという下らぬ努力を止められよ。野象も、その殺戮者も、ひとしく生命を墜すばかりである。余はそなたの祖先と親しくしたことによって、そなたもまた余の愛しき者じゃ。愛の神（カーマ）の分身たる世子を、そなたが得べき次第を聴け。嘗てラティが夫カーマ*（愛の神）の肉体の復活を冀って、頌句を唱えてシヴァ神を讃嘆したとき、シヴァ神は満悦されて、秘かに次のごとき話を簡単にラティに物語られた。

『ガウリー（シヴァ神妃パールヴァティーの別名）は子を欲して、自己の分身とともに地上に化身し、親しく余を祀って、カーマの分身を生むであろう。』

と。従って、王よ、女神はチャンダ・マハーセーナの王女ヴァーサヴァダッターとして生れ、そなたの妃となったのじゃ。されば、彼女がシヴァ神を祀るとき、カーマの分身にして将来ヴィディヤーダラ*族全体の転輪王*となるべき王子を生むであろう。」

と、ナーラダ仙が言いますと、聖仙の言葉に感激して王が捧げた大地を返して、姿を消しました。仙が立去った後、ヴァツァ王は息子を得たいと熱望するヴァーサヴァダッター妃とともに、そのことを考えながら、その日を過しました。

次の日、ヴァツァ王が政庁に出御していますと、ニティヨーディティヤという侍衛長官が伺候してきました。

「陛下、みすぼらしい姿をしました婆羅門の女が二人の子供を連れて御門に参り、陛下にお目通りを願っております。」

と告げましたので、王が引見を許しますと、痩せて顔色悪く、汚れた婆羅門の女が這入ってきました。この女は身分の矜持を振りすてたかのように襤褸の衣服をまとい、悲惨の神と貧乏の神にも似た二人の子供を抱きかかえていました。彼女は王に掟通りの挨拶をしまして、

「わたくしは良家の生れの婆羅門でありますが、このような悲惨な境遇となりました。その上、何という運命か、二人の子が同時に生れました。陛下、食物もありませんので、この子供たちに飲ます乳も出ません。そのため、貧乏で身寄りのない者が来れば、保護を加えられるという陛下のところに参りました。陛下に於かれましては、なにとぞ御諒察くださいませ。」

と、王に言上しました。王は憐れんで侍衛に、

「この婦人をヴァーサヴァダッターのところに連れてゆき、預けよ。」

と命じました。彼女はあたかも自分の清浄な行に案内されるかのように、侍衛に導かれて、王妃の前に連れて行かれました。この婆羅門の女が王の命令で連れてこられたことを知り、ヴァーサヴァダッター妃は彼女を深く信頼しました。王妃は悲惨な境遇の彼女が双生児を連れているのを見まして、

「ああ、これはまた創造主の何という不公平なことであろうか。ああ、お金のある者には御不興で、お金のない者に恩寵を垂れたまうとは。わたしにはまだ子供が生れぬのに、彼女にはこうして双生児が生れている。」

と、物思いに耽りました。そして、侍女たちに命じて、この婆羅門の女に水浴などをさせました。水浴をし、衣服を与えられ、また十分に饗応されますと、あたかも太陽に灼けた大地が降りそそぐ雨によって蘇るように、婆羅門の女は元気を回復しました。彼女が元気を回復しますと、言葉を交して彼女を験そうと思っていました王妃は、直ちに口実を設けて、彼女に

「わたしどもに何かお話を聴かせて頂きとう存じます。」

と話しかけました。彼女は承諾して、物語を語りはじめました。

〔デーヴァダッタ王子の物語〕

むかし、ジャヤダッタという、ある微力な王がありました。彼にデーヴァダッタという王子が

生れました。王子が年頃になりますと、王子を結婚させようと思い、賢明な王は考えました。

「王者の威光は、劇しく慰まれる遊女のように、極めて不安定なものである。これに反し、商人の繁栄は良家の婦人のように堅固で、他人に靡かない。従って、王子の配偶者は商人の家から迎えよう。そうすれば、王子が王位に即くとき、王位を窺窬する多くの親族に囲まれていても、不運に陥ることはないであろう。」

と決心して、王は王子のためにパータリプトラ*から商人ヴァスダッタの娘を選びました。ヴァスダッタもまた貴顕の家と姻戚になることを望んでいましたので、土地は遠く離れていましたけれども、娘を王子に嫁がせました。そして、非常に多くの財宝を娘婿に贈りましたので、王子は自分の父の威光に対して尊敬の念をなくしてしまったほどでした。こうして、ジャヤダッタ王は富裕な商人の娘を妻とした王子と一緒に、幸福に暮していました。

ある日、商人ヴァスダッタは娘に会いたい一心から、姻戚となりました王家を訪れ、娘を自分の家に連れ帰りました。すると、突然にジャヤダッタ王が天国に行き、その王国は反旗を翻がえした親族の者たちに奪われてしまいました。彼等の魔手を逃れて、夜の間に、デーヴァダッタ王子は母后によって人知れず他国に連れて行かれました。その地に到着しますと、心を傷めた母后は王子にこのように申しました。

「われわれの服属する転輪王は東方に君臨される皇帝です。かの皇帝のところに赴き、援助を懇願しなさい。必ずや皇帝はそなたのために王国を回復してくれるでしょう。」

と、母后から言われました王子は

「扈従を連れずに皇帝のところへ行った場合、誰がわたくしを尊敬するでしょうか。」

と答えました。この言葉を聴きますと、母后は王子に再び言いました。

「舅の家に行って、そなたはお金を貰い、供廻りをととのえて、転輪王の許に行きなさい。」

と、母后から励まされて、王子は恥ずかしく思いましたが、漸く夜間に舅の家につきました。父を失ったことと王位を奪われたために、不覚の涙を流しそうでありましたし、また何としても恥ずかしくもありましたので、王子はこのような不適当な時間に舅の家に這入ることができませんでした。そこで、舅の邸の近くにある慈善院の外に立っていますと、舅の家から夜中に、突然に一人の女が縄を伝わって下りてくるのを見ました。その女は宝石を燦然と着飾っていまして、あたかも雲の中から落下する流星のように見えましたので、王子は直ちにその女が自分の妻であることを知り、悲しく思いました。しかし、彼女は彼が垢にまみれて痩せていましたので、彼を見ても自分の夫であることに気づかず、

「あんたは誰なの。」

と訊ねました。王子が

「わたしは旅行者です。」

と言いますと、商人の娘は彼を無視して、慈善院の中へ這入ってゆきました。王子は彼女を見張ろうと思い、秘かにその後をつけてゆきました。彼女は慈善院の中に這入りますと、一人の男に

近づきました。すると、その男は

「お前の来るのが遅かった。」

と、彼女を幾度も足蹴にしました。足蹴にされて情慾のつのったこの悪女はその男をなだめ、二人は恣にたわむれました。王子はそれを見ましたが、理性のある彼は考えました。

「わたしには他に成就すべきことがあるのだから、今は怒るべきときではない。妻とこの淫獣の二人の無礼者に、敵に加うべきわたしのこの剣を、どうして加えることができようか。この姦婦と争って、何の利益があろうか。こんな女にかかずらうことは、わたしの堅固な心を巧みにためそうという魂胆で不幸の雨を降らす不運のなす悪戯なのだ。誤ったのは不釣合な家と縁組したことで、彼女が誤っているわけではない。雌鴉が雄鴉を捨てて、どうして郭公鳥と愛慾を楽しむことができようか。」

と熟慮して、妻と情夫とを無視しました。重大事を達成しようと念ずる偉大な人の心に、藁にもひとしい女がどうして重要でありましょうか。そのとき、姦婦と情夫が激しく抱き合いましたために、商人の娘の耳から宝石を鏤めた耳飾りが落ちましたが、彼女はそれに気がつきませんでした。逢曳が終りますと、彼女は情夫と別れて、出て来たときと同じ方法で、急いで家に帰りました。情夫も急いで何処かに立去りました後で、王子は宝石を鏤めた耳飾りを見つけて、拾いました。その耳飾りは宝石の光耀の網を閃かせて迷妄の闇を払い、失われた威光を捜し求めるために、創造主の授けられた手燭のようでありました。王子はそれが非常に高価なものであることを知り、

直ちに準備をととのえてカニヤークブジャ*に赴きました。その地で彼は耳飾りを質に入れて数十万金を借り、象や馬を購い、供廻りを従えて、転輪王の許に行きました。そして、転輪王から贈られた軍勢を率いて進撃し、戦闘に於いて敵どもを殺戮して、父の王国を回復し、その成功は母后を喜ばせました。王子は耳飾りを質から受け出して、舅の許に送り届け、寝耳に水の秘密をあばこうとしました。舅は自分の娘の耳飾りを見まして、それが王子の手にどうして這入ったかを怪しみ訝かり、それを娘に見せました。彼女は、彼女の操と同様に以前になくした耳飾りを見まして、そしてそれが夫から送り届けられたことを知りまして、嘗てのことを思い出し、途方に暮れました。

「これは、あの夜、慈善院の中で落したものだ。あのとき、あそこに立っていた旅行者が、わたしを見ていた。あれはきっと夫がわたしの貞節を探りに来ていたのに相違ない。でも、わたしにはあの方が判らなかった。それで、あの方がこの耳飾りを手に入れたのだ。」

と考えますと、商人の娘の心は自分の不行跡のばれたことに思い悩み、遂に破裂してしまいました。商人ヴァスダッタは策を用いて、秘密を知っている侍女にたずねて真相を知り、娘の死を悲しむのを止めました。

こうして、王子は王国を回復し、転輪王の王女をみずからの徳によって妻とし、この上ない繁栄を享けました。

「このように、向う見ずなことをする場合には、女の心は金剛*のように堅固でありますが、恐怖の突進に遭うときには、それはまことに花びらのようであります。しかし、良家の生れで、貞淑で心の清らかな婦人で、真珠のように地上の装飾となる人もいます。そして、王者の栄光は牝鹿のように常にはかないものであります。しかも、賢者は堅固な心を鎖として、それを繋ぎとめることを知っております。ですから、不運に際しても、幸運を冀う人々は、その徳を捨てるべきではありません。この点については、わたくしの現在の境遇が好い例であります。わたくしはこのような窮境にありましても、お妃さま、操を守りました。それは、あなたさまにお目にかかれるという福運となって、実を結びました。」

と、この婆羅門の女から聴きまして、ヴァーサヴァダッター妃は彼女に対して尊敬の念を起し、考えました。

「この婆羅門の婦人は確かに良家の生れに相違ない。この方が自分の貞節なことをそれとなくほのめかす言い方と、その言葉に自信のあることは、その生れの気高いことを現わしている。そして、こういう訳であるからこそ、この方は機転をきかせて、王の政庁に這入ってきたのである。」

と思いめぐらして、王妃は再びこの婆羅門の女に、

「あなたはどなたの奥様でしたの。また、あなたがこれまでになされたことを、お話して頂けませんか。」

と言いました。この言葉を聴きまして、この婆羅門の女は話しはじめました。

「お妃さま、マーラヴァ*にアグニダッタという婆羅門がいました。この方は吉祥の女神と学識の女神の拠りどころでありましたが、困窮者を救済して貧乏となりました。時を経て、彼にふさわしい二人の子が生れました。長子をシャンカラダッタと言い、他をシャーンティカラと言いました。この二人の息子の中で、弟のシャーンティカラは未だ子供でありましたが、学問を修めるために、突然に父の家から出奔して、何処かに行ってしまいました。兄のシャンカラダッタが、祭祀のために富み栄えていましたヤジュナダッタの娘のわたくしを娶りました。時を経て、舅のアグニダッタは老齢でありましたので他界し、姑もその後を追いました。わたくしの夫はその悲しみから霊場を巡拝しようとしまして、妊娠していましたわたくしを捨てて出てゆき、しかもサラスヴァティー河*で泉に身を投じてしまいました。この一部始終が彼に同行していた人々から伝えられましたが、そのときわたくしは妊娠していましたために、親族の者たちから、夫の後を追うことを許されませんでした。

　こうして、わたくしの悲しみの涙もまだ乾かぬときに、突然に蛮族が襲撃してきまして、わたくしの家も拝領地も、すべて掠奪されてしまいました。そのとき、わたくしは三人の婆羅門の婦人とともに、操を汚される怖れから、僅かばかりの衣類を携えただけで、其処から逃げ出しました。その地方がすべて掠奪されましたので、連れの婦人たちと一緒に遠国に逃げ、苦しい仕事で生計を立て、一ヵ月の間、其処におりました。世間の人々から、ヴァッツァ王が縁辺のない者を庇

護されると聞き、婆羅門の婦人たちとともに、ただ貞節ということのほかに、道中携えるものもなく、この地に参りました。この地に着くや否や、二人の子供が一度に生れました。友人として三人の婆羅門の婦人がいましたけれども、夫に死に別れ、故郷を離れ、そして貧乏に悩まされ、しかも双生児が生れたのです。ああ、創世主はわたくしに不幸の門を開かれたのでした。ですから、この二人の子供を養い育てる術のないことを考えて、女の飾りである羞恥心を捨てて、ヴァツァ王の政庁に参りまして、施しを乞いましたのであります。不幸な子供の悲惨な有様を見て、誰がそれに堪えることができましょうか。そして、王の御指図によって、わたくしはお妃さまの御前に参りました。そして、わたしの困窮はなくなり、わたしに憑いていました貧乏神はあたかも此処の御門から追い返されてしまったようであります。以上がわたくしのこれまでの一部始終であります。なお、わたくしの名はピンガリカーと申しますが、それは子供のときからわたくしの両眼が聖火のために赤く*なっていましたからであります。でも、外国へ行きました義弟のシャーンティカラが何処にいますか、未だに判りませぬ。」

と、婆羅門の女が自分の身の上を語りますと、王妃は彼女が高貴の生れであることを知り、熟慮の後、親しみをこめて言いました。

　「此処に、わたしたちの司祭官として、外国生れのシャーンティカラという婆羅門がいます。この方がきっとあなたの義弟でしょう。」

と言いまして、その人に会いたいとあせるのをなだめて、その夜を過し、王妃は翌朝シャーンテ

ィカラを召し、彼の血統をたずねました。シャーンティカラが自分の素姓を語りますと、王妃は二人の申立がよく一致することを確信して、

「この方があなたの兄嫁です。」

と、ピンガリカーを彼に会わせました。彼等が互いに挨拶を交しました後、身内の者の死んだことを知りましたシャーンティカラは、兄嫁を自宅に連れ帰りました。家に帰りますと、当然のことではありますが、彼は両親と兄の死を悼み悲しみ、二人の子供を連れた兄嫁をねんごろにいたわりました。

ヴァーサヴァダッター妃はピンガリカーの二人の息子を将来生れてくる自分の息子の司祭官にする決心をし、その長子にシャーンティソーマ、他にヴァイシュヴァーナラという名を与え、夥しい富を授けました。世間の人々というものは、その前世に於ける業によって、果報の土地に案内されてゆく盲人さながらでありまして、その勇気はそのための手段に過ぎません。こうして、二人の子供とその母とシャーンティカラとは財宝をえて、安楽に暮しました。

幾日かが経たあるとき、一人の甕造り素姓の女が皿を持ち、五人の子供を連れて歩いているのを、ヴァーサヴァダッター妃が自分の宮殿から見まして、傍に侍坐するピンガリカーに話しかけました。

「御覧なさい。あの女には五人の子があるに拘わらず、わたしには一人もない。あのような女がどうしてあのように福運に恵まれており、わたしのごときはどうして福運に恵まれないのでしょうか。」

と言いますと、ピンガリカーが言いました。

「お妃さま、あの多くの子供たちは、前世の悪業のために貧乏な境遇に生れて、苦しんでいるのであります。あなたのような方には、前世に於いて勝れた方であった人が生れましょう。ですから、そのように、おあせりになってはいけません。間もなく、あなたにふさわしいお子さまが生れられます。」

と、ピンガリカーから言われましたけれども、ヴァーサヴァダッターは子供を生むことを熱望して、彼女の心はそのことで一杯でありました。そのとき丁度近づいてきましたヴァツァ王は、王妃の心の中を察して、

「『ギリシャ（シヴァ神の異名）を宥慰すれば、そなたは息子が得られる。』

と、ナーラダ仙は宣うた。されば、妃よ、ともあれ恩恵を垂れたまうシヴァ神を、わたしたちはお祀りしよう。」

と語りました。そして、王妃が誓願をたてますと、王も、大臣たちも、また王国全体も、シヴァ神を宥慰する誓願をたてました。王と王妃は三日間の断食をしましたので、神は満足されて、親しく彼等の夢の中に現われました。

「立上れ、そなたたちにカーマの分身たる息子が生れるであろう。その息子は、余の恩寵により、ヴィディヤーダラ族の王者となるであろう。」

と、月輪を頭飾りとする神（シヴァ神の異名）は宣うて、姿を消しました。王と王妃とは眼覚めて、恩寵を得たという喜びが自然と湧いてきまして、目的を成就したと思いました。

王妃と王とは、翌朝、彼等の夢の甘露を物語って臣下の者を悦ばせ、親族および臣下の者たちと大饗宴を催し、断食の満願を祝いました。幾日かを経て、ヴァーサヴァダッター妃は夢の中で、髻を結った人から果実を授かりました。このようにはっきりとした夢のお告げを受けて、王と王妃はともに喜び、また大臣たちはそれを寿ぎました。ヴァツァ王はシヴァ神が果実にことよせて息子を授けられたのであると信じ、自分の願望の成就も遠くないと思いました。

二

こうして、間もなく、ヴァーサヴァダッターは愛の神カーマの分身の権化である輝かしい胎児を妊りましたが、この胎児はまさにヴァツァ王の心の饗宴でありました。王妃の眼は始終揺ぎ、顔色は青白く輝き、あたかも彼女の胎内に宿った愛の神に対する愛情から彼女を訪れた月輪のようでありました。彼女が坐っているとき、宝玉を鏤めた榻の両側にうつる彼女の影は、彼女にみごもった夫（愛の神カーマ）に対する愛情から訪れてきましたラティ（愛の神カーマの妃の一人）とプリーティ（愛の神カーマの妃の一人）のように見えました。彼女に仕える侍女たちは、あたかも彼女にみごもった未来のヴィディヤーダラの覇王に仕えるために、あらゆる願望を適える呪文（ヴィディヤー）が権化してきたかのようでありました。また、彼女の二つの乳はまだ開かぬ蕾のように乳頭が黒味を帯びていましたが、それは生れてくる王子の灌頂のために使用される水差のようでありました。透明で光彩を放ち、光沢のある宝玉の床が光り輝く宮殿の中央に、彼女が安楽な榻牀に横たわるとき、彼女の未来の子に征服されるのを怖れて、水が四方から夥しい宝玉を捧げて近づき、彼女に侍ずいているかのようでありました。彼女の姿は宮殿の真中に鏤めた宝玉に映えて、彼女に拝礼するために、天空を駆って訪れ来たヴィディヤーダラ族の吉祥の女神さながらでありました。妊娠して異常嗜好をあらわした王妃は、呪頌や呪法の祭儀に通暁した勝れた呪師の物語に、特に強い執心を示しました。彼女が夢の中で空高く昇りますと、ヴィディヤーダラの女たちが美しい調べの歌をうたって、彼女に陪侍しました。彼女は、眼が覚めると、大地を見おろす楽しみのある空中での行遊を、実際に楽しみたいと願いました。そこで賢明なヤウガンダラーヤナは種々の装置を考案し、呪頌を用い呪術を操るなど数々の手段によって、彼女の異常な嗜好を満足させました。彼女はこのような数々の手段によって空中を行遊して娯しみ、都城の婦女子たちの見上げる眼に素晴らしい光景を見物させました。

あるとき、ヴァーサヴァダッターが部屋に引籠っていましたとき、ヴィディヤーダラ族の素晴らしい物語を聴きたいという欲望が生じました。ヤウガンダラーヤナは王妃から慫慂されて、他の人々がすべて耳を傾ける中で、次の物語を王妃に話しました。

〔ジームータヴァーハナ（乗雲太子）の物語〕*

世界の母（シヴァ神の妃パールヴァティー）の父で、山々の主であるばかりでなくシヴァ神の先生であるヒマヴァット（雪山）という大山があります。この大山に、ヴィディヤーダラ族の王者であるジームータケートゥという王が住んでいました。この王の家に、父祖伝来の如意樹がありましたが、この樹はその性質をあらわすマノーラタ・ダーヤカ（「希望を適える者」の義）という名で呼ばれていました。ある日、ジームータケートゥ王は遊園にある如意樹に近づき、神のごとき威力をもつこの樹に

「われわれはいつも汝からあらゆる希望を適えて貰っている。されば、神よ、子のない余に、徳を具えた息子を授けられよ。」

と懇願しました。すると、如意樹が

「あなたに、前生を知り、施与の勇者で、一切の有情に親切な子が生れるであろう。」

と言いましたので、王は非常に喜び、如意樹を礼拝し、帰ってこのことを王妃に知らせて、悦ばせました。こうして、間もなく、この王に王子が生れました。父王はこの王子にジームータヴァーハナという名をつけました。

偉大な人物のジームータヴァーハナは、一切の有情に対する生得の憐愍の情とともに、成長しました。そして、彼が世子の位に即きますと、世間に対して憐れみ深い王子は、彼の侍立を喜ぶ

父に、秘かに言いました。

「父上、この世に存在するものが無常で果敢ないものであり、これに反して勝れた人々の名声のみはこの世界の滅ぶまで不滅であることを、わたくしは知っております。もしその名声が他のものに恵んだことによって得られたのであるならば、これを措いて、気高い心の持主が生命よりも尊重すべき財宝が外にありましょうか。繁栄もそれが他人のために役に立たないのであれば、世人の眼を傷める稲妻のように変りやすく、直ちに何処かに消えるものであります。ですから、わたくしたちが所有していて、わたくしたちの希望を適えてくれる如意樹も、他の人々のために役立てられるならば、それによってその果報をかちうることができましょう。そこで、わたくしは此の樹の富によって、一切の困窮者の群が貧乏から救われるようにしたいと思います。」

と、王子は父王に懇願し、その同意を得まして、如意樹のところへ行って言いました。

「神よ、あなたは絶えずわたくしどもの望む果報を授けてくださいます。ですから、今日はわたしの唯一つの願いを適えてください。友よ、この全世界を貧乏からお救い下さい。あなたは財宝を欲する世間のために授けられたのです。」

と、この心の堅固な人から言われますと、如意樹は黄金を地上におびただしく降らして、すべての人民を悦ばせました。いかに憐れみ深い菩薩の化身といえども、ジームータヴァーハナ以外の誰が、如意樹をして困窮者のために役立たせることができましょうか。こうして、四方はジームータヴァーハナに傾倒し、彼の輝かしい名声は高まり拡がりました。

するとジームータケートゥ王の親族の者たちは、王国がジームータヴァーハナ太子の名声によって基礎の確立したことを嫉み、彼に敵対するようになりました。彼等は太子が施与に用いている勝れた如意樹を引抜けば、その威力がなくなる故に、彼の王国を征服することは容易であると考えました。そして、彼等は同盟して戦争を決意しましたが、そのことを知って、心の堅固なジームータヴァーハナが父に言いました。

「この身体が水に浮ぶ泡沫にも似ているように、風に吹かれた燈火のように明滅する繁栄を、われわれは誰のために欲するのでしょうか。賢者は他人を殺してまでも、どうしてそれを欲しましょうか。従って、父上、わたくしは親族の者たちと戦いたくありません。王国を捨てて、何処かの森にでも行きたいと思います。彼等憐れむべき輩が、自分自身の家を破滅しないようにしてやりましょう。」

と、ジームータヴァーハナが言いますと、父のジームータケートゥも決心して、王子に言いました。

「王子よ、わたしも行こう。若いそなたでさえ、憐愍のために、王位を塵芥のように捨てて行くというのに、年老いたわたしに、何の未練があろうか。」

と、父王が言いましたので、ジームータヴァーハナは、父とその妃とを連れて、マラヤ山*に赴きました。渓川が旃檀の樹木の蔭を流れ、シッダ*族の住処である山中に庵をむすび、父に侍ずいて暮していました。そして、シッダ族の主ヴィシュヴァーヴァスの子のミトラーヴァスという克己心の強い人と友情を交しました。

ある日、ジームータヴァーハナはミトラーヴァスの妹マラヤヴァティーを、人影稀な場所で見ましたが、一切を知る彼はその娘が前生に於いて彼の最愛の妻であったことを知りました。そして、そのとき、若い二人が交す眸はまこと心という鹿が弱い網にかかるのに似ていました。

すると、ある日、突然にミトラーヴァスがにこにこしながらやって来まして、三界の尊敬を受くべきジームータヴァーハナに申しました。

「わたしにマラヤヴァティーという妹がいます。この娘をあなたに貰っていただきたい。わたしのこの願いを無駄にしないでください。」

という言葉を聴きまして、ジームータヴァーハナが

「太子よ、あなたの妹は前生に於いてもわたしの妻でした。そして、そのとき、君もわたしの親友で、わたしにとっては第二の心臓でした。わたしは前生を知る人間で、前生に於ける一切のことを覚えています。」

と言いました。ミトラーヴァスは好奇心を起して、

「それでは前生の物語を話してください。わたしはそれが伺いたいのです。」

と、慫慂しましたので、寛大な心のジームータヴァーハナはミトラーヴァスに次のように前生の物語を話してきかせました。

〔ジームータヴァーハナの前生の物語〕

「嘗て、わたしは天空を駆るヴィディヤーダラで、あるとき雪山の頂を越えていました。そのとき、シヴァ神が下でガウリー女神（シヴァ神の妃パールヴァティーの異名）と戯れていましたが、わたしがその上を飛び越したのを怒って、

『人間の胎に墜ちよ。ヴィディヤーダラの女を妻にえて、息子を自己の地位に据えるをえて、前生を憶い出し、そなたは再びヴィディヤーダラの女の胎に生を享けるであろう。』

と、わたしを呪詛しました。そして、このように、シヴァ神は呪詛の終る時期を宣言されると姿を消され、間もなくわたしは地上に商人の家に生れました。わたしはヴァッラビー*という都の非常に富裕な商人の子として、ヴァスダッタという名で成長しました。時経て、わたしが青年になりますと、父の命令で、父がつけてくれました従者を連れて、商用のために他国に出かけました。旅行の途中、森林にさしかかりますと、盗賊がわたしを襲い、わたしの財産を奪い、わたしを縛って、自分の村のドゥルガー女神（シヴァ神妃パールヴァティーの異名）の神殿に連れてゆきました。其処には、あたかも犠牲の家畜を喰いつくそうとしている死の神の舌のように、赤い絹製の吹流しが長く翻っていまして、無気味な怖ろしさを漂わせていました。わたしは其処でドゥルガー女神を礼拝しているプリンダカという彼等の酋長の前に、彼の礼拝の犠牲にするために、連れて行かれたのでありました。

彼はシャバラ（蛮族の一）でしたけれども、わたしを見まして、憐愍の心が生じました。心が突然に何の原因もなく動くのは、前生に於ける親密な間柄を物語るものであります。こうして、このシャバラ王はわたしを殺戮から救い、自己を犠牲として礼拝の儀式を終えようと欲しました。すると、

『そのようなことをするなかれ。余は満足した。余の恩寵を懇請せよ。』

という天上の声が聞えてきまして、彼を悦ばせました。彼は

『あなたさまは忝じけなくも満足されました。他に何を望みましょうや。でも、これだけはお願い申上げます。この商人と、他生に於いても、友人でありとう存じます。』

と申しました。

『よろしい。』

と、天上の声が言い終りますと、シャバラ王はわたしに莫大な富を与えて、わたしをヴァッラヴィーの家に送り還しました。わたしが死の虎口を免かれて旅行から還りますと、一部始終を知りました父はわたしのために大祝宴を催しました。

暫らくして、わたしはかのシャバラ王が隊商を襲撃し掠奪した罪により、王の命令で連行されるのを見ました。わたしは直ちに父に告げ、王に助命を嘆願して、十万金を支払って、彼を死刑より救いました。このようにして、わたしはわたしの生命の恩人に返礼をしまして、彼をわたしの家に連れ帰り、長い間彼を厚くもてなしました。彼を歓待して送り還しますと、彼はわたしに

深い愛情を抱いて、自分の村に帰ってゆきました。彼はわたしが返礼として行った行為に対して、返礼を考えましたが、自分の自由になる真珠や麝香などでは不十分と思いました。そこで、彼はわたしのために特に素晴らしい頸飾りを得ようと思い、弓を携えて、象を射るために、ヒマーラヤ山に出かけました。山中を歩き廻っていました彼は、岸辺に神殿のある大きな池のほとりに着き、彼がわたしに対するのと同様に、その友（太陽）に誠実を捧げている池の蓮華に歓迎されました。彼は森の象が水を飲みに其処にやって来ると思い、そのとき象を殺そうと考えて、弓を携えたまま身を隠していました。とかくするうちに、獅子に乗って、其処の神殿に祀ってあるシヴァ神に詣でるために、世にも稀に美しい乙女が、池の岸辺に来るのを見ました。彼女は乙女でありながらも、シヴァ神に仕えるパールヴァティー（シヴァ神の妃）の妹のようでありました。わが友のシャバラは彼女を見て、不思議な念にうたれて考えました。

『彼女は一体誰なのであろうか。彼女が人間界の乙女であれば、彼女は何故に獅子に乗っているのであろうか。もし彼女が神であるとすれば、自分のごとき者にどうして見えるだろうか。彼女は確かに前世に於けるわたしの眼の功徳が、権化して顕現した人に相違ない。もし彼女をわが友と結婚させることができるならば、わたしは彼に別の素晴らしい返礼をすることができよう。だから、わたしはまず彼女に訊ねるために近づくのが得策だ。』

と考えまして、彼女に近づきました。その間に、その乙女は樹蔭に坐った獅子から下り、池の蓮華を手折りはじめました。わが親友が近づいて彼女に会釈をしますと、彼女は彼が見知らぬ男で

はありましたが、客人に対する親愛の情を顔に浮べて、彼を歓迎しました。

『あなたはどなたですか。また、この近づき難い土地に何故に来られましたのですか。』

と、乙女が彼に訊ねましたので、彼は答えました。

『わたしはシャバラ族の王で、バヴァーニー女神（シヴァ神の妃パールヴァティーの別名）の足を唯一の庇護と崇める者であります。わたしは象の頭から真珠を採るために、この森にやって来ました。そして、あなたを見まして、女神よ、わたしは今わたしの命を救うてくれました親友のことを思い出しました。その人は紳商の息子で、ヴァスダッタという吉祥ある人です。と申しますのは、彼はあなたのように、美しい方よ、容姿に於いても、若さに於いても、ならぶ者がなく、この世の一切の者の眼にとって甘露の泉であるからであります。友情と寛仁と同情と忍耐との宝庫であるこの人によって、腕環をはめた手をこの世に於いて把られる乙女は幸福です。ですから、あなたのように美しい容姿がこのような男にふさわしくないとすれば、カーマ（愛の神）が無駄に弓を携えているのを悲しまずにはいられません。』

と言いますと、このシャバラ王の言葉を聴きました乙女の心は、あたかも愛の神カーマの人間を魅惑する呪文の音節によって迷わされたかのように、忽ちに夢中になってしまいました。愛情に駆りたてられて、彼女はシャバラ王に

『あなたのお友だちは何処にいられますか。そのお方を連れてきて、わたしに会わせてくださいませ。』

と言いました。シャバラ王は承諾して、直ちに彼女と別れて、自分の目的は達成されたと考え、心をはずませて出発しました。彼はまず自分の村に帰り、真珠や麝香などを数百人の人夫が運ぶほど沢山に携え、わたしたちの家にやって来ました。一同に迎えられました彼は、携えてきました万金の価の贈物を、わたしの父に差し出しました。その日とその夜を宴会で過しますと、彼はわたしに美少女と出会った一部始終を詳しく物語りました。彼は非常に熱心に

『来なさい。われわれは其処へ行こう。』

と言って、わたしを連れて、シャバラ王はこっそりと抜け出しました。翌朝になって、わたしの父はわたしがシャバラ王とともに何処かに行ったことを知りましたけれども、父は彼の親愛の情に信頼していましたので、少しも騒ぎませんでした。わたしは勇敢なシャバラ王に連れられて、漸くにして雪山にゆきました。彼は途中なにくれとなくわたしの世話をしてくれました。

そして、ある夕方、わたしとシャバラ王とその池に到着し、水浴をし、美味な果実を食べて、その一夜を傍の森で過しました。蔓草の花が咲き乱れ、蜂の唸声も耳ざわりよく、香気爽やかな微風が吹き、燈火のように輝く草が生い茂って、あたかもラティ（愛の神カーマの妃）の部屋のような森の中で、わたしたち二人は池の水を飲んで、その夜を憩いました。

その翌日、かの乙女がやってきました。わたしの心は彼女に対する思慕に溢れて、彼女に会うために飛んでゆくかのようでしたし、わたしの右眼は彼女の来るのを一刻も早く察知して、彼女を見ようとして喘ぐかのようでありました。鬣のある獅子に乗りました彼女を見ますと、彼女の

美しい眉は秋雲の膝に憩う月輪さながらでありました。そして、彼女を見つめましたとき、わたしの心に驚愕と憧憬と混乱とが起りましたが、何故に起ってきたのか判りませんでした。乙女は獅子から下りて、花を摘み、池で水浴をして、池の岸に祀られているシヴァ神に詣でました。彼女の参詣が終りますと、わたしの親友のシャバラ王は彼女に近づき、会釈をして名のり、慇懃に彼を迎えた彼女に言いました。

『あなたにふさわしい、わたしの友人を連れてきました。あなたがよいとお考えになりますならば、その人を今あなたにお会わせいたします。』

と言いますと、彼女が

『会わせてください。』

と申しましたので、シャバラ王はわたしを連れていって、彼女にひきあわせました。彼女は愛情を現わした眼でわたしを横目で見まして、恋の神に取憑かれ圧倒されて、シャバラ王に

『あなたのお友だちのこの方は人間ではありません。この方は必ずやわたしを誑すために来られた神さまです。人間であれば、どうしてこのように美しいお姿でありえましょう。』

と申しました。この言葉を聴きますと、わたしは彼女の疑惑を払うために、自分から言いました。

『美しい方よ、わたしは確かに人間です。あなたのように立派な方に、どうして偽瞞など用いえましょう。と申しますのは、わたしはヴァッラビーに住むマハーダナと申す商人の息子で、わたしはマヘーシュヴァラ（大自在天。シヴァ神の異名）の恩寵によって生れた者です。父が息子を得たいと望みま

して、シヴァ神を宥めるために苦行を行じましたとき、かの神は満足され、夢の中で
『立上れ、汝に偉大な息子が生れるであろう。これは最高の秘密で、詳細に述べる必要はない。』
と宣われました。この言葉を聴きまして、わたしの父は眼が覚めましたが、程なくわたしが生れました。わたしはヴァスダッタという名で知られています。そして、このシャバラ王は嘗てわたしが外国に赴きましたとき、みずから親友に選んだ人でありまして、この人はわたしが不幸に陥ったときの唯一の援助者です。わたしに就いて、本当のことを簡単に申上げますと、以上の通りです。」
と、わたしが言い終えますと、かの乙女は羞ずかしそうに顔を伏せて語りました。
「仰せの通りであることを存じております。昨夜、夢の中で、シヴァ神はわたしの礼拝に満足されまして、わたしに
『明朝、そなたは夫を得るであろう。』
と、宣示されました。ですから、あなたはわたしの夫です。そして、このお友だちは兄弟です。」
と、彼女は甘露のような声で言いまして、わたしを悦ばせました。そこで、わたしは彼女と相談しまして、結婚式を掟通りに挙行するために、親友とともにヴァッラビーの自分の家に帰ろうと決心しました。すると、かの美少女は独自の合図で獅子を呼び寄せ
「あなた、これにお乗りなさいませ。」

と言いました。目的を達しましたわたしは獅子に乗り、愛する彼女を抱きかかえ、親友と一緒に出発しました。愛人と一緒に獅子に乗りましたわたしを、親友のシャバラ王は案内してくれました。親友が射とめた鹿の肉を食べながら、われわれ一行は遂にヴァッラビー都城に到着しました。すると、獅子に乗って、わたしが愛人を連れて帰ってきたのを見まして、人々は驚き、わたしの父のところへ急いで行って、その旨を伝えました。父は大喜びでわたしたちを出迎え、獣類の王から下りて足許にひれ伏しましたわたしを見まして、驚きの眼を見張りながらわたしたちを歓迎してくれました。他に比類のない美しい乙女が足許にひれ伏しているのを見まして、わたしにふさわしい妻であることを知り、わたしの父は嬉しさのあまりに我を忘れんばかりでありました。家に這入って、わたしたちに一部始終を訊ね、父はシャバラ王の友情を讃えて、大饗宴を催しました。

　こうして、占師の指示に従って、その翌日、わたしは親族の者一同の集る中で、美しい乙女と結婚式を挙げました。わたしの妻が乗っていました獅子は、わたしたちの結婚式を見ますと、そのとき突然に衆人の眼前で、人間の姿となりました。何事かと、すべての人々が思い惑うていますと、神々しい衣裳と装飾品を身につけたこの人は、わたしに会釈をして、次のように語りました。

「わたしはチトラーンガダというヴィディヤーダラで、この娘はマノーヴァティーといい、わたしにとっては生命よりも可愛い娘です。この娘を抱きかかえて森を廻っていましたが、ある日、

岸辺に多くの苦行林のあるガンジス河に着きました。苦行者たちの邪魔をしてはいけないと思って、その河の真中を歩いていましたとき、偶然にもわたしの華鬘が水中に落ちました。すると、水中にいましたナーラダ仙が突然に立上り、華鬘が彼の背中に落ちたことを怒って、わたしを呪詛しました。

『悪者よ、行け。この無礼によって、汝は獅子となれ。ヒマーラヤ山に行って、その娘を背に乗せていよ。その娘が人間と結婚したとき、それを目撃すれば、汝はこの呪詛より解放されるであろう。』

と、ナーラダ仙から呪詛されましたわたしは獅子となって、シヴァ神の礼拝に専念する娘を背に乗せて、ヒマーラヤ山中にいました。そして、その後、シャバラ王の尽力によって万事好都合に運んだことは、みなさんが御存知の通りです。ですから、わたしは行きます。あなたがた、御機嫌よう。わたしにかけられた呪詛は終ったのです。」

と言いまして、かのヴィディヤーダラは忽ちに天空に飛び去りました。わたしの父はこの奇蹟に驚嘆するとともに、一族の者たちの喜びを見たのみでなく、また勝れた縁の結ばれたことに満足しまして、大宴会を開きました。

「親友に自己の生命を捧げても、まだ満足しないような誠実な友人の行為を、誰が想像しうるであろうか。」

と、かのシャバラ王の気高い行為を思い出しては、驚嘆して語らない者はありませんでした。そ

の土地の王も仔細を知り、シャバラ王のわたしたちに対する親愛の情にいたく満足しました。王が満足しましたので、わたしの父は森林地方をのこらずシャバラ王の領土として授けるよう王に懇請し、また彼に宝石を贈りました。こうして、目的を成就しましたわたしは、妻のマノーヴァティーと親友のシャバラ王とともに、幸福に暮しました。シャバラ王は、自分の国に住むよりも、わたしの家に住むのが一層楽しいと考えて、わたしたちと一緒に暮したのでした。親友である彼とわたしの両人は、いつも互いに好誼を交して、それに満足することがありませんでした。

そして、間もなく、マノーヴァティーにわたしの息子が生れました。この子は一族の者すべての心の歓喜がこの世に権化したかのようでありました。ヒラヌヤダッタという名の息子は次第に成長しまして、聖典の掟に従って学問を終えた後、結婚しました。それを見ましてわたしの父は一生の目的が成就したと考え、老齢でしたので妻を連れてガンジス河に赴き、自己の肉体を捨離しました。わたしは父の死に悲嘆の涙に暮れましたが、親族の者たちから漸くなだめられて心をとりなおし、自分の家の重責を担うことを承知しました。当時のわたしにとって、一方ではマノーヴァティーの美しい顔を見ることが、他方ではシャバラ王との交友関係が、わたしの楽しみでありました。こうして、わたしは善き息子に期待し、美しい妻に心をひかれ、そして親友の情誼を享受しながら、楽しく毎日を送りました。

こうして、幾歳月を経て、富裕なわたしの顎を捉え、あたかも

「倅よ、お前は何故に今なお家にいるのか。」

と、わたしに対する愛情から、わたしの為を思って言ってくれるかのようでありました。突然に離欲の念が生じましたので、わたしは森林に隠遁しようと思い、自分の息子に家事の重責を委ね、妻を連れてカーランジャラ山*に赴きました。シャバラ王も、わたしに対する親愛の情から王国を捨てて、同行しました。その地に到着しますと、わたしはヴィディヤーダラであった自身の前生を思い出し、またシヴァ神の呪詛の満了したことを突然に思い出しました。そこで、そのことを妻のマノーヴァティーと親友のシャバラ王に語り、人間の肉体を解脱したいと念じました。

「この友と妻とを、来世に於いても得んことを。また、今世を思い出さんことを。」

と唱えて、シヴァ神を心に念じて、妻と親友とともに、勇しく山の断崖から身を投じて、肉体を解脱しました。こうして、わたしは前生を思い出すことによって、このヴィディヤーダラの家に、ジームータヴァーハナという名で生れたのです。かのシャバラ王は、シヴァ神の恩寵によって、シッダ族の王ヴィシュヴァーヴァスの息子のミトラーヴァスという貴君となって生れたのです。そして、友よ、わたしの妻マノーヴァティーであった、かのヴィディヤーダラの女は、あなたの妹マラヤヴァティーとなって生れました。このように、あなたの妹御は嘗てわたしの妻でしたし、あなたもわたしの親友でありました。ですから、わたしがあなたの妹御と結婚することは当然のことです。しかし、あなたはまずわたしの両親のところへ行かれて、このことを話してください。わたしの両親が承諾すれば、あなたの御希望は適うでありましょう。」

この話をジームータヴァーハナから聴きましたミトラーヴァスは、喜び勇んでジームータヴァーハナの両親の許にゆき、のこらず話しました。ジームータヴァーハナの両親が彼の言葉を喜んで聴きいれますと、ミトラーヴァスは喜んで、直ちに自分の両親の許に帰り、同じことを話しました。両親が希望の成就したことを喜びますと、かの太子は急いで妹の結婚の準備をしました。こうして、ジームータヴァーハナはシッダ族の王に崇められて、聖典の掟に従って、マラヤヴァティーの手をとりました。大宴会が催され、天上の楽人たちが大騒ぎをし、シッダ族の群が集い、愉快なヴィディヤーダラ族の者たちは踊り狂いました。ジームータヴァーハナは妻のマラヤヴァティーとともにマラヤ山に住み、非常に栄えて暮しました。

あるとき、ジームータヴァーハナが義兄のミトラーヴァスとともに、海岸にある森林を見にゆきました。其処で彼は若い男がおびえた様子で、

「ああ、伜や。」

と泣きすがる母親を追払いながらやって来るのを見ました。すると、兵士のような別の男が追っかけて来て、その男を高くて広い大きな岩石のところへ行かせて、彼を見捨てて立去りました。彼が

「あなたは誰ですか。何をしようとしているのですか。また、何故にあなたは母上を悲しませるのですか。」

と訊ねますと、その男が一部始終を物語りました。

〔鳥王ガルダと竜族の物語〕*

「むかし、カシャパ仙の二人の妻のカドゥルーとヴィナターとが互いに話し合っていましたとき、議論になりました。カドゥルーは太陽の馬が黒色であると言い、ヴィナターは白いと言い、負けたときには相手の奴隷になるという約束を結びました。そこで、勝利を冀うたカドゥルーは、自分の子の竜族の者を説いて、太陽の馬に毒を吐きかけさせて汚しました。そして、汚れた太陽の馬をヴィナターに見せ、策略によって彼女を打負かして、奴隷としました。まこと、女どもの悪意は怖ろしいものです。そのとき、ヴィナターの子のガルダ（神話的な巨鳥。鳥類の王とされる）がこのことを知って、叮嚀な言葉で、母を奴隷の境遇から解放するように、カドゥルーに懇請しました。すると、カドゥルーの子の竜族の者は策を弄んで

『おお、ヴィナターの子よ、神々が乳海を攪拌*しはじめられた。其処から甘露（不死の神酒）を持参して、代償としてわれわれに与えよ。そうすれば、君は母を取返すことができよう、君は勇者の中でも勝れた勇者であるから。』

と言いました。この言葉を聴きますと、ガルダは乳海に行って、甘露を得るために大力を発揮しました。すると、ハリ（ヴィシュヌ神の異名）は彼の力を賞讃されて

『余は汝に満足じゃ。何か恩寵を選ぶがよい。』

と、ガルダに仰せられました。ヴィナターの子は母が奴隷の境遇にいるのを怒っていましたので、

『竜どもをわたくしの食物にしてください。』

と、ヴィシュヌ神に恩寵を懇請しました。神はそれに同意し、ガルダは自身の勇気によって甘露を得ました。そのとき、この事情を知りましたインドラ神が彼に

『鳥王よ、愚かな竜どもが甘露を飲まないで余がそれを取戻せるようにせよ。』

と言いました。この言葉を聴きますと、ヴィシュヌ神の恩寵に元気づけられていましたガルダはそれを承諾して、甘露をいれた瓶を持って、竜族のところへ近づきました。彼は遠く離れたところから、神の恩寵の威力を怖れた竜族の者たちに

『ここに甘露を持ってきた。わたしの母を放免して、これを受取れ。お前たちがわたしを怖れているならば、わたしはこれをクシャ草*の敷藁の上に置こう。わたしは母が放免されれば立去ろう。お前たちはこの瓶から甘露を飲むがよい。』

と語りました。竜族が同意しますと、ガルダはクシャ草の清浄な敷藁の上に甘露を容れた瓶を置き、母のヴィナターを連れ去りました。ガルダがこのように母を奴隷の境遇から抜け出させて去りますと、竜どもは安心して、その甘露を嘗めていました。すると、インラド神が突然に舞い下りて、その威力で竜族を惑わせ、甘露の瓶をクシャ草の敷藁の上から奪い去りました。竜族の者は失望して、こぼれた甘露の滴りが少しでもありはしないかと、クシャ草の敷藁を嘗めました。彼等の舌は尖った葉のために裂かれて、無残にも二つになりました。貪慾すぎる者に対する果報

として、嘲笑のほかに何がありましょうか。こうして竜族は不死の神酒（甘露）を得ることができず、しかも彼等の敵ガルダはハリ（ヴィシュヌ神）の恩寵によって、再三再四舞い下りては、彼等を喰いはじめました。ガルダが竜族を襲いましたので、パーターラ（竜族の住む地下界）では恐怖のために竜が死に、妊んだ竜が流産して、竜族は絶滅に瀕しました。竜王ヴァースキはこのさまを毎日見まして、竜の世界がすべて忽ちに滅亡すると考えました。こうして、ヴァースキはガルダが抵抗しがたい威力を持っていることを考え、直ちにガルダに哀訴し、次のような協定を結びました。

『鳥王よ、毎日海浜の砂山に竜を一匹ずつあなたの食物として差し出します。しかしわれわれに破滅をもたらすあなたは、パーターラには這入らないでください。竜の世界が絶滅すれば、あなた自身の目的も消滅するでしょう。』

と、ヴァースキが申出ますと、ガルダはそれを承諾し、ヴァースキが此処に毎日送ってくる竜を食べはじめました。このため、無数の竜が此処で死にました。そして、わたくしはシャンカ・チューダという竜ですが、今日がわたしの番なのです。このため、わたしは竜王の命により、ガルダの食物となるために、死刑台である、この岩のところにやってきました。このことが母を嘆き悲しませるのです。」

と、かのシャンカ・チューダの言葉を聴きまして、ジームータヴァーハナは深く悲しむとともに、可愛そうに思い、彼に

「嗚呼、ヴァースキが自分の手で部下の者を、敵の食物に提供するとは、彼の王政は何という無残なことであろうか。何故に彼はまず自身をガルダに与えないのであろうか。かの臆病者は自分の種族の滅亡の如何なる証拠を望んでいるのであろうか。また、ガルダも、カシヤパ仙の子と言いながら、何という悪事をするのであろうか。偉大な者たちといえども、肉体のためのみに、何という馬鹿なことをするのであろうか。従って、ともあれ、わたしは自分の肉体を与えて、今日、君をガルダから護ってあげよう。友よ、決して心配するではない。」

と言いました。決断力のあるジームータヴァーハナから、この言葉を聴きまして、シャンカ・チューダが言いました。

「偉丈夫よ、それはいけません。そのようなことを、二度と言わないでください。硝子のために真珠を砕くのは、ふさわしくありません。また、わたくしも種族の名誉を汚したという非難を受けたくはありません。」

と言いまして、善良なシャンカ・チューダはジームータヴァーハナを思いとどまらせ、間もなくガルダの来る時刻と考え、死期に際して、ゴーカルナという名で海浜に立てられているシヴァ神の像を礼拝しに出かけました。

シャンカ・チューダが立去りますと、慈悲の蔵ともいうべきジームータヴァーハナは、自己を犠牲にして死すべき時機が来たと覚りました。こうして、彼は直ちに策を用い、仕事を忘れた風を装うて、それを口実にミトラーヴァスを自分の家に帰らせました。そのとき、近づくガルダの

翼の捲き起す風に叩かれて、あたかも彼の勇気に感動したかのように、大地が震動しました。その音によって、ジームータヴァーハナは竜の敵が近づいたことを知り、他人に対する同情心の厚い彼は死刑台の岩の上に登りました。すると、忽ちに、ガルダがその影で天空を暗くして舞い下り、嘴でかの偉丈夫を銜えて運び去りました。ガルダは、血を滴らし宝冠の宝石がもぎとられて落ちたジームータヴァーハナを運んで、山の頂で彼を喰いはじめました。そのとき、花の雨が天空から降りました。ガルダはそれを見まして

「一体、これは何事か。」

と、いぶかしく思いました。

さて、シャンカ・チューダはゴーカルナに礼拝して帰ってきまして、死刑台の上が血の滴りで濡れているのを見ました。

「嗚呼、あの偉大な心の持主は、必ずや自身を犠牲にしたに相違ない。では、この短時間に、ガルダはあの方を何処へ連れ去ったのであろうか。兎も角、急いであの方を探さねばならぬ。いつか、あの方を見つけることができよう。」

と、善良なシャンカ・チューダは血の滴りの跡を辿ってゆきました。

話かわって、ガルダはジームータヴァーハナが喜んでいるのを見て、食べるのをやめ、不思議に思って考えました。

「この人は誰か別人らしい。俺に喰われているにも拘わらず、この人は少しも騒がない。この

勇猛心のある人は、俺に喰われるのを寧ろ喜んでいる。」

と、ガルダが考えていますと、ジームータヴァーハナは、このような状態にありながらも、自己の目的の成就のために言いました。

「鳥王よ、わたしの肉体にも肉と血がある。君は満腹しないにも拘わらず、何故に突然に食べるのをやめたのか。」

という言葉を聴きますと、鳥王は驚異の念にうたれて、

「高貴の方よ、あなたは竜ではない。あなたはどなたですか、兎に角、話してください。」

と訊ねました。ジームータヴァーハナが

「わたしは竜である。わたしを食べよ。始めたことは為しとげよ。勇猛心のある者は、始めた所行を為しとげないで、中途で放棄することは決してない筈である。」

と答えていましたときに、シャンカ・チューダが其処へやって来まして、遠くから叫びました。

「駄目です、駄目です、ガルダよ。その方は竜ではない。わたしがあなたのために遣わされた竜です。だから、その人を放しなさい。あなたはまた何という誤謬を突然にするようになったのですか。」

という声を聞きまして、かの鳥王は非常に驚きました。また、ジームータヴァーハナは彼の希望が成就しなかったことを悲しみました。こうして、互いに話合って、ヴィディヤーダラ王(ジームータヴァーハナ)が自分の希望の成就しなかったのを嘆いて泣いていることを知り、ガルダは心

の迷からこのような気高い人を食べたことを、心から悲しみました。

「嗚呼、残忍な所行をして、わたしは罪を犯した。まことに、道を踏みはずした所行をする者は、罪障を得やすいものである。迷妄に左右される一切のものを蔑んで、他人のために、自己の生命をさえ与えた、この偉大な志の人こそ賞讃されるべきである。」

と、ガルダは考え、罪障の消滅のために火に身を投じようとしましたので、ジームータヴァーハナが語りました。

「鳥王よ、何故にそなたは煩悶しているのか。まこと、そなたが罪を怖れているならば、今後決して竜族を喰うべきではない。そして、これまでに竜族を喰うたことを後悔すべきである。これが今の場合唯一の贖罪で、他のことを考えるのは、そなたにとって無駄である。」

と、有情に対する慈悲心に満ちたジームータヴァーハナから言われますと、ガルダは安心し、あたかも師匠の言葉に服従するかのように、彼の言葉に従いました。そして、ジームータヴァーハナの損壊しました四肢を速かに癒し、また骨のみが残っている竜族のものを生き返らせるために、甘露をとりに天に行きました。ジームータヴァーハナの誠信を喜ばれたガウリー女神（シヴァ神妃パールヴァティーの異名）が姿を現示されて、彼に甘露を注がれました。それによって、歓喜した神の太鼓の音とともに、彼の四肢は以前にまして美しく再生しました。彼が元気に立上りますと、ガルダはその甘露を受取って、天空から海浜一帯にそれを雨と降らせました。それによって、竜族はすべて其処に生き返りました。そして、そのとき、数多くの竜の集まった海浜の森林は、ヴィナターの子（ガルダ）の恐怖から解放されて、ジームータヴァーハナを見に来ましたパーターラさながらに、輝きました。こうして、ジームータヴァーハナが不滅の肉体と名声によって輝いているのを知り、彼の親族は彼を歓呼して迎えました。彼の妻も、彼女の身内の者とともに、また彼の父も、非常に喜びました。不幸が幸福に転じたときに、それを喜ばない者がありましょうか。シャンカ・チューダは許されて、地下界に帰ってゆきました。そして、ジームータヴァーハナの名声は、おのずから巧まずして、三界に拡がってゆきました。

こうして、雪山の娘（シヴァ神妃パールヴァティーの異称）の恩寵によって、長い間敵であったマタンガ（鬼霊の一）などすべての親族の者たちが、ヴィディヤーダラ族の栄光であるガルダ（ここではジームータヴァーハナをさす）の許に怖る怖るやって来まして、彼の前に平伏しました。神の群さえ、彼に対する親愛の情から、彼に敬意を表わしました。彼等から懇請されて、徳高きジームータヴァーハナはマラヤ山から、自身の棲処である雪山の斜面に行きました。その地で、勇猛心のある彼は、両親、親友のミトラーヴァス、妻のマラヤヴァティーとともに、長い間ヴィディヤーダラ族の転輪王の栄誉を享受しました。このように、幸運は常に相ついで、三界のすべてを驚嘆させるような所行の人々の跡を、みずから追うものであります。

と、ヤウガンダラーヤナの口から偉大なヴィディヤーダラ王ジームータヴァーハナの物語を聴きまして、胎児の勝れた偉大さを聴くことを熱望していましたヴァーサヴァダッター妃は非常に喜

びました。好意を寄せ恵みを垂れられる神々の教示を、王妃は常に信じていましたので、彼女はこの物語の中にほのめかされたヴィディヤーダラ族の未来の王者たるべき自分の息子のことを語りながら、夫の傍でその日を過しました。

三

こうして、その翌日、大臣高官に囲まれたヴァツァ王に、ヴァーサヴァダッターが語りました。

「あなた、わたしがこの子を妊って以来、この子をどうして立派に生もうかと心配でなりません。昨夜もそのことを考えて、ほとんど睡れませんでした。すると、はっきりと覚えていますが、夢の中で一人の男の方がやってきました。その方は月輪を冠とし、金褐色の束髪を持ち、身体に赤色と白色の灰を塗り、三叉の戟を手にして現われられ、輝いていられました。その方はわたしに近づかれて、憐れみを垂れられるかのように、このように言われました。

『娘よ、妊った胎児のことを決して心配するのではない。わたしがそなたに胎児を授けたのであるから、わたしが守護してあげよう。そなたが余を信頼するようになるため、別のことを話すゆえ、よくお聴き。明朝、一人の女が嘆願に来るであろう。その女は自分の夫を罪人のように罵りながら、曳きずって来るであろう。この女は不埒な女で、夫を自分の親族の力で殺そうとしているのだ。女の申すことはすべて偽りである。娘よ、ヴァツァ王に、あの善良な人物が悪い女に瞞されないように予め知らせておくがよい。』

と、教示されますと、かの尊者は姿を消されました。途端に、わたしは眼が覚めましたが、そのときは曙光が輝きそめていました。」

と、王妃が話しますと、その座に列っていました人々はみなシヴァ神の恩恵を語って驚嘆し、このお告げの実現することを心から願いました。すると、そのとき侍衛長官が這入ってきまして、困窮者に憐れみ深いヴァツァ王に奏上しました。

「陛下、一人の女が嘆願に参りました。この女は親族の者たちに取囲まれ、五人の子を連れ、無力な夫を罵っております。」

という言葉を聴きまして、王は王妃の夢のお告げの通りであるのに驚嘆し、

「その女を此処に連行せよ。」

と、侍衛長官に命じました。ヴァーサヴァダッター妃も前夜の夢が正夢であったことから、よき息子の生れることが確かであると知って、非常に喜びました。

さて、列座の人々が好奇心に駆られて扉の方を見ていますと、女が夫を連れて這入ってきました。悲惨な様子を装うたその女は這入ってきますと、掟の通りに王に拝礼し、妃とともに法廷にいる王に奏上しました。

「この男はわたしの夫であるにも拘わらず、罪もない無力なわたしに、食物や衣服などを与えませせぬ。」

と、女が申立てますと、女の夫は

「陛下、この女の申すことは偽りであります。この女は親族の者と一緒にわたくしを殺そうとしております。」

と申しました。王が

「その点について、三叉の戟を持つ神（シヴァ神の異称）が王妃に、夢の中で証拠を示された。従って、これ以上、何の証拠が必要であろうか。この女は親族の者と一緒に、処罰されるべきだ。」

と言いますと、賢明なヤウガンダラーヤナが申しました。

「陛下、そうでございましょうが、やはり証人の証言に従って処断すべきであります。王妃の夢を知らない世間は、それを信じないでありましょう。」

という諫言を聴きまして、王は同意しました。直ちに証人を喚問して訊問しますと、証人たちはその女が虚偽を申立てている旨を陳述しました。こうして、ヴァツァ王は、世間から良い夫であると認められた男と誣いて虚偽を申立てる女を、親族の者および子どもたちと一緒に、領土の外に追放しました。そして、同情心に満ちた心の持主である王は、この善良な夫に、別の結婚をするのに十分な財貨を沢山に与えて、釈放しました。

「残忍な性質の悪妻は、夫が不運の穴に落ちて困窮しているとき、あたかも牝狼のように、未だ生きている夫を引裂くものである。これに反し、愛情深く、生れよく、雅量のある妻は、あたかも道傍の樹蔭のように、苦しみを取除いてくれる。そして、このような妻は、誰であっても、

その人の福徳によってえられるのである。」

と、王が熱意をこめて話しますと、傍に侍坐していました賢明な侍従のヴァサンタカが語りました。

「さらに、陛下、愛憎は一般にこの世に於いては、前生の業（ごう）の習気*によって生じます。この点に関して、こういう物語をお聴きください。お話し申しあげましょう。」

〔シンハ・パラークラマの物語〕

ヴァーラーナシー（現在のベナーレス）に、ヴィクラマ・チャンダという王がありました。この王の寵臣にシンハ・パラークラマという者がいました。この男はあらゆる戦闘に於いても無比の勝利者でしたが、博奕でも無類の巧者でした。彼の妻は容姿が醜悪でしたが、その心もそれに劣らず醜悪で、その性質をよく現わしたカラハ・カーリー（「喧嘩好きな女」の意）という名で有名でした。勇猛心のあるシンハ・パラークラマはいつも王から拝領した金や博奕で得た金を、沢山に、たびたび、みな妻に渡していました。しかし、性悪な彼女は、彼との間に生れた三人の息子と一緒になって、絶えず彼と争い、一瞬の間もその絶え間がありませんでした。

「あんたはいつも外で飲食して、わたしたちに何も呉れないではありませんか。」

と、子供たちと一緒になって喚いて、いつも彼を苦しめました。彼は食物や飲物や衣服で彼女を

慰めていましたけれども、彼女は際限のない強欲者のように、日夜激しく彼を責めさいなみました。こうして、遂にシンハ・パラークラマはその悲しみに堪えかねて、家を捨て、ヴィンディヤ山に住む女神（シヴァ神妃パールヴァティーの異称）を参詣する旅に出ました。女神は断食して参籠している彼の夢の中に現われられて、垂示されました。

「わが子よ、立上れ。ヴァーラーナシーの都に行け、その地に巨大な榕樹があるが、その根元を掘れば、そなたは容易に財貨を得るであろう。その中から、あたかも地上に落ちた天の一片のような、一点の曇りもない刃のように輝く緑柱石製の皿を得るであろう。その中を覗き見るならば、そなたが知りたいと思う如何なる人の前生であれ、それがその中に映しだされるのを見るであろう。それによって、そなたは自身のみならず妻の前生を知り、本当のことを知って、そなたは悲しみもなくなり、幸福に暮すようになるであろう。」

と、女神から垂示されましたシンハ・パラークラマは、眼が覚めますと断食をやめ、朝のうちにヴァーラーナシーに向けて出発しました。

シンハ・パラークラマはヴァーラーナシーの都に到着しまして、かの榕樹の根元から財宝を掘り出し、その中から宝玉製の大きな皿を得ました。そして、本当のことを一刻も早く知りたいと思い、皿の中を覗いて、前生に於いて彼の妻は怖ろしい牝熊であり、自身は獣王であったことを知りました。こうして、彼は前生に於ける激しい敵意の影響によって、妻と自分との間の憎悪が無意識の中に現われて避けがたいことを知り、彼は悲しみと迷妄とを捨てました。そこで、彼は

皿の神秘な力によって多くの娘の前生をしらべ、性に合わぬ種族に属していたことを知った場合には、避けました。そして、前生に牝獅子である女を見つけ、その女が自分にふさわしいと考えて、シンハ・シュリーという彼女を第二の妻に迎えました。先妻のカラハ・カーリーには食物のみを与えて、財宝を得ましたシンハ・パラークラマは新らしい妻と仲睦まじく、幸福に暮しました。

このように、大王よ、妻などでも前生の余力*のために、この世に於いて、人間の愛憎の対象となるのであります。

と、ヴァサンタカからこの奇しき物語を聴きまして、ヴァツァ王はヴァーサヴァダッター妃とともに、非常に喜びました。このようにして、幾日かが過ぎましたが、王は妊娠した王妃の月のような顔容を日夜眺めて、飽きることがありませんでした。程経て、大臣たちのすべてに、未来の福運を予示する吉相を備えた息子が生れました。最初に、宰相の首席ヤウガンダラーヤナに、マルブーティという息子が生れました。次に将軍ルマンヴァットには、ハリシカという息子が生れ、侍従ヴァサンタカにもタパンタカという息子が生れました。さらに、ニティヤカ、また別名をイティヤカという侍衛長官には、ゴームカという息子が生れました。これらの息子が生れて、盛大な祝宴が催されていますと、

「これらの者は未来の転輪王たるヴァツァ王の王子の大臣となって、敵の家を粉砕するであろ

う。」

と、天上から声が聞えてきましたが、その声の主の姿は見えませんでした。

こうして、日を経て、ヴァーサヴァダッター妃がヴァツァ王のために幸運を齎らすべき王子を生む日が近づきました。王妃は子を持つ侍女たちが調えた産室に移されましたが、その部屋の窓は装飾麗わしくアルカ樹*とシャミー樹*で蔽われていました。産室の中には数々の武器が垂れ下げられ、胎児を守護するために抜身とされ、その輝きは宝燈の輝きと交錯して、瑞相に満ち溢れていました。また、その部屋は呪師たちの唱えた数々の呪頌に守護されて、不幸も襲撃しえない母性の堡塁のようでありました。

そして、時至って、王妃はその部屋で麗わしく愛らしい王子を生みました。あたかも天が甘露の満ち溢れた、清らかな光を放つ月を生み出したかのようでありました。王子が生れますと、その部屋を照らし輝かしたばかりでなく、母の心を照らして、心配の暗黒は消え失せました。こうして、後宮に住む人々の歓喜が拡がり、ヴァツァ王は後宮に出入する人から王子の誕生を聞きました。王が喜びの余りに、このよき報知をもたらした人に、王国を下賜しませんでしたのは、不適当なことをしないように注意したためであって、彼が貪慾であったからではありませんでした。王は弥猛にはやる心で直ちに後宮に赴き、王子を見ました。彼の希望は漸くにして実を結んだのでした。王子の下唇は赤味を帯びていて長く、あたかも嫩葉のごとく、揺ぐ美しい頭髪は羊毛のごとく、顔は覇権の女神が手にする華麗な蓮華に似ていました。また、王子の柔かな両足には、

あたかも他の王者の栄光が将来に於けるこの王子の栄光を怖れて、予めその標識を遺していったかのように、傘蓋とチャーマラ（王位の権標としての払子）の印がありました。こうして、喜悦の重さの圧迫に眼を大きく見ひらいて、王が父としての愛情の滴りにも似た涙を流していましたとき、ヤウガンダラーヤナなどの大臣たちが寿ぎ祝ううちに、天から声が次のように宣べました。

「王よ、そなたに生れた王子は愛の神（カーマ）の権化であって、この世に於いてはナラヴァーハナダッタと呼ばれるべきである。王子は間もなく一切のヴィディヤーダラ族の転輪王となり、永劫に不滅のその地位を保持するであろう。」

と宣べて、その声が止みました。そのとき、次第に天から花の雨が降りはじめ、太鼓の音が轟きわたりました。こうして、殊のほかに満悦しましたヴァツァ王は、神が行うのよりも荘厳な盛大な饗宴を催しました。音楽堂から起る楽器の音は天空に響きわたり、一切のヴィディヤーダラ族に王者の誕生を布告するかのようでありました。宮殿の塔の尖端に風に揺ぐ緋朱の旌旗は、その光彩によって、互いに赤鉛を撒き散らしているかのようでありました。地上では、歌姫たち*が集まり来って、到る処で踊り舞いましたが、そのさまはあたかも愛の神が身体を持って生れたのを、天女の群が歓喜して乱舞するかのようでありました。全都の市民は満悦した王から新らしい衣服や装飾品を授けられて、同じように輝いて見えました。富裕なヴァツァ王が家臣たちに財貨を恵みましたので、王庫のみが空になりました。故事に通じた、四方の藩侯の後宮の美人たちが、瑞兆のある護符を携え、踊子を伴い、勝れた贈物を捧げ、それぞれに立派な護衛に守護されて、鳴

りわたる楽の音につれて、あたかも諸方角が権化したかのように、四方から都城に集まって来ました。都城では、あらゆる動作は踊りのごとく、あらゆる言葉は物の充満した容器のごとく、あらゆる所行は寛大さで造られており、すべての音は音楽的でありました。また、世間の人々は赤鉛で化粧し、大地は遍歴の芸人に覆われ、全都城は歓喜に満ち溢れていました。

このように、大饗宴は日を重ねるに従って盛大となり、全市民の希望が満たされるまで終りませんでした。父王は嘗て天上の声が宣示されましたナラヴァーハナダッタという名を、掟のように王子に命名しました。そして、幼い王子は日が経つにつれて新月のように成長してゆきました。王子が二三歩よちよち歩くとき、柔かく美しい足指の爪の光沢が光るのを見ましても、また彼が片言を言うときに、歯が若芽のように生えているのを見ましても、父王は喜ばずにはいられませんでした。そして、大臣たちは幼い王子の許に、自分たちの幼い息子を連れてきまして委ねましたので、王の心を悦ばせました。まず、宰相の首席ヤウガンダラーヤナはマルブーティを、将軍ルマンヴァットはハリシカを、侍衛長官イティヤカはゴームカを、そして侍従ヴァサンタカはタパンタカという息子を連れてきました。また、司祭官のシャーンティカラも甥のシャーンティソーマとヴァイシュヴァーナラの双生児を差し出しました。そのとき、天から神が花の雨を降らせ、歓呼のどよめきは花の雨を一層吉祥あるものとしました。王は王妃とともに悦び、大臣の息子たちに数々の贈物をしました。こうして、ナラヴァーハナダッタ王子は、幼少の時にも、彼を深く敬愛し、彼のみに忠実な、六人の大臣の息子にいつも侍坐されていまして、あたかも彼の将来に

於ける大繁栄の因となる六政略*に囲繞されているかのようでありました。ヴァツァ王は、王子が喜んで愛らしい、はっきり判らぬ片言をしゃべりながら、王に愛着した諸王の膝から膝を這いまわる蓮華のような顔を、慈しみ眺めて、幸福な毎日を送りました。

マダナ・マンチュカー姫の物語

一

さて、ナラヴァーハナダッタ王子は父のヴァツァにはぐくまれて、八歳になりました。そのころ、王子は大臣たちの息子等とともに、諸〻の学問を教えられ、また数々の技芸をしこまれました。母のヴァーサヴァダッター妃も、またパドマーヴァティー妃も、王子に対する深い愛情から、夜となく昼となく王子を寵愛しました。勝れた家柄に生れた王子の容姿は次第に美しさを増し、いやます徳行は滴りおちるばかりでありましたが、それだけでなく武芸にも上達して、良い竹でつくられた弓が、弦をひかれたときに、次第に新月の形に張るようでありました。父のヴァツァ王は王子の結婚のことなどを願い、程近くその実が結ぶであろうと期待して、心楽しく時を過していました。

さて、ここに、われわれの物語の頃に起ったことを、お聴き下さい。

ヴィタスター河*の岸に、タクシャシラー*という都がありました。この都に立ちならぶ宮殿の影が河水に映じて、あたかも地下界の都城が地下から河の水面にその輪奐の美を現わしているかのようでありました。

そこにカリンガダッタという王がありましたが、王は熱烈な仏教信者で、その臣下の者たちも

のこらずターラーの夫である偉大な仏陀の信者でありました。彼の都城は絶えまなく立ちならぶ宝玉の塔廟で光り輝き、そのさまは角（つの）が高慢にも地上に比肩するものがないことを誇って突きでているかのようでありました。王は人民に対して、あたかも父であるかのように庇護を加えたばかりでなく、また師のように親しく教えを垂れました。

さて、この都城に、ヴィタスタダッタという富裕な商人がいましたが、彼は熱心な仏教信者で、仏僧に布施することに懸命でありました。彼の息子にラトナダッタという若者がありましたが、この若者はいつも父を悪人と罵っていました。

「伜よ、お前は何故にわたしを非難するのだ。」

と、父がたずねますと、この息子は苦々しい非難の色をあらわして、父に言いました。

「父上、あなたは三ヴェーダを捨てて、邪教に仕えています。婆羅門を無視して、沙門にいつも供養しているではありませんか。水浴などの厳しい掟を疎んじ、勝手気儘なときに食べることを好み、定められた頭髪の結い方を拒み、腰に襤褸をまとうのみで満足している卑賤の生れの輩がただ住居を得ようとして集まる仏陀の教えに、あなたはなぜ帰依するのですか。」

という言葉を聴いて、その商人は息子に言いました。

「法は一様ではない。世間を超越する法もあれば、一切の世間に普遍するものもある。婆羅門の教えでも、事実、情欲などの制御とか、有情に対する憐愍とか、理由もなしに一族の者とは争わないとかいうことが説かれているではないか。それに、そなたのごとき者が一切の者に無畏を

与える仏の教えを誹謗するとは、世間の人々にありがちな過失によるとはいえ、そなたらしくないことだ。人のためになるということでは、法には差別はない。わたしが慈善を行うのは、仏の教えが有情に無畏を与えるということによるのであって、他に理由はない。だから、不殺生を第一の特色とし、解脱を授けるこの教えに耽溺したとて、どうしてわたしが非法を行ったことになろうか。」

と、父が言いましても、息子は承知せず、さらに一層はげしく父を非難しました。

そこで、失望しました父は聖法の監督者たるカリンガダッタ王の許に赴き、一切を物語りました。王は口実をもうけて商人の息子を政庁に召喚し、怒ったふりをよそおって、刑吏に命令しました。

「余の聞いたところでは、この商人の息子は悪人で、兇悪なことをしでかしたとのことだ。されば、この男を容赦なく国土の攪乱者として処刑すべし。」

と、王が命じますと、父が助命を懇願しましたので、王はラトナダッタを仏教に帰依させるために二ヵ月のあいだ処刑を延期し、この期間の終りに再び連れてくることを条件として、父の手に委ねました。ラトナダッタは父に連れられて家に帰っても、恐怖におびえ、

「王に対して、自分は如何なる罪を犯したというのであろうか。」

と思いまどい、二ヵ月経てば必ずやってくる理由のない処刑のことを考えて、日夜ねむることもできず、食事もほとんど口にせずにいましたので、憔悴してしまいました。こうして、二ヵ月が

経ちますと、痩せ衰えて青白い顔をしたラトナダッタは父に連れられて、再び王の前に出ました。王はこのようにやつれはてたラトナダッタを見て、言いました。

「汝は何故にそのように痩せ衰えたのだ。食物を絶てと、余が命じたか。」

という言葉を聴きますと、ラトナダッタが王に申しました。

「わたくしは恐怖のために食事のことを忘れていました。陛下がわたくしの処刑を命ぜられましたのを聴きましてからは、わたくしは一日一日と逼ってきます死のことのみを考えていました。」

と言いましたので、王はラトナダッタに言いました。

「余は策略を用いて、汝に死の恐怖を覚らせたのだ。一切の生類の死の恐怖はまことこのようなのだ。生類を死の恐怖から救う功徳のある法よりほかに、勝れた法があるならば、言ってみよ。そこで、余は汝が仏法に帰依し解脱をえたいと望むようにと、このことを教えたのだ。と言うのは、慧智のある人間は死を怖れて解脱をえようと努力するからだ。されば、汝はこの教えに帰依する父を非難すべきではない。」

と、王の言葉を聴きますと、ラトナダッタは王の前にひれ伏して、言いました。

「陛下には、わたくしに聖法を教示されましたので、わたくしは悟るをえました。そして、解脱をえたいという願望が生じました。陛下、何卒お教え下さい。」

この言葉を聴きますと、丁度都城のお祭でありましたので、王はラトナダッタの手に、油を満

した皿を持たせて、言いました。

「この皿を持って、都城を一周せよ。汝は油を一滴もこぼしてはならぬ。もし汝が油を一滴でもこぼせば、この家臣等に汝をたちどころに斬り殺させるぞ。」

と言って、王はラトナダッタを都城の一周に行かせました。そして、家臣の者たちに抜身の刀を渡して、その後から随いてゆかせました。ラトナダッタは恐怖から油を一滴もこぼさないように注意して都城を一周し、漸くのことで王の前に帰ってきました。王は彼が油を一滴もこぼさないで帰ってきたのを見て、

「今日、都城を一周する際に、汝は誰かを見たか。」

と言いました。王の言葉を聴きますと、ラトナダッタは合掌して申しました。

「陛下、わたくしはまこと何も見ず、何も聞えませんでした。刀が落ちてくるのではないかと怖れおののいて、油を一滴もこぼさないように、一心不乱に注意して、都を一周しました。」

と、ラトナダッタが言いますと、王が彼に言いました。

「一心不乱に油に注意していたから、汝は何も見なかったのだ。されば、汝は同様に一心不乱に瞑想をなすべきだ。と言うのは、あることに専念している人は、外界の出来事に心を奪われることなく、真実を直観するからである。ひとたび直観をうれば、再び業の網にからまれることはない。これが解脱の教理で、余は簡単に要を摘んで、汝に教えたのだ。」

と、王は語って、ラトナダッタの退出を許しました。仏教の奥義を体得した彼は、王の足下

にひれ伏して、喜び勇んで父の家に帰りました。

このように、民衆の信仰までも監督していましたカリンガダッタ王に、ターラーダッターという王妃がありました。王妃は王と同じ身分の生れで、礼儀正しく所行も端正でありましたので、あたかも美しい言葉が数々の美辞麗句に長じた詩人の装飾であるのと同様に、王妃は王のこの上ない飾りで、王はこの王妃によって輝きました。王妃はまた勝れた美点に恵まれ、王を甘露の満ちた月に喩えれば、王妃はまこと月光で、王と王妃とを離しては考えられませんでした。カリンガダッタ王とターラーダッター妃とは、あたかも天国に於けるインドラ神とシャチー妃とのように、幸福に毎日を送っていました。

話かわって、丁度このお話のときに、インドラ神があることで天国に於いて大饗宴を催しました。天女たちはみな踊るために其処に集まりましたが、スラビダッターという、ひとりの美しい天女の姿が見られませんでした。インドラ神は天眼によって、この天女があるヴィディヤーダラとナンダナ園(インドラ神の楽園)で逢曳していることを知りました。インドラ神はそれを知りますと、心中おだやかでなく、考えました。

「ははぁ、彼等二人は恋に盲目となった太い奴だ。あの天女はわれわれを忘れて気儘な振舞をしているし、ヴィディヤーダラは神の園に這入りこむという不埒な所行をしている。それとも、あの哀れなヴィディヤーダラには、なんの罪もないのかな。彼奴をあの女が自分の美貌でたぶらかして、此処に引っぱってきたとすればだ。まこと、美人はその胸の高い堤の間を流れる魅惑の

水によって、情欲を制御した人さえも誘惑してしまうのだ。シヴァ神でさえ、嘗て創世主が勝れたもの(uttama-)から精粋(tila-)を集めてティロッタマー*(Tilottamā)を造られたとき、この天女を見て悩まされたではないか。また、ヴィシュヴァーミトラ仙*は天女メーナカー*を見て、苦行を止めたではないか。また、ヤヤーティ王はシャルミシュターの容色を得て、老齢となったではないか*。とすれば、このヴィディヤーダラの若者は、三界を魅了しさる力のある容色によって、天女のために連れてこられたのであるから、罪を犯したのではない。しかし、この天女は神々をないがしろにして、あの男をナンダナ園に引きいれたのであるから、あの女は性悪で、徳義にもとり、罪を犯したのだ。」

と考えて、アハリヤーの夫(インドラ神)はヴィディヤーダラの若者を宥し、天女には

「性悪な女よ、人間界に行け、胎内より生れない娘をえて、神の業をなしとげたとき、この天界に帰らせてやる。」

と、呪詛をかけました。

さて、タクシャシラーの都城のカリンガダッタ王の妃ターラーダッターが、妊娠に都合のよい時期になりました。そして、インドラ神に呪詛されて天界から降った天女スラビダッターが、ターラーダッターの胎内に入って、王妃の肉体に美しさを授けました。そのとき、ターラーダッター妃は夢の中で、焔が天界から天降って、自分の胎内に這入るのをみました。翌朝、奇異の念にうたれた王妃が夢を夫に物語りますと、カリンガダッタ王は喜んで、王妃に言いました。

「妃よ、それこそ天界の人が呪詛によって人間の胎内に天降ったのだ。誰か天界の人がそなたの胎内に妊ったのに相違ない。というのは、生類は善悪の数々の業(ごう)に繋縛されて、この三界の中を流転し、苦楽の果を得るからだ。」

と、王から言われますと、王妃はそれに答えて言いました。

「まこと、業は力のあるもので、苦楽の果を生ぜしめるものです。その例として、有名な話をお話し申上げましょう。お聴き下さい。」

〔ダルマダッタ王とナーガシュリー妃の物語〕

ダルマダッタというコーシャラ国王*がありました。この王にナーガシュリーという妃がありましたが、妃は夫に貞節で、地上のアルンダティー*と言われ、貞女の亀鑑でありました。時経て、この王と王妃との間にわたしが娘として生れました。そして、わたしがまだ幼なかったとき、わたしの母は突然に自分の前生を思い出して、

「王さま、わたしは今日突然に前生を思い出しました。それをお話ししないのは気持の悪いことなのですが、お話しすればわたしは死なねばなりません。突然に前生を思い出した者がそれを他人に話せば死ぬ、と言われていますので、わたしはとても煩悶しています。」

と、王に言いますと、王が妃に答えました。

「妃よ、わたしもそなたと同様に前生を突然に思い出したのだ。だから、そなたのをわたしに話しておくれ。わたしも話そう。どうなっても、よいではないか。誰が運命の命ずるところを変えることができよう。」

と、夫に促がされて、王妃は語りました。

「あなたがそれほどまでに仰せられますならば、お話しいたしましょう。聴いて下さいませ。前生に於いて、わたしはこの国に住むマーダヴァという婆羅門の家の行儀のよい婢女でありました。わたしにはデーヴァ・ダーサという夫がありましたが、わたしの夫もある商人の家に雇われている善良な召使でした。わたしたち二人はそれぞれの主家から貰ってきた食物をたべ、わたしたちにふさわしい家を作って、そこに住んでいました。水瓶と水さし、箒と寝床、わたしと夫、これがわたしの家で一対をなす三組のものでありました。わたしたちは争論の悪魔の這入りこまない家庭に満足し、神や祖霊や客人に捧げた残りの少しの食物をたべて、幸福に暮していました。そして、わたしたちに着物があれば、わたしたちはそれを貧乏な人に上げました。

さて、あるとき、この地に物凄い饑饉が起りました。そして、わたしたちが毎日主家から貰っていました食物が次第に少なくなりました。こうして、飢餓のために、わたしたちの肉体が衰え、わたしたちの気力も衰えてきました。ある日、丁度食事の時間に、疲れ果てた婆羅門の客人が来ました。わたしたちは生命にもかかわる時だったのですが、その方にわたしたちの持っていました食物を残らず差し上げました。客人が食事をして立去りますと、わたしの夫が自分の生命より

も客人を重んじたのを怒ったかのように、夫の生命はなくなりました。そこで、わたしは夫の屍を焼く薪を正しく集めて積み上げ、わたし自身もそれに登り、わたし自身の悲運の重荷を下ろしました。こうして、その功徳によって、わたしは王家に生れ、あなたの妃となりました。まこと、善行の樹木は知らず識らずの間に、所行の正しい人に素晴らしい果実を授けるのであります。」

と、妃が語りますと、ダルマダッタ王が言いました。

「愛する妃よ、おいで。わたしこそ、前生に於いて、そなたの夫だった。わたしこそ、あの商人の召使のデーヴァ・ダーサだったのだ。いま、わたしは自分の前生を思い出した。」

と語って、自分がデーヴァ・ダーサと同一人であることを示す証拠を述べました。王は今生に別れることを悲しみながらも、天国に生れることを喜んで、妃とともに忽ちに天国に赴きました。

こうして、わたしの両親は別世界に行きましたので、母の妹がわたしを引きとって育てて呉れました。わたしが少女でいました或るとき、ひとりの聖仙が客人として来られました。叔母はわたしに客の接待を命じました。わたしはあたかもクンティー姫がドゥルヴァーサス仙*に仕えましたように、この客人を款待しましたので、その方がわたしに授けられました恩寵によって、わたしはあなたという有徳な夫をえました。このように、幸運は徳行の結果でありまして、そのお蔭でわたしの両親はともどもに王家に生れましたし、また前生を思い出したのでした。」

ターラーダッター妃のこの言葉を聴きまして、徳行に専念していましたカリンガダッタ王は王

妃に語りました。

「まこと、徳行が完全に行われるとき、たとい些少な行いであっても、多くの果実をもたらすであろう。妃よ、七人の婆羅門についての昔の物語を聴きなさい。」

〔饑饉のときに乳牛を食べた七人の婆羅門の物語〕

むかし、クンディナ*という都城に、ある婆羅門の教師がいて、婆羅門の子弟を七人あずかっていました。この教師があるとき、饑饉の苦しみから、乳牛を所有する舅の許に一頭を懇願させるために、これらの弟子を遣わしました。弟子たちは先生の命に従って、腹を減らしたままで、他国に住む舅の許に赴き、乳牛を懇願しました。舅は彼等の生活を助けるために一頭の乳牛を与えましたが、吝嗇な彼は飢えている弟子たちに、食物をなにも与えませんでした。こうして、彼等はその牛を受取って帰途につきましたが、中途まできたとき飢えのために激しく苦しんで、遂に地上に倒れてしまいました。

「先生の家は遠いし、われわれも家から遠く離れたところで災難に遭った。それに、食物は何処からも得られないし、われわれの生命ももはや終りである。そして、この牛も樹木もなく水もなく、また人もいないから、われわれと同様にこの荒野で死ぬにきまっている。そうなれば、われわれの先生はこの牛から僅かの利益さえも得ることはできない。だから、われわれはこの牛を

食べて生命をつなぎ、先生たちを残りで速かに助けよう。切迫つまっているのだから。」

と、相談して、七人の弟子たちは聖典の定める掟に従って牛を殺し、犠牲の生贄としました。神々や祖霊にその肉を捧げ、掟の通りにそれを食べ、その残りを持って先生の許に帰りました。彼等は先生の前に平伏して、自分たちのしたことを仔細に申述べました。先生は彼等が罪を犯したとはいえ、真実を物語ったことを深く喜びました。そして、七日の後に、彼等は飢えのために死にましたが、真実を語った功徳によって、前生を思い出す神通力をえて、再び生れました。

「このように、福徳の種子はたとい小さくとも、清浄な志という水を注がれるときには、種子が耕作者に果実をもたらすように、人間にその果実をみのらせるのである。しかし、妃よ、不浄な志という水によって汚されるときには、それは不幸をみのらせる。この点について、別の物語を話しましょう。聴きなさい。」

〔二人の苦行者の物語〕

むかし、二人の男がガンジス河の岸で、同じ期間のあいだ苦行をしていました。その一人は婆羅門で、他は旃陀羅*でした。婆羅門は空腹に堪えかねて、数名のニシャーダ*が魚を食べながらやってくるのを見まして、愚かにも

「嗚呼、彼等は奴隷女の子であるにも拘わらず、この世では幸福なものだ。彼等漁夫たちは望みのままに、毎日魚肉を食べている。」

と考えました。もう一人の旃陀羅はこれらの漁夫たちを見まして、

「恥を知れ、生肉をくらい生物の生命をうばう奴等は、どうして、このように此処にいて、奴等の顔を見ることができようか。」

と考え、眼をつむったままで、苦行に専念していました。こうして、時経て、婆羅門と旃陀羅の二人は餓死しました。婆羅門は犬に喰われ、旃陀羅はガンジス河の水の中で朽ちました。そして婆羅門は自己を磨いていませんでしたので、漁夫の家に生れかわりましたが、聖地で苦行をしましたお蔭で前生を思い出しました。旃陀羅は克己心を持ち、心が欲情に乱されませんでしたので、その功徳によりガンジス河岸の大王の家に生れ、前生を思い出しました。このように、前生の思出をもって生れた二人のうちで、一人は漁夫として苦しみ、一人は王となって幸福に暮しました。

「徳の樹木の根はまさにこのようである。人の心の浄・不浄によって、その受ける果報は明白に決定するのである。」

と、カリンガダッタ王はターラーダッター妃に語りましたが、さらに言葉を続けて、妃に語りました。

「さらに、また、勇敢な所業は、それが如何なるものであっても、それ相応の果報をもたらすものである。幸福は勇気に従うからである。いま、話をしよう。この面白い物語を聴きなさい。」

〔ヴィクラマ・シンハ王と二人の婆羅門の物語〕

この世に名高いウッジャイニー*という都城がアヴァンティー*国にあります。その地はシヴァ神の住処で、この神に奉侍するためにこの地に来たカイラーサ山*の頂のように、輝く白色の宮殿によって輝きわたっていました。この宏壮な都城は偉大な転輪王を水とする深海のように、幾百の軍勢が其処に這入るさまは、あたかも幾百の河川が海に流れこむかのようでありました。そして、この地は翅をもつ山が海に逃げこんだように、この地の大王に服属した諸王の避難の場所でありました。この都に、ヴィクラマ・シンハ*（「豪雄な獅子」の意）という、その名に相応わしい王がいました。彼の敵は獅子に対する鹿のごとく、如何なる場合にも敢て彼と戦おうとはしませんでした。この王に刃向う敵がありませんでしたので、彼は戦闘の楽しみをうることができず、武器やみずからの豪胆に嫌悪の気持を抱くようになり、心の中で悲しんでいました。こうして、あるとき、大臣アマラ・グプタが王の胸中を知って、話の間に機を見て申しました。

「陛下、諸王は強腕を誇り、武器に長じていることを傲って、敵を望んでおりますから、彼等の隙は容易にえられます。嘗て、バーナ*は千腕を誇って、シヴァ神を宥慰して、戦うに相応わしい敵を懇願しました。その願いはかなえられてヴィシュヌ神が敵となり、戦ってその無数の腕を

切り落しました。ですから、戦争がないからと言って、陛下は失望されることはありません。しかし、強敵は決して望まれそうもありません。従って、陛下が武器をつかう腕前や御自分の勇気を示そうと思召されますならば、森林こそそれに相応わしいところでありますから、狩猟に於いてそれをお示しになって下さい。しかも、狩猟は王者にとっては身心の鍛錬などのためにも好適であると認められております。戦争のための習練をつまぬ王者は、誉められたものではありません。また、兇悪な野獣どもは土地の人口の減少を望んで、人間に危害を加えています。ですから、王者たるものはこれらの野獣を殺さねばなりません。この理由からも、狩猟は望ましいことです。と申しましても、際限なく野獣を追いまわすべきではありません。嘗てパーンドゥ王などは狩猟に耽ったがために滅びたからです。」

と、賢明な大臣アマラ・グプタが申しますと、ヴィクラマ・シンハ王はその忠告を嘉して

「その通りにしよう。」

と言いました。

その次の日、王は都城を出て、馬や歩兵や犬に取りまかれて、四方に数々の網や羂が張りめぐらされた土地に、狩猟に出かけましたが、喜びさざめく猟師たちの叫び声は天に轟きわたりました。王が象に乗って城外に出ますと、人気（ひとけ）のない城外の神殿に二人の男が一緒にいるのをみかけました。王は遠くからこの二人の姿をみとめましたけれども、

「暇にまかせて、何事かを一緒に相談しているのだろう。」

と考えて、王は狩猟を行う森林に行きました。その地で、王は抜きはなたれた剣や老虎や獅子の雄叫びに満足し、また景色や象に深く心を悦ばせました。象さえも殺す獅子を王が殺したとき、その爪から真珠が地上に散らばりましたが、その真珠はまこと王が武威の種子を地上に撒き散らしたかのようでありました。王のゆくてを鹿の群が斜に横ぎると、真直ぐに飛ぶ矢は素早くそれを射て、王に満足をもたらせました。

長い間、王は狩猟を楽しみましたが、扈従の者たちが疲れましたので、弓弦をゆるめて、王はウッジャイニーに帰還しました。すると、出発の際にみかけました二人の男が、まだその時と同じように、その神殿にいるのを見ました。

「あの二人は何者であろうか。このように長い間、一体なにを相談していたのであろうか。必ずや、この二人は密偵で、長いこと秘密を話しあっていたに相違ない。」

と考えて、王は番兵を遣わしてこの二人の者を連行させ、捕縛して監禁しました。その翌日、王は二人の者を法廷に引出して訊問しました。

「お前たちは何者だ。また、あのように長い間、何を相談していたのだ。」

と、王が親しく訊問しますと、二人は王に命乞いをしました後に、ひとりの若者が語りはじめました。

「陛下、お聴き下さいませ。ただいま、一部始終をつつまず申上げます。」

〔二重の駈落ちの物語〕

この都城に、カラバカという婆羅門がおりました。このわたくしは、このヴェーダ*の学匠の息子でありまして、父が勇気のある子を得たいと望みましてアグニ神（火神）を宥慰して生れました。父が死にますと、母は父に殉死しました。わたくしは学問を修めてはおりましたけれども、まだ子供でございましたし、頼る者もありませんでしたので、わたくしの生れに相応わしい道を捨ててしまいました。そして、博奕と武技に耽りました。長上の者の教訓を受けることのできない子供が、どうして克己心のある者になりえましょう。このようにして次第に成長しましたわたくしは、自分の腕に自惚れまして、あるとき弓を射るために森にゆきました。すると、輿に乗った花嫁が花婿の大勢の従者に附添われて、都城から出て其処を通りかかりました。すると、そのとき、鎖を放れた象が突然に何処からか現われて、荒れ狂いながら花嫁の一行に襲いかかりました。その怖ろしさにおびえた臆病な附添の者たちは、花婿も一緒に、花嫁を放り出して、四散して逃げてしまいました。それを見ましたわたくしは、憤懣やるかたなく、考えました。

「何ということだ。臆病な奴どもはこの憐れな女をひとり捨ててしまった。では、保護する者のないこの女を、わたしが象から護ってやろう。生命とか勇気とかは不幸な者を救うのに用いなければ、何の役に立とうか。」

と考えまして、大声をあげて巨象に立向ってゆきました。すると、象はその女を捨ててわたくしに向って突進してきました。そこで、わたくしは怖れおののく女の見ているまえで、大声をあげて逃げまわり、象を遠くにおびきました。わたくしは遂に葉の繁った大樹の枝が折れて垂れ下っているのに飛びつき、葉の繁みに身を隠して大樹の幹に達し、その枝の蔭を巧みに枝から枝へと横に渡って逃げました。すると、象は垂れ下っていた枝を粉砕してしまいました。そこでわたくしは急いで怖れおののいている女のところに行き、怪我はなかったかどうかをたずねました。その女はわたくしの姿をみますと、驚きながらも嬉しそうに、そのとき申しました。

「このような危機にわたしを捨てて何処かへ逃げてしまった、あの臆病者に嫁がせられたわたしが、どうして怪我がなかったと申せましょう。でも、お怪我のないあなたさまのお姿を見ることができたのですから、わたしは何といっても無事でございます。ですから、夫はもはやわたしには何の関係もありません。あなたさまこそ、わたしの夫です。ご自身の危険さえ顧みず、わたしを死の虎口から救って下さったのですもの。わたしの夫が附添の者たちと一緒にこちらへやって来ます。ですから、あなたはどうぞわたしたちの後から、うまく随いて来て下さいませ。機会をえましたら、二人で何処かへ駈落して行きましょう。」

と、彼女が言いましたので、わたくしは承知いたしました。

「あの女は美しく、心にのこるが、何といっても人妻だ。」

という考は、冷静な自制心のある者の踏む道で、情熱ある若者の踏む道ではありません。

間もなく、花婿がやってきまして、花嫁に慰めの言葉をかけました。彼女は夫や附添の者と一緒に旅をつづけました。わたくしは彼女が秘かに渡してくれる食物を食べながら、彼女と何の関係もない赤の他人として、誰にも見破られずに、一行の後に随いて長途の旅をしました。彼女は象に襲われたときの恐怖のあまりに身体が痛むと、道中偽りを言って、夫が触わるのを拒みつづけました。情熱のある女が一度害われたときには、あたかも体内に猛毒をもつ蛇のように、如何なる人にでも怨みを晴らさずにはおかないのであります。

漸くにして、わたくしどもは花婿の家のあるローハ・ナガラ*に到着しました。花婿の家はこの町で商売をしていました。一行はその日は城外の神殿に宿泊しましたが、其処でわたくしはここにおります友人の婆羅門に会いました。わたくしたちはそれまで会ったことはありませんでしたが、一目でお互いに深く信頼しあいました。生類の心は前生に於いてかちえました友情を察知するものであります。そこで、わたくしは自分の秘密をすべてこの男に話しました。わたくしの言葉を聴きますと、そのときこの男はみずからこのように申しました。

「安心するがよい。お前が此処に来た目的を達するのに、うまい手段がある。彼女の夫の妹をわたしは知っている。あの商人の妹は財産を携えて、わたしと一緒に此処から逃げることになっている。だからその娘の手をかりて、お前の目的をかなえさせてあげよう。」

と言いまして、この婆羅門の妹のところに行き、秘かに一部始終を話しました。その翌日になりますと、商人の妹は約束通りに花嫁を連れてきまして、神殿の中に這入らせました。わたくした

ち二人が神殿の中にいます間に、商人の妹は直ちにこの友人に兄嫁の衣裳を着せました。お互いになすべきことを相談しますと、彼女は花嫁の姿をしました友人を連れて城内に帰り、兄の家に忍びこみました。わたくしは男装をしました花嫁を連れて、一足さきにこのウッジャイニーに着きました。商人の妹は、その夜その家で宴会があり、皆が酔いつぶれて寝てしまった隙に、この友人と一緒に逃げ出しました。こうして、この友人は彼女を連れて、人目を忍んで旅をして、この都に着き、わたくしたちは再会いたしました。このようにして、わたくしたち二人は、わたくしたちへの愛情からみずからを委ねました妻を、若さの絶頂のときにえました。従って、陛下、わたくしどもは何処に住まおうかと、案じております。向うみずな所業を大胆に成しとげましたとき、如何なる人の心が安堵するでありましょうか。ですから、わたくしたちは住む場処と生計のことを、秘かに長いあいだ相談していました。それを陛下が遠くからご覧になられたのであります。陛下はわたくしどもをご覧になって、わたくしどもを連行され、盗人の嫌疑で投獄されました。今日、わたくしどもの素姓をおたずねになられましたので、わたくしがそれを申述べました。陛下に於かれまして、何卒存分の御処置のほどをお願い奉ります。」

と、この男が言上しますと、ヴィクラマ・シンハ王はこの二人の婆羅門に言われました。

「余は満足じゃ。怖れるな、この都に留まるがよい。余はそなたたちに褒美をとらせる。」

と仰せられて、王はこの二人の者の望みのままに生計の資を恵まれました。そして、この二人はヴィクラマ・シンハ王の宮廷で妻とともに幸福に暮しました。」

「このように、いかがわしい所行であっても、大勇猛心からなされたときには、人間に幸福がもたらされ、また王者は満足して、このような大胆な所行を遂行する智慧ある人々に、喜んで施与するものである。このように、神も悪魔も含めて一切のものは、この世のものであれ前生に於けるものであれ、善悪の所行の積み重なりによって、それぞれに種々の果報を刈りとらねばならない。だから、妃よ、そなたが夢の中で天から焔が天降って、そなたの胎内に這入るのをみたのは、確かに誰か天上の人が、業（前世の所行）の力によって、そなたの胎内に宿ったのだ。」と、夫のカリンガダッタ王の口から聴きまして、妊娠しましたターラーダッター妃は殊のほかに悦びました。

二

こうして、タクシャシラーのカリンガダッタ王の妃ターラーダッターは、胎児の重さのために、次第に物憂くなりました。分娩の日も近づきますと、顔色は青白くなり、瞳子はいつも動揺して、そのさまは月輪の淡い光のさしはじめたときの東の方角さながらでありました。そして、間もなく、創世主が一切の美しいものを造りだす創造力の標本のように、他に比類なく美しい姫が生れました。守護の燈明は姫の美しさに圧倒されてかげりましたが、あたかも同じ美しさの王子が生れなかったのを悲しむかのようでもありました。父のカリンガダッタ王は生れた姫を見まして、姫が殊の外に美しいことを知りましたけれども、この姫のように美しい眉目秀麗な王子の誕生を望んでいました希望が満されませんでしたので、いたく失望しました。王は姫が天女の生れかわりであるとは覚っていましたけれども、*王子を望んでいましたので、悲しみました。歓喜の権化たる息子は悲哀の塊たる娘に遙かに勝るからであります。そこで、王は心をまぎらせるために王宮を出て、数多くの仏像を祀った僧院に出かけました。王が参籠している人々の間にまじって一隅に坐っていますと、法師である一人の比丘が説教している声を聴きました。

「この輪廻*の世に於いて財産を人に施すことは偉大な苦行である。と言われている。財産を施すことは生命を与えることであると言われるが、まこと生命は財産に依存するからである。仏陀は慈悲に溢れた心から、他人のために、自己を藁屑のごとくに捨てることさえした。不浄な阿堵物のごときは、そもそも何であろうか。かくのごとき果敢な苦行によって欲望を捨てて天眼を得た仏陀*は、遂に覚者の位に到達されたのである。従って、智慧ある人は、無上の正等覚*を得るために、自己を犠牲にすることを始めとして、一切の欲望を絶つことによって、他人の為になることをなすべきである。」

〔世を捨てた七人の王女の物語〕

むかし、クリタという王に七人の非常に美しい王女が順次に生れたのであるが、彼女たちが未だ幼少のとき人生を厭うて、彼女たちは父の家を捨てて墓場に赴いたが、その理由をたずねられたとき、扈従の者たちに語った。

「この世界は無常であり、この世に於いては肉体とか愛する者との結合の喜びなどは、夢の幻に過ぎないのです。この輪廻の世界に於いて、他人のためになることのみが、唯一の恒常なものです。わたしたちは自分の肉体を生きたままで、墓場にすくい生肉をくらう悪魔に投げ捨ててやりましょう。たとい如何に容姿が美しくとも、この肉体は何の役にたちましょう。」

〔自身の眼を抉った王子の物語〕

むかし、世を厭うた一人の王子がありました。この王子は年若く、また容姿端麗でありましたが、巡礼者となりました。あるとき、この比丘がある商人の家に食物を乞いにゆきますと、その家の若妻が蓮の嫩葉に似て切れながの眼をしました比丘を見て、その眼の美しさに心を奪われて申しました。

「あなたのように美しい姿の方が、どうしてこのように厳しい戒行をなされるのですか。あなたのこの眼でみつめられた女は、どんなに幸福なことでしょう。」

と、若妻から言われますと、この比丘は一眼を抉って、手の上にのせて言いました。

「このようなこの眼をご覧下さい。嫌うべき血と肉の塊をお望みならば、どうぞお受取り下さい。そして、もう一つの眼はこの通りです。どうして、これらの眼が魅力があると言いえましょうか。」

と、この比丘が言いますと、商人の若妻はそれを見て後悔の念に駆られ、

「ああ、あなたが眼を抉られる原因にわたしがなってしまったとは、わたしは何という悪いことをしてしまったことでしょう。」

と言いました。この言葉を聴きますと、比丘が申しました。

「母者よ、悲しまないで下さい。あなたはわたしのために善いことをされたのです。その証拠に、忍辱仙の物語をお聴き下さい。」

〔忍辱仙の物語〕*

むかし、ガンジス河畔のある美しい遊園に、あらゆる苦行を行おうと意気ごんでいた聖者がいました。彼が苦行をしていますと、ある王がたまたま後宮の妃妾をつれて、其処へ遊びにきました。王が遊びたわむれ、酒宴を催して酔いつぶれて寝てしまいますと、妃妾たちは無思慮にもその遊園の中を歩きまわりました。その一隅に瞑想している聖仙を見つけますと、妃妾たちは「一体、何者であろうか」と、好奇心を起して聖仙を取巻いて立っていました。彼女たちが永く其処

にいました間に、王は眼を覚ましました。傍に妃妾たちの姿が見えませんでしたので、遊園の中を歩きまわりました。そして、妃妾たちが聖仙を囲んで立っているのを見まして、怒った王は嫉妬心を起して、剣を抜いて、聖仙に斬りつけました。王権、嫉妬、残忍さ、酩酊、無分別、これらは別々では如何なる罪業もひき起すことはありえないでしょうが、五火のように結合されたときには、とんでもないことになります。こうして、王が立去りましたあと、聖仙は四肢を切断されましたけれども、彼は怒りませんでした。すると、ある女神が示現されて、聖仙に

「偉大な精神の持主よ、そなたが同意するならば、怒ってそなたにかかる残虐な行いをなした男を、わが威力でもって殺そう。」

と申しました。この言葉を聴きますと、聖仙は

「女神よ、そのように言わないでください。あの男はわたくしの法友でこそあれ、決して危害を加えた者ではありません。あの男の恩恵により、女神よ、わたくしは忍辱の徳をえました。もしあの男がわたくしにこのようなことをしなかったならば、わたくしは誰に対して忍辱することができたでありましょう。賢明な人は、この滅びゆく肉体のために、如何なる怒りをあらわしましょうか。気にいることと気にいらないことに対して、同様に忍辱することこそ、梵*に到達する階程であります。」

と、聖仙が申しますと、女神は満足されて、聖仙の四肢の傷を治療して姿を消しました。

「ですから、この聖仙が王を恩恵者と考えたのと全く同じ理由で、母者よ、あなたはわたしの眼を抉る原因となったことによって、わたしの苦行の徳を増大されたのです。」

と、克己心のある比丘は、彼の前に深く頭を垂れた商人の妻に語りました。比丘は容姿がすぐれていましたけれども、自分の容姿には気をとめることなく苦行を修めて、遂に解脱に達しました。

「ですから、わたくしたちは年若く、また美しいとはいえ、どうしてこの移ろいやすい肉体に執着することができましょう。智慧のある人にとっては、有情のためになることを行うという一事のみが賞讃されるのであります。ですから、わたくしたちは真の幸福の棲処である、この墓場にわが身を横たえて他人のためになりたいのです。」

と、七人の王女は扈従の者に語って、その通りにし、かくて最高の解脱に到達した。

「かくのごとく、賢明な人々にとっては、自己の肉体に対してさえ利己心はないのである。いわんや、妻子眷属のごとき藁屑の堆積などは、いまさらに言うまでもない。」

などと、僧院の法師から聴きましたカリンガダッタ王は其処でその日を送り、王宮に還りました。王宮に這入りますと、再び姫の誕生しました悲しみに心が傷むのでありました。すると、王家に仕える老婆羅門が王に言いました。

「陛下、陛下は何故に珠玉のごとき姫の御誕生を悲しまれるのですか。この世に於いても、ま

たあの世に於いても、娘は息子より一層吉祥なものであります。王者は何故に、王国を渇望し、蟹のごとくに父を食う王子*に心をかけるのでありましょうか。これに反して、クンティ・ボージャ王*などはクンティーなど王女の徳によって、怖ろしいドゥルヴァーサス仙などの危害から逃れました。しかも、娘の結婚から得られるような功徳を、他界に於いて息子からどうして得られましょうか。さらに、スローチャナー姫の物語をお話し申しあげましょう。どうかお聴き下さい。」

〔スローチャナー姫の物語〕

チトラ・クータ山*にスシェーナという若い王がありましたが、この王は創造主がシヴァ神に対する意地から、別のカーマ神（愛の神）であるかのように造ったのでした。スシェーナ王がこの大山の麓に神々しい遊園を造りましたが、これは神々がナンダナ園（インドラ神の楽園）に住むのを厭うようにと造ったのでした。そして、この遊園の真中に、王は満開の蓮華の咲きそろう池を造りましたが、この池はあたかもラクシュミー（美と幸福の女神）が手にして遊ぶ蓮華に新らしい生育の地を与えるかのようでありました。池の岸辺には華麗な宝玉づくりの階段がありましたが、王はみずからの容姿にふさわしい妃妾がまだありませんでしたので、いつもひとりで岸辺を散歩していました。

あるとき、天の美女ランバーがインドラ天の宮殿を出て、心の赴くままに天空をさまよい歩き、たまたまスシェーナ王の遊園に通りかかりました。彼女は、あたかも満開の花園の真中にたたず

む春の化身のように、遊園を散歩している王を見つけました。

「あの方は、池の蓮華の中に落ちたシュリー（吉祥の女神）を追うて、天界から墜ちた月輪であろうか。いや、そうではない。あの方の美しさは衰えることはないから、あの方はきっと花をもとめて遊園にきた花箭の持主（愛の神カーマ）に相違ない。しかし、お伴のラティ（カーマ神の妃）は何処に行ったのだろう。」

と、激しくスシェーナ王に恋したランバーは、王のことを口にしながら、人間の姿に化身して天空から降って、王に近づきました。王は突然に近づいてくる彼女を見て驚き、考えました。

「他に比類ない美しさのこの女は一体誰であろうか。ともあれ、人間ではない。彼女の両足は塵埃に触れず、また眼はまばたかない。だから、彼女は天上の女に相違ない。しかし、わたしはあの女に誰かとたずねるべきではない。問えば、彼女は恐らく逃げるであろう。なにかの理由で人間を訪れた天上の人はその秘密が暴かれるのを嫌うものだ。」

と考えながら歩みより、彼女と言葉を交しました。そして、遂に、二人はたがいに抱擁しました。王はこの天女と永い間たわむれ、天女は天を忘れてしまいました。愛慾は故郷よりも魅力であるからであります。そして、スシェーナ王の領土は、あたかも天がスメール山*の連峯の頂で満されているように、天女ランバーの友のヤクシニー（富の神クベーラの眷属ヤクシャの女性）たちの降らす黄金の雨によって、黄金の塊で満ち溢れるに至りました。

時経て、この美しい天女はみごもり、スシェーナ王に比類なく美しい娘が生れました。女児を

生み終ると、天女が王に申しました。

「王さま、これがわたしにかけられた呪詛だったのです。そして、今、その呪詛は終りました。わたくしは天女のランバーで、あなたを見て恋したのです。胎児を生みました今、わたくしは直ちに此処を立去らねばなりません。それがわたくしたちの運命なのです。ですから、どうかこの娘をまもり育てて下さいませ。この娘が結婚しましたときに、わたくしたちは再び天国で結ばれましょう。」

と、天女ランバーは言いまして、王の力も及ばず、姿を消しました。王は悲しみのあまり生命を害いかけました。

「メーナカー*がシャクンタラー*を生んで姿を消したとき、ヴィシュヴァーミトラ*は落胆したとはいえ、生命を捨てましたでしょうか。」

などと、大臣たちが言いましたので、理を弁えた王は次第に気持を持ち直し、ランバーとの再会の原因である王女をいつくしみ育てました。ひたすらに王女をいつくしみました父王は、容姿がすぐれて美しい王女に、特に眼(locana-)が綺麗(su-)でありましたので、スローチャナーという名をつけました。

時経て、スローチャナーがうら若い乙女となりました。あるとき、スローチャナーが遊園にいましたとき、カシャパ仙の子孫のヴァツァという若い聖仙が、心のままに諸方を歩いていまして、彼女を見染めました。この若い聖仙は苦行の凝塊でありましたけれども、この王女を見た途端に

恋の味をおぼえ、

「ああ、この乙女の容姿は殊のほか美しい。この乙女を妻にすることができないならば、他に苦行の如何なる功徳があるだろうか。」

と考えました。このように考えている若い聖仙を、スローチャナーも見ました。彼の姿は、彼女に、煙もなく燃え上る焔のように見えました。数珠と鉢とを携えた聖仙を見まして、彼女も恋心を抱き

「このように泰然としていて、しかも容姿すぐれた方はどなたであろうか。」

と考えました。スローチャナーは求婚者に近づくかのように聖仙に近づき、眼の青蓮の花環を彼の身体に投げかけ、彼の前に深く頭を垂れました。ヴァツァは神々も阿修羅も逃れがたいマンマタ(恋の神カーマの異名)の命令にうち負かされて、

「夫を選べ。」

と、祝福の言葉を述べました。すると、比類のない彼の容姿に羞らいの心を奪い去られた彼女は、頭を下げたままで、勝れた聖仙に

「そのお言葉があなたの御希望で、たわむれのお言葉でないならば、婆羅門さま、わたくしの父の王に何卒お願いになってくださいませ。」

と申しました。そこで、聖仙は彼女の侍女たちに彼女の素姓を聴き、彼女の父のスシェーナ王の許に赴いて、スローチャナーを妻にしたいと懇願しました。王はこの若い聖仙が、苦行に於いて

も、容姿の点でも、殊のほか勝れているのを見まして、厚くもてなし、
「この娘はわたしと天女ランバーとの間に生れました。この娘が結婚すれば、わたしはランバーと天国に於いて再会ができることになっています。ランバーが天国に還るとき、このようにわたしに申しました。至福の方よ、どうすればそのことが成就できるでしょうか。どうか、お考えになって下さい。」
と申しました。この言葉を聴きますと、若い聖仙はしばらく考えました。そして、
「むかし、メーナカーの娘プラマドヴァラー*が蛇に嚙まれたとき、聖仙ルルは自分の寿命の半分を彼女に与えて、彼女を妻にしたではないか。チャンダーラ王のトリシャンク*を、ヴィシュヴァーミトラ仙は天国に連れて行ったではないか。されば、自分の苦行の功徳の一部を捧げれば、自分にできないことがあろうか。」
と考えて、
「それは困難なことではありません。」
と、王に語り、
「神々よ、この王がランバーとの再会を成就せんがために、わが苦行の功徳一部によって、この王を肉身のまま天国に昇らしめたまえ。」
と、王廷で公言しますと、
「よろしい。」

と、明瞭に天上の声が聞えてきました。かくて、王は娘のスローチャナーをカシヤパ仙の後裔のヴァツァ仙に嫁がせて、みずからは天国に昇りました。天国に於いて、スシェーナ王は神性を得て、インドラ神の許しをえて、神のように神々しいランバーとともに、幸福に暮しました。

「このように、陛下、スシェーナ王は娘によってその目的を成就しました。まこと、このような娘こそ、陛下のごときお方の家に化身して生れられるのであります。ですから、この姫も必ずや天女の誰かが呪詛されて人間界に墜ち、陛下のお家に化身されたのに相違ありません。ですから、陛下、姫のご誕生を悲しまれてはなりません。」
と、王家に仕える老婆羅門から物語を聴きましたカリンガダッタ王は悲しむことをやめ、悦びました。そして、王は王の眼にあたかも月輪のように喜びを与える王女に、カリンガセーナーという名をつけました。こうして、王女カリンガセーナーは父の許で多くの侍女に侍ずかれて次第に成長しました。そして、彼女は遊戯の楽しみに心を奪われていました幼児期には、あたかも満ち溢れる海の波のように、宮殿や園林で遊びました。
あるとき、露台で遊戯に夢中になっていましたカリンガセーナーを、アスラ族のマヤの娘のソーマ・プラバーという天女が、たまたま空中を旅行していて見ました。聖仙の心をさえ悩ますほどに美しい容姿のカリンガセーナーを見まして、ソーマ・プラバーは可愛く思い、考えました。
「あの娘は誰であろうか。月の権化であろうか。とすれば、どうして日中にこのように美しい

のであろうか。あるいは、ラティであるとすれば、カーマは何処にいるのであろうか。だから、あの娘は人間界の乙女だと思われる。この王家に誰か天女が呪詛によって墜されたのであろう。とすれば、あの人は必ずや前生に於いてわたしの友人であったに相違ない。わたしの心はあの娘に対する深い愛情に溢れて、そう語っている。だから、あの娘と深い友情を再び交すことが望ましい。」

と考えて、幼いカリンガセーナーを驚かさないように姿をかくしたまま、ソーマ・プラバーは天から降りました。そして、カリンガセーナーに信頼させるために、人間界の乙女の姿をして、ソーマ・プラバーは静かに彼女に近づきました。カリンガセーナーはソーマ・プラバーの姿をみとめますと

「まあ、嬉しい。殊のほか美しい姿の王女がご自分からわたしを訪ねて下さった。あの方はお友だちになって頂くのにふさわしい方だ。」

と考えて、恭しく立上って、ソーマ・プラバーを迎えて抱きしめました。カリンガセーナーはソーマ・プラバーを座につかせますと、すぐにソーマ・プラバーの生れや名をたずねました。すると、ソーマ・プラバーは

「お待ちになって下さい。みんなお話しますから。」

と申しました。こうして、たがいに言葉をかわしている間に、彼女等二人はたがいの手を握り合って、友情の誓を結びました。すると、ソーマ・プラバーが申しました。

「あなたは王女です。でも、王子たちと友情を結ぶことは困難です。と言いますのは、王子たちというものは僅かの過誤に対しても、際限もなく怒るからです。この点について、王子とその命を救った商人の息子の物語をお聴き下さい。お話してあげましょう。」

〔王子とその命を救う商人の息子の物語〕

プシュカラヴァティー*の都城に、グーダセーナという王がありました。この王に一人息子が生れました。この王子は腕白で高慢でしたが、一人息子でありましたので、王子がしたことの善悪を問わず、王はそれを許しました。遊園を散歩していましたとき、王子は商人の息子で財産と容姿の点で王子にふさわしいブラフマダッタという若者を見ました。王子がこの商人の息子と会いますと、忽ちに親友となり、二人は間もなく一体となって生れたかのように親密になりました。そして、彼等二人はたがいに会わずにはいられなくなりました。まこと、前生に於ける親交は親愛の情を急速に結び合せるものであります。王子は、まず商人の息子のために用意された食物でなければ、決して食べませんでした。

あるとき、王子は親友の結婚をまず決定したのち、自身の結婚のためにアヒチャットラ*に出発しました。王子は象に乗り、軍勢を率い、親友と同道して旅をつづけ、途中イクシュマティー河*の岸に到着し、宿営しました。其処で、月が上ると、酒宴を催しましたが、王子は床についてか

ら乳母に懇請されて物語をはじめました。物語をはじめましたが、疲労していましたし、また酔うていましたので、王子は寝入ってしまい、乳母もまた寝てしまいました。しかし、商人の息子ブラフマダッタは王子に対する愛情から、眼を覚まして見張っていました。こうして、皆の者が寝ていました間に、眼を覚ましていました商人の息子は、空中で話しあう女の声らしいものを聞きました。

「この悪者は物語をしないで寝てしまったよ。だから、わたしは呪詛してやるのだ。明朝、この男は頸飾りを見つけて、手にするだろう。そうしたら、頸飾りはこの男の頸にからみついて、たちどころに死ぬだろう。」

と、一人が言い終りますと、他の一人が言いました。

「この男がその危険を脱したとするならば、マンゴーの木を見るだろう。その果実を食べたならば、この男は命をおとすであろう。」

と言い終りますと、第三の声が言いました。

「この男がそれを逃れたとしても、結婚式を挙げるために家に這入るとき、家が倒れて、この男を殺すだろう。」

と言いますと、今度は第四の声が言いました。

「この男がそれを逃れたとしても、その夜、寝室に這入ったとき、彼は百度嚔をするであろう。そのとき、誰かが百度『ジーヴァ』と言わなければ、この男は死の神の手に帰するであろう。若

し誰かがこの言葉を聞いていて、この男を守るために禁厭の言葉を言うならば、その男は死ぬであろう。」

と言って、声はきこえなくなりました。

商人の息子は雷撃のように怖ろしいこのすべてを聴いて、王子に対する親愛の情から心が乱れましたが、考えました。

「何ということだ。物語をはじめながら、話してしまわなかったので、好奇心からそれを聴こうと思って、姿を現わさずに来ていた神々が呪詛したのだ。王子が死んだときには、わたしの生命はなんの役にたとう。だから、自分の生命に等しい親友を、自分は策略を用いて護ろう。自分にも災難が起らぬように、一部始終を王子に聴かせてはならない。」

と考えて、商人の息子はその夜は一睡することもできませんでした。

その翌朝、王子は親友と出発しましたが、前方の路上に頸飾りを見つけて、それを手にとろうとしました。そこで、商人の息子が言いました。

「君、頸飾りを手にしてはいけない。それは幻影だ。そうでなければ、兵士たちにも見える筈ではないか。」

と、商人の息子が言うのを聴きますと、王子はその頸飾りをそのままにして、進んでゆきました。すると、王子はマンゴーの樹を見つけ、その実を食べようとしました。商人の息子が以前のときと同様にそれを遮ぎりましたので、王子は内心憤りを覚えました。王子はゆるゆると旅をして、

舅の家に到着しました。結婚式を挙げるために、その家に這入ろうとしましたとき、親友がそれを遮ぎりました。その途端に、家が倒れました。こうして、紙一重で危難を免れた王子は、親友をいくらか信ずるようになりました。

夜になると、王子は花嫁をつれて別室に這入りました。商人の息子はその部屋に人知れず忍びこんでいますと、寝床に就いた王子が百度嚔をしましたので、商人の息子はみずから百度『ジーヴァ』*と言い、目的を達して喜びながら、その部屋を出てゆきました。花嫁と添寝していました王子は、商人の息子が部屋から出てゆくのを見まして、嫉妬から商人の息子に対する自分の親愛の情を忘れて、侍衛たちに

「あの悪漢は余が妃とふたりだけでいたいと思うていた私室に忍びこんだのだ。彼奴を捕縛して留置し、明朝処刑せよ。」

と命じました。この言葉を聴きますと、侍衛たちは商人の息子を捕縛しました。商人の息子は拘束されたままその夜を過し、翌朝処刑場に引かれるとき、侍衛たちに言いました。

「ともかく、わたしを王子のところへ連れてゆけ。いささか訳を話そうと思う。それから、わたしを処刑せよ。」

と申しますと、侍衛たちは王子の許に行って、その旨を告げました。他の大臣たちも諫言しましたので、王子は商人を連行するよう命じました。商人の息子が王子の前に連行され、一部始終を王子に語りますと、家が崩壊したときに既に信頼を生じていましたので、王子は商人の息子の言

葉が真実であると思いました。王子は満足し、親友の処刑の命令を取消し、親友とともに妻をつれて自分の都城に還りました。そして、彼の親友の商人の息子も結婚し、その徳はすべての人々に賞讃されて、幸福に暮しました。

「このように、貴公子たちという者は発情期の象のように放逸で、自身の指導者を殺し、他人の利益など念頭にありません。笑いながら人の生命をとる、このようなヴェーターラ（死体に憑く悪魔）との交友など、どうしてありえましょう。ですから、王女さま、わたくしとの仲好しの間柄を、いつまでも捨てないでくださいまし。」

と、ソーマ・プラバーの口から宮殿の露台でこの物語を聴きましたカリンガセーナーは、ソーマ・プラバーに対して親しさをこめて、答えました。

「あなたの仰言ったような輩はピシャーチャ（悪鬼の一）で、貴公子ではないと思います。ピシャーチャのしつこさの物語をお話しましょう。聴いて下さい。」

〔ピシャーチャと婆羅門の娘の物語〕*

ヤジュニャ・スタラ*という拝領地に、一人の婆羅門が住んでいました。この婆羅門は貧乏でしたので、あるとき薪をとりに山に行きました。斧で薪を切っていましたとき、木片が不運にも彼

の脛にあたり、肉がさけて中に這入ってしまいました。彼は出血が甚だしかったために失心してしまったのですが、それを見た人が彼を助け起して、家に連れて帰りました。

彼の妻は驚いてその傷を洗い、膏薬をはって、彼を元気づけました。こうして彼の傷は毎日毎日手当をしましたけれども、少しも快くならず、潰瘍となりました。膿みただれた傷に苦しみ、貧乏で、死に瀕していますと、友人のひとりの婆羅門がやってきまして、ひそかに彼に言いました。

「わたしの友人のヤジュニャダッタという男が長いこと貧乏だったが、呪文を唱えて、ピシャーチャの助けをかり、財宝を獲得して幸福に暮した。その男がその呪文をわたしにも話してくれているから、君も呪文を唱えてピシャーチャの助けをかりるがよい。君の傷も治してくれるよ。」

と言いまして、その呪文を教え、またその儀式を話しました。

「夜の第五更に起き出て、頭を剃り、裸になり、両手に持てるだけ米を持ち、呪文を唱えながら、十字路に行きなさい。其処に両手に一杯持った米を置き、無言のままで帰ってきなさい。決して後をふりかえってはいけない。ピシャーチャが現われて

『お前の傷を治してやろう。』

と言うまで、いつもこのようにしなさい。こうして、ピシャーチャが現われたならば、讃嘆しなさい。そうすれば、君の傷を治してくれよう。」

と、友人から言われましたので、婆羅門は教えられた通りにしました。すると、宥慰されたピシャーチャはヒマーラヤ山の頂から偉大な特効のある薬草を持ってきて、彼の傷を治しました。すると、傷が治って喜ぶ婆羅門に、ピシャーチャは執拗に

「俺がもう一度治すことができるように、第二の傷を与えよ。さもないと、俺はお前のためにならぬことをするか、お前の身体を滅ぼすぜ。」

と申しました。この言葉を聴きますと、婆羅門は怖れおののき、ピシャーチャから逃れるために、直ちに

「七日間のうちに、第二の傷をさしあげます。」

と答えました。すると、ピシャーチャは姿を消しましたけれども、婆羅門は自分の生命に絶望しました。

と、カリンガセーナーはここまで話しますと、この物語の後半が卑猥なことを羞じて、物語を中断しましたが、間もなく言葉を続けてソーマ・プラバーに次のように物語りました。

すると、第二の傷を見出すことができないで苦しみ悩んでいる婆羅門を見まして、彼の娘が訊ねました。彼女は寡婦でしたが、機転のきく彼女は父に

「わたしがピシャーチャをたぶらかしましょう。もう一度行って

『わたしの娘の傷を治して下さい。』

と言って下さい。」

と申しました。この言葉を聴きまして、婆羅門は大いに喜び、ピシャーチャのところに行き、娘の言った通りに言って、ピシャーチャを娘のところへ連れてきました。すると、彼女はピシャーチャに自分の陰部を見せて、

「わたしのこの傷を治してください。」

と、ひそかに申しました。愚かなピシャーチャは彼女の陰部に間断なく膏薬を塗りましたが、それを治すことはできませんでした。日が経つにつれて、疲れ果てましたピシャーチャは彼女の両脚を肩に担いで、

「どうして治らないのか。」

と、彼女の陰部をしらべました。すると、その下に肛門という第二の傷を見つけました。それを認めますと、ピシャーチャは驚き惑うて、考えました。

「一方の傷が治らない間に、別の傷が生じた。『孔が開くと、不運を増す。』という諺は真実だ。人間はここから生れ、またこのため破滅するが、この輪廻(りんね)の道が開いているのは、どんな神でも塞ぐことはできない。」

と、愚かなピシャーチャは考えまして、反対の結果を招来したために捕縛されるのを怖れて逃げ去り、消えてしまいました。

このようにして、この婆羅門は娘がピシャーチャをたぶらかしたのに救われ、傷も治って幸福

に暮しました。

「ピシャーチャとはこういう奴です。若い貴公子で、ピシャーチャと同じような人もいます。こういう人々は、宥めても、不幸をわれわれにもたらします。でも、智慧のある人々がおりさえすれば、それを防ぐことができます。勝れた家に生れた王女はそうではない、と聞いております。ですから、わたくしとのおつきあいについては、決して御懸念には及びません。」

と、このようにカリンガセーナーの口から、素晴らしくて、おかしくて、しかも面白い物語の筋を聴きまして、ソーマ・プラバーは悦びました。そして、カリンガセーナーに

「わたくしの家はここから六十由旬も離れています。それに、日も傾きましたし、長居をしましたから、わたくしは帰らして頂きます。」

と言いました。こうして、太陽が静かに西方の山に沈みましたので、ソーマ・プラバーは再会を熱望する親友のカリンガセーナーに別れを告げ、忽ちに天空に飛び上り、カリンガセーナーを驚かせて、自分の家に帰りました。カリンガセーナーはこの摩訶不思議な奇蹟を眺めて、宮殿に帰ってからも奇異の念に駆られて、考えました。

「わたしの親友がシッダ族の女(ひと)か、それとも天女なのか、それともヴィディヤーダラ族の女(ひと)か、本当に判らない。ともかく、あの方が天空を駆る天上の女性であることは確かだ。天上の女性が比類のない親愛の情に惹かれて、人間と交際する。アルンダティーもプリトゥ王*(人類最初の王)の女(プリ

ティヴィー「大地」）とは友情を結ばなかったではないか。プリトゥ王も、娘の交友によってスラビ（神牛、牛族の母）を天国から地上に連れてくることができなかったではないか。更に、地上に墜ちた彼はスラビの乳を飲んでも、天上に帰ることができなかったではないか。その以後、完全な乳牛は地上には生れなかったではないか。だから、わたしは幸福なのだ。あの天上の女性がわたしの親友になったのは、幸運によるものだ。明朝あの方が来られたならば、あの方の生れや名前をうまく聴くことにしよう。」

などと、王女カリンガセーナーは心の中で思いながら、その夜を過しました。また、ソーマ・プラバーも、カリンガセーナーにもう一度逢いたいと念じながら、その夜を自分の家で過しました。

三

こうして、翌朝になると、ソーマ・プラバーはカリンガセーナーを悦ばすために、魔法の技術でつくった立派な木製の機械人形を沢山に籠に入れ、それを携えて空中を飛んで、カリンガセーナーの許を再び訪れました。カリンガセーナーはソーマ・プラバーの姿を見ますと、涙を流して喜び、立上って彼女の頸に抱きつき、ソーマ・プラバーが傍に坐りますと、

「あなたの満月のお顔を見ないでいますと、わずかに三更の間でも、暗い夜はわたくしには百

更のように思われました。あなたとわたくしの前生での間柄がどんなであったか、また今の間柄がどんなことの果報であるのか、御存じでしたら話してくださいませ。」

と、ソーマ・プラバーに言いました。この言葉を聴きますと、ソーマ・プラバーが王女に言いました。

「そういうことを、わたしは知らないのです。わたしには、前生が憶い出せないのです。」

と、ソーマ・プラバーが言いますと、カリンガセーナーはかえって好奇心を起し、愛情と信頼に満ちたやさしい声で、彼女にひそかに申しました。

「ね、仰言ってくださいませ。美しく円い真珠のようなあなたは、どういう神々しい祖先の家に生れられて、その家を飾られましたのですか。あなたのお名前は、吉相ある方よ、世間の耳には甘露のように響くでしょうが、お名前はなんといわれますの。この籠はなんのためにお持ちですの。中には、なにが這入っていますの。」

と、カリンガセーナーが親しみをこめて言うのを聴きまして、ソーマ・プラバーはすべてを順序に話しはじめました。

「三界に名も高いマヤという偉大なアスラがいます。彼はアスラの地位を捨てて、シヴァ神の庇護を受けました。シヴァ神に庇護された彼は、インドラ神の宮殿を造営しました。すると、ダイティヤ*（アスラの別名）たちが

『此奴は神の味方だ。』

と、彼に対して怒りました。それを怖れて、彼はヴィンディヤ山中に、アスラ諸王の到達しえられない素晴らしい魔法の地下宮殿を造りました。わたしと姉とがこのマヤの娘で、姉はスヴァヤム・プラバーといい、未だ処女で未婚のまま父の家に留って学習をつづけています。妹のわたしはソーマ・プラバーといいまして、クベーラ神の子ナラ・クーヴァラに嫁がされました。父はわたしに魔法の技術を色々と教えてくれました。この籠はあなたを喜ばせようと思って、お人形を一杯つめて持ってきたのです。」

と言いまして、ソーマ・プラバーは籠をあけて、自分の魔法の技術で作った面白い木製の機械人形を、カリンガセーナーに見せました。その一つは、栓に触った途端に空中を飛び、彼女の指図に従って、花環を取って急いで帰ってきました。また、別の人形は水を自由に持ってきましたし、あるものは踊り、あるものは物語をしました。このように不思議な人形で暫くの間カリンガセーナーを悦ばせますと、夫に従順なソーマ・プラバーは魔法の籠をカリンガセーナーの手許にのこして、別れを悲しむカリンガセーナーに別れを告げ、空中を飛んで自分の宮殿に帰りました。不思議な玩具を見て夢中になりましたカリンガセーナーは、そのためにその日一日中なにも食べませんでした。それを見まして、彼女の母は彼女が病気ではないかと心配して、アーナンダという医師に診察させますと

「何でもありません。食欲のないのは、何か嬉しいことのためで、病気のせいではありません。微笑むような顔つきで、眼を大きく開いていられるのが、その証拠です。」

と言いました。医者の言葉を聴きました母后が嬉しい訳を訊ねますと、カリンガセーナーは一部始終を母に物語りました。そこで、母后はカリンガセーナーが望ましい友との交際を喜んでいると思い、彼女に喜びの言葉を述べ、彼女の口に合う食物をつくらせました。

さて、次の日、ソーマ・プラバーが来まして、やがて委細を知り、ひそかにカリンガセーナーに申しました。

「わたしはあなたとお友だちになりましたことを、霊智のある夫に話しましたところ、委細を知りました夫はわたしが毎日あなたをおたずねするのを許してくれました。ですからあなたもわたしと一緒に、いつまでも好きなときに、なんのわだかまりもなく楽しめるように、ご両親のお許しを早くえてください。」

と、ソーマ・プラバーから言われますと、カリンガセーナーは彼女の手をとって、直ぐに自分の両親の許にゆき、父に友のソーマ・プラバーの名と生れを述べて引きあわせ、また母のターラーダッターにも同じように引きあわせました。二人はソーマ・プラバーが娘の話した通りであるのを見まして、彼女を叮寧に迎えました。そして、王と妃とはソーマ・プラバーが化身して現われたのを喜び、娘に対する愛情から、偉大なアスラの美しい妻に

「愛しい方よ、カリンガセーナーをあなたにお委せします。ですから、あなたがた二人は好きなように楽しんでください。」

と言いました。そこで、カリンガセーナーとソーマ・プラバーの二人は、カリンガダッタ王とタ

ーラーダッター妃の言葉を聴き、喜んで外出し、魔法の玩具を容れた籠を持って、王の造営した僧院に遊びにゆきました。そして、ソーマ・プラバーは機械人形のヤクシャ（神怪の一、夜叉）を取り出し、自分が使うために仏を祀る品を取りに行かせました。ヤクシャは空を飛んで遠方に行き、真珠や美しい宝玉や黄金の蓮華を沢山に持ってきました。ソーマ・プラバーはこれらのもので仏を祀り、色々な神秘を現じて、諸仏とその宮殿をカリンガセーナーに見せました。

カリンガダッタ王はそれを聴き、妃をつれて其処に赴き、そのさまを見て驚嘆し、ソーマ・プラバーに魔術の行法をたずねました。するとソーマ・プラバーが答えました。

「王さま、これらの魔法の機械などの仕掛けは、むかしわたしの父が色々と造ったものであります。この世間というからくりが五大を本質としておりますように、これらの機械もみなその通りなのです。それらを一つ一つお話し致しましょう。土を主な材料として作りました機械は扉などを閉すのに用い、一度これで閉すときは、インドラ神でもそれを開くことはできません。水の機械で造られた人形はあたかも生きているように見えます。火から作られた機械は焔を出します。風が主な材料である機械は、行ったり来たりというような行為をします。空から作られた機械は、明瞭に聞きわけられる言葉を語ります。これらはすべて父から貰ったものであります。でも、不死の水を守る車の機械は、父だけが知っておりまして、余人は誰も知りません。」

と、ソーマ・プラバーが語っていますと、彼女の言葉を確証するかのように、日中に螺貝の音が轟き渡りました。

そこで、ソーマ・プラバーは王に自分の口に合う食物を恵まれるよう懇請しました。そして、王の許しを得て、カリンガセーナーを連れて、魔法の車に乗って空中を飛び、父の家にいる姉の許へ行きました。忽ちにヴィンディヤ山中にある父の宮殿に到着し、カリンガセーナーを姉のスヴァヤム・プラバーのところへ案内しました。カリンガセーナーがスヴァヤム・プラバーを見ますと、スヴァヤム・プラバーは束ねた頭髪を頭に巻きつけ、長い数珠をもち、真白な衣服をまとい、世の大楽である愛慾の享楽を最も激しい苦行として修めているパールヴァティー（シヴァ神妃）のように、微笑みながら梵行を行じていました。スヴァヤム・プラバーは、妹のソーマ・プラバーの引きあわせた王女が、自分の前に低頭しているのを見まして、厚くもてなし、食事に果物を食べさせました。ソーマ・プラバーは

「ねえ、あなたがこれらの果物を食べられたら、あなたは老衰することはないでしょう。さもなければ、あたかも身を切るような寒さが蓮をいためるように、老衰があなたのこの美しさを害ってしまうでしょう。ですから、わたしはあなたが愛しくて、あなたを此処に案内してきたのです。」

と、王女に語りました。そこで、カリンガセーナーがこの果物を食べますと、忽ちに彼女は自分の身体があたかも甘露の驟雨を浴びたかのように感じました。それから、彼女は好奇心を起して歩き廻り、都城の遊園を見ました。其処には、黄金の蓮華の咲きそろった池があり、甘露のように甘い果実のなった樹木があり、黄金色や種々の色の翅の鳥が飛びかっていました。また、美し

い宝玉の柱が立ちならんで、壁のないところでは壁の感じを与え、壁のあるところでは壁のない感じがしました。また、水のあるところは乾いた土地のような感じがし、乾いた土地では水の感じがしました。アスラのマヤが造営しましたこの遊園は、別世界のように思われました。嘗てシーター妃*を探しに猿群がこの遊園に這入りこみ、スヴァヤム・プラバーの恩寵によって、長い年月滞在した後に、ここから出てゆくことを許されました。こうして、この奇蹟の都城を思いのままに見物して驚嘆し、不老をえましたカリンガセーナーを再び車に乗せ、スヴァヤム・プラバーに別れを告げて、ソーマ・プラバーは空中を飛んで、タクシャシラーにあるカリンガセーナーの宮殿に彼女を連れ帰りました。

　カリンガセーナーが帰ってきまして一部始終を両親に物語りましたので、カリンガダッタ王と妃は非常に悦びました。

　このようにして、ソーマ・プラバーとカリンガセーナーとが毎日を送りましたが、ある日ソーマ・プラバーがカリンガセーナーに語りました。

「あなたが結婚されるまでは、わたしはあなたのお友だちでいることができますけれど、あなたが結婚された後、わたしはあなたの御主人の家にどうして這入ることができましょう。友だちの夫は決して見てはなりませんし、またそのような約束を決してしてはならないのです。牝狼が羊の肉を貪りくうように、姑は嫁の肉を食うのです。キールティセーナーの物語をお話ししましょう。聴いてください。」

〔姑に虐げられたキールティセーナーの物語〕

　むかし、パータリプトラに、富裕な人々の中で最も富み、その名はまさしくその境遇にふさわしいダナ・パーリタ（「財宝によって守られた者」の意）という商人がありました。この人にキールティセーナーという娘が生れました。キールティセーナーは、容姿はならぶものもないほどに美しく、父にとっては自分の生命よりも愛しく思われました。父はこの娘を、自分と同じように富裕なマガダ国の商人デーヴァセーナに嫁がせました。デーヴァセーナは性質のよい人でしたが、父は既に死んでいて、意地の悪い母親がいました。姑は嫁のキールティセーナーが夫と琴瑟相和しているのを見て嫉妬し、息子のいない留守を狙っては、キールティセーナーをいじめました。しかし、キールティセーナーはそれが夫に知れるのを怖れました。まこと、意地悪い姑の手にかかったとき、花嫁の身は姑の思いのままです。

　あるとき、夫のデーヴァセーナは親類の者に誘われて、商用のためにヴァラビーに行くことになりました。そこで、キールティセーナーは夫に

「あなた、わたしは長いことあなたには申しあげませんでしたが、あなたがいられても、あなたのお母さんはわたしをいじめられます。あなたが旅行に出られましたら、お母さんがわたしにどんなことをされるか、わかりません。」

と申しました。この言葉を聴きますと、デーヴァセーナは妻に対する愛情から大いに驚きましたが、母を怖れて、心悩みながら静かに母の許に赴き、恭しく母に言いました。

「わたしは旅に出かけますので、キールティセーナーを今日から、お母さん、あなたにおまかせ致します。どうぞキールティセーナーに無慈悲なことをなさらないでください。これは良家の生れなのですから。」

と、デーヴァセーナーの言うのを聴きますと、母親は目尻をあげてキールティセーナーを呼ばせて、デーヴァセーナーにそのとき

「わたしがどんなことをしたと言うのだい。このように、この女はお前に焚きつけるのだよ。この女は家内に不和を惹き起そうとするんだよ。わたしにとってはね、伜や、お前たち二人とも同じなんだよ。」

と申しました。この言葉を聴きますと、この善良な商人は安心しました。母親の偽りの愛情深い言葉を聴いて、だまされない人がありましょうか。しかし、キールティセーナーは困惑の微笑を浮べながら黙っていました。商人デーヴァセーナは、その翌日、ヴァラビーに向けて出発しました。

キールティセーナーが夫と離れて心細さに悩みはじめますと、姑は次第にキールティセーナーの召使たちを彼女の側から遠ざけました。そして、自分の召使の女と相談をして、キールティセーナーを秘かに自分の部屋につれてきて、裸にし、

「悪性の女め、お前はわたしの伜を奪ったのだ。」

と言いながら、キールティセーナーの髪をひっぱり、召使の女と一緒になって彼女を足蹴にし、彼女に噛みつき、また爪で引掻きました。しかも、穴蔵の中にあった物をあらかじめ出しておいて、重い蓋があり丈夫な閂のついた穴蔵の中に、キールティセーナーを放りこみました。そして、この悪い女は、穴蔵の中にいるキールティセーナーに、毎日夕方に皿に半分の食物しか与えませんでした。しかも、

「日数を経たのちに、『この女は亭主が外国へ行った留守に、このように自分から死んでしまった。この屍を捨てておしまい。』と言おう。」

と考えました。キールティセーナーは姑のために無惨にもこのように穴蔵に投げこまれ、幸福をふみにじられて、涙ながらに考えました。

「夫は金持だし、わたしは良家に生れて、行いは正しい。それにも拘わらず、ああ、姑のためにこのような苦しみに遭うとは、なんということだろう。こういう訳だから、親類縁者は娘の誕生を悲しむのだ。女というものは、姑や小姑の怖ろしさに曝され、色々な不幸にさいなまれるのだから。」

と嘆き悲しんでいましたが、キールティセーナーははからずも、その穴蔵の中で、小さな鋤をみつけました。あたかも創造主が彼女の心から棘を抜いてくれたかのようでありました。彼女はこの鉄製の道具で地下道を掘りますと、幸いにも自分の部屋に達しました。しかも、彼女が自身の不

滅の徳によって照されているかのように、その部屋には燈火がともされていました。彼女は自分の衣服類と黄金を持ち出して、夜明けに人知れず其処を立去り、城外に逃れました。

「このような始末で父の家に行くのはいけない。実家でどのように言うべきか判らないし、また世間がわたしの言うことをどうして信用しよう。だから、なんとか工夫して、夫の許へ行かねばならぬ。この世に於いても、またあの世でも、夫は貞淑な女の唯一の頼りなのだから。」

と、キールティセーナーは考えて、城外の池で水浴して、王子の着る素晴らしい衣服を着ました。それから市場に行って黄金を貨幣に換え、その日はある商人の家に泊りました。

その翌日、ヴァラビーに行こうとしているサムドラセーナという商人と知り合いになり、華美な王子の服装をしたキールティセーナーは、この商人の一行とともに、嚮に出発した夫の後を追うて、ヴァラビーに向け出発しました。そして、この商人には

「自分は一族の者に迫害されたので、君と一緒にヴァラビーにいる親族の許に行くのだ。」

と語りました。この言葉を聴きまして、サムドラセーナは

「この方は何処かの王子に相違ない。」

と思い、彼女を尊敬して道中の世話をしました。この商人の一行は、多額の税を支払うのを厭うて人々がよく通る大森林の中の道を選んで行きました。日を経て、森林の入口に達し、一行が其処にその夜宿営しますと、死の使者のように豺が怖ろしい声で吠えました。その吠声で商人の一行は盗賊の襲撃を覚り、護衛の者たちは武器を手にして四方に待ち受けました。夜暗は盗賊の先

駆のように近づいてきました。男装のキールティセーナーはそれを見て、考えました。

「ああ、悪い所行の人々の業（ごう）は、あたかも流血のように増大してゆく。姑がわたしに与えた苦しみは、ここで実を結んだ。最初には、死神に食われるかのように、わたしは姑の怒に呑まれた。その後、わたしは第二の胎内のような穴蔵に這入らされた。運命によって、わたしは其処から抜け出したが、それはわたしには二度目の誕生のようであった。今日、ここで、わたしは再び生命の危険に曝された。わたしが此処で盗賊に殺されたならば、わたしを憎む姑は夫に

『他の男に惚れて、何処かに行ってしまった。』

と言うであろう。また、もし誰かがわたしの衣服の端を引きちぎって、わたしが女だと知ったならば、わたしの操を汚されるかも知れない。それよりは、死ぬ方がましだ。だから、わたしは自分の身を護らねばならぬ。この友人の商人は見捨てよう。女は貞節ということだけを考えるべきで、友人のことなどは考えなくてもよいのだから。」

と決心して、周囲を探しますと、あたかも大地が彼女を憐れんで隠れ家を授けたかのように、大樹の幹に空洞のあるのが見つかりました。キールティセーナーはその空洞に這入り、草や葉でわが身をかくして、夫との再会のみを念じて其処にいました。かくて、真夜中になると、盗賊の大群が俄かに武器をかざして襲来し、商人の一行を包囲しました。そして、戦の雷雨が起り、盗賊の雄叫びは雷鳴のごとく、刀剣のきらめきは長くつづく稲妻のごとく、血の雨がふりそそぎました。盗賊の群は商主サムドラセーナとその一行の者たちを殺し、彼の財貨をすべて奪い去りまし

た。

キールティセーナーはこの騒動に耳を澄ましていましたが、彼女が其処で危うく生命を奪われなかったのは、すべて運命のしからしめるところでした。こうして、夜があけて灼熱の太陽が昇ると、樹木の真中にある空洞から出ました。夫に純愛を捧げて心にゆるぎのない貞節な女たちが不運に陥ったときには、たしかに神は保護されるのであります。人影のない森林の中で、獅子が彼女をみつけても、獅子は彼女に危害を加えませんでした。すると、間もなく、ひとりの苦行僧が何処からか近づいてきました。彼女が事情を話してたずねますと、その苦行僧は彼女を慰め、水筒の水を飲ませ、道を教えて、何処かに去って行きました。すると、彼女は甘露を飲んだかのように飢も喉の渇きも感じなくなり、夫に会いたい一念で、苦行僧の教えてくれた道を進んでゆきました。

こうして、太陽が西方の山に傾き、「一夜を辛抱せよ。」と指示するかのように、指に似た光線をさし伸ばしたのを見まして、キールティセーナーは森の樹の根元にある、家にも似た空洞に這入り、入口を他の樹木で覆いました。そして、夜になると、戸の隙間から、怖ろしい羅刹の女が幼い子供たちを連れて、やって来るのが見えました。

「他の苦難は漸く凌いだけれど、今日はあの羅刹の女に食われるだろう。」

と、キールティセーナーが慄えていますと、その羅刹の女は樹に登りました。それに続いて、その子供たちも登って、羅刹の女に

「お母ちゃん、何か食べるものをお呉れ。」

と、そのとき言いました。すると、羅刹の女は子供たちに

「坊やたち、今日は墓場に行ったのだけれど、食物をなにも手に入れることができなかったのだよ。ダーキニー（魔女）の衆にお願いもしたのだけれど、分け前を少しも分けて呉れなかった。そこで、わたしは悲しくなってバイラヴァ（シヴァ神の異名）さまに訴えて、食物をお願いしたんだよ。すると、神さまはわたしの名や生れをお訊ねになって、わたしにこのようにお告げになったのだよ。

『そなたはカラとドゥーシャナの家に生れた血統正しい者だ。されば、此処より余り遠くないヴァスダッタ城*に行け。其処には、ヴァスダッタという有徳な大王がいる。この王は森林のはずれに住んで森林全体を守り、税を徴収するとともに盗賊どもを捕縛している。あるとき、森林で狩猟を行い、疲労した王が睡っていると、知らぬ間に百足が王の耳の中に素早く這入りこんだ。そして、暫くの間に、頭の中に子を生み、その病気のために王の体内の腱がいまや切れかかっているのだ。医者さえも、その病気の原因が判らない。誰かがそれを知らなければ、王は数日の中に死ぬであろう。そのとき、王の肉を食べよ。そうすれば、そなた自身の魔力によって、そなたは六ヵ月の間満腹していられるであろう。』

このようにバイラヴァさまは、不確実な、将来でなければ獲られない分け前を約束されたのだよ。だから、坊やたち、わたしはどうしたらよいのだろうかね。」

と、このように羅刹の女が言いますと、彼女の子供たちが申しました。

「その人の病気が発見されて治療されたなら、お母さん、王さまは生き永らえるのですか。それに、どうしたら、そういう病気は治るのですか、話して下さい。」

と、子供たちが言いますと、羅刹の女が子供たちに言いました。

「その病気が発見されて治療されたときには、王は生き永らえるのだよ。どんなにすれば、王の大病が治療されるか、まあ、お聴きよ。まず頭に温い溶酪を塗り、日中の劇しい暑熱に長い間曝すのだよ。中空の茎を耳孔にさし、その先端を冷水の瓶に浮べた皿の孔の中にさしておく。すると、発汗と暑熱に悩んで、百足どもは頭の中から出てきて、耳孔を通って、その茎の中に這入る。冷たさをもとめて、百足どもは瓶の中に墜ちるのだよ。こうすると、あの王はあの大病から治るのだよ。」

と、羅刹の女が樹上で子供たちに語りました。キールティセーナーは樹の洞穴の中にいて、そのすべてを聴きました。この言葉を聴いて、彼女は考えました。

「もし此処から逃れることができたならば、わたしはヴァスダッタ城に行って、この手段を用いて、王の生命を救ってあげよう。王は森林の端に住み、僅かの税を徴収して、森林地帯を守護している。だから、商人はすべて通行に便利なので、この道を通る。あの死んだ商人サムドラセーナも、このことをわたしに話した。わたしの夫も必ずやこの道を通るであろう。森林の端にあるヴァスダッタ城に赴いて、王の病気を癒し、其処にいて夫の帰ってくるのを待とう。」

と考えながら、漸くのことでその夜を過し、朝になって羅刹どもが姿を消すと、その洞穴から出

ました。

キールティセーナーが男装のままでそれから森の中を次第に旅をしていますと、午後になって一人の善良な牛飼に遭いました。牛飼は彼女の容姿がすぐれているのを見まして、また彼女が長途の旅をしたことを知り、同情しました。彼女は牛飼に近づいて

「この土地は何処ですか。話してください。」

と訊ねました。すると、牛飼は

「あそこにある都城はヴァスダッタ王のヴァスダッタ城であります。王は大度ある方ですが、病気のために瀕死の状態です。」

と答えました。キールティセーナーはこの言葉を聴きますと、牛飼に

「もし誰かがわたしを王の側に連れていってくださるなら、わたしは王の病気を治すことができます。」

と申しました。すると、牛飼が

「いま都城に行くところです。わたしと一緒に参りましょう。兎も角、骨を折ってみましょう。」

と言いましたので、キールティセーナーが

「そうお願いします。」

と言いますと、牛飼はすぐ男装の彼女をヴァスダッタ城に案内しました。そして、都城に着きま

すと、直ちに王の病気に苦悩している侍従に事情を説明して、彼女を委ねました。侍従は王に奏上し、王の命令で、この無垢の彼女を王の面前に通しました。

「ヴァスダッタ王は病気のために苦悩していましたが、この素晴らしく美しい女性を見て、心が和ぎました。まこと心は利益をもたらすものと害をなすものを見わけるものであります。そして、男装の彼女に

「もしこの病気を治してくださるなら、瑞相の方よ、わたしの王国の半分を差し上げましょう。夢の中で一人の婦人がわたしの背から黒衣を脱がすのを見ました。あなたは必ずやわたしのこの病気を治して下さいましょう。」

と申しました。この言葉を聴きますと、キールティセーナーは

「王さま、今日は終りました。明日、御病気をお治し申上げます。どうぞ御心配なさいませぬよう。」

と言いまして、王の頭に牛乳の溶酪を塗りました。そのため、王は熟睡することができ、激痛がなくなりました。

「医者の姿をされて、どなたか神さまがわれわれの福徳によって来られたのだ。」

と、列座の人々はキールティセーナーを賞讃しました。王妃は彼女をいろいろと手を尽してもてなし、別に部屋をしつらえて、侍女を侍らせました。

「さて、その翌日の日中に、大臣や後宮の妃妾たちが見つめるうちに、キールティセーナーは

曾て羅刹の女が語った不思議な手段を用いて、耳孔から頭の中に巣くうた百五十四の百足を引き出しました。彼女はこれらの百足を瓶の中に入れた後、乳酪や牛乳などで罨法を施して、王の気分を爽かにしました。王が次第に回復してきますと、その場にいた人々は瓶の中にいるこの動物を見て、驚かない者は一人としてありませんでした。王もまた頭の中から出てきた害虫を見まして、怖れ、驚き、そして喜び、生れ変ったように思いました。王は身体を清め、大饗宴を催して、王国の半分を受けようとしないキールティセーナーに、村落、象、馬、黄金を贈りました。また、王妃も、大臣たちも

「われわれの王の生命を救ってくださったお医者さまを敬わねばなりませぬ。」

と、彼女に黄金や衣服を数多く贈りましたが、夫を待ち焦れる彼女は

「わたしは暫くの間斎戒をしています。」

と言って、これらの財宝をすぐに王の手に委ねました。

こうして、キールティセーナーは男装のままで、すべての人々から崇められて、その地に幾日か逗留しました。すると、夫の商主デーヴァセーナがヴァラビーからヴァスダッタ城への道をやってくるということを、人々から聞きました。そして、その一行が都城に到着したのを知って、彼女は近づいて夫を見ましたが、あたかも雌孔雀が新らしい雨雲を見たかのようでありました。彼女は夫の足許に縋りつきましたが、長い別離の苦しみに泣いた彼女の心は、喜びの涙を閼伽の水として、夫に捧げるかのようでありました。夫のデーヴァセーナも、あたかも太陽の光のため

に日中には見えなくなる月輪のように、姿を変えた彼女をよく見て、妻のキールティセーナーであることを知りましたが、彼の心は彼女の月の顔容を見ましても、月光石*のように溶けませんでした。

こうして、キールティセーナーは身分が明らかとなりましたが、夫は

「これはどうしたことか。」

と、いぶかしく思いましたし、また商人の一行も驚いていますと、ヴァスダッタ王はそのことを知って不思議に思い、親しく其処へ行かれました。王がキールティセーナーに事情を訊ねますと、彼女は夫の前で、姑の非行のために惹き起された冒険をつつまず物語りました。デーヴァセーナは彼女の言葉を聴きまして、自分の母親に嫌厭を感ずるとともに、激しく憤りましたが、人前を憚って怒をおさえました。そして、キールティセーナーの数奇な運命に驚くとともに、妻との再会の喜びに溢れました。すると、其処に居あわせた人々はみな、キールティセーナーのこの素晴らしい行状を聴いて喜び、

「貞淑な婦人は夫に対する誠信という車に乗り、貞節の鎧に身をかため、正法を御者とし、意志を武器として、勝利をかちえるものだ。」

と語りあいました。ヴァスダッタ王もまた

「この婦人は夫のために苦しみを堪えしのび、まさしくラーマ王子の苦しみを分ちあったシーター妃にもまさる方である。されば、余の生命の恩人であるこの婦人は、今後、余の法妹である。」

と、仰せになりました。すると、キールティセーナーが王に

「王さま、あなたさまが心をこめてわたしに贈ってくださいました村落や象や馬や宝玉などを、あなたさまのお手にお預けいたしておりましたが、なにとぞわたしの夫にお授けくださいませ。」

と申しました。王は満悦されて、直ちに村落などを彼女の夫デーヴァセーナに贈り、また礼遇の冠を授けられました。

こうして、デーヴァセーナは王から贈られた財宝と商売によって儲けた財貨とをあわせて、財産が非常に殖えました。そして、母を捨て、キールティセーナーを琴瑟相和して、この都城に住みました。キールティセーナーは意地悪い姑に奪われた幸福を再び取戻し、比類のない所行によって名声を博し、夫の善行が化身したかのような欠けるところのない贅沢と栄華な生活を送りました。

「このように、貞淑な夫人は逆境に堪え、不幸の際にも、自分の宝とする操をまもり、みずからの勝れた性質という偉大な威力に護られて、夫と自分自身に福徳をもたらすのです。王女よ、このように、花嫁には姑や小姑のために惹き起される多くの不幸があります。ですから、姑や意地悪い小姑のいない夫の家を、わたしはあなたのために望みます。」

と、アスラ王の娘ソーマ・プラバーからこの面白い不思議な物語を聴き、人間の王の娘カリンガ

セーナーは非常に悦びました。すると、数々の意味のある物語の終ったのを見たかのように、太陽が沈みはじめましたので、ソーマ・プラバーは別れを悲しむカリンガセーナーを抱きしめた後、自分の宮殿に還ってゆきました。

四

自分の宮殿に還ってゆくソーマ・プラバーを見送ろうとして、別れを惜しむカリンガセーナーが大道に面した宮殿の露台の頂に登っていますと、たまたま宮中を旅行していたマダナ・ヴェーガという若いヴィディヤーダラ王が、彼女を見ました。彼はカリンガセーナーの容姿が三界を魅了するほどに麗わしく、恋の神の孔雀の翅にも似ているのを見まして、心が乱れました。

「ヴィディヤーダラ族の女どもなど、もういらない。この人間界の女性の素晴らしい容姿の前では、天女とて問題にならぬ。彼女がわたしの妻にならないのならば、自分の生命などどうでもよい。だが、ヴィディヤーダラであるわたしは、どのようにして人間と契を結ぶべきであろうか。」

と考えた後、祈念してプラジュナプティ*という学問を思いおこしました。すると、その学問は化身して示現し、そのとき彼にこのように語りました。

「彼女は本当は人間ではない、彼女は呪詛によって人間界に墜ちた天女で、祝福されたカリンガダッタ王の家に生れたのである。」

と、学問から告げられたヴィディヤーダラ王は、喜んで自分の宮殿に還りましたが、恋に悩んで考えました。

「彼女を無理に奪い去るのはよくない。女を無理に連れ去って妻とするとき、わたしは呪詛されて死ぬであろう。だから、わたしは彼女を得るために苦行をして、シヴァ神を宥慰しよう。苦行によって幸福は得られるのであるから。そのほかに手段はない。」

と決心し、その翌日リシャバ山*に赴き、食物をとらないで片足で立って、苦行を行いました。すると、アムビカーの夫（シヴァ神の異名）はマダナ・ヴェーガの劇しい苦行に満悦され、間もなく姿を現じて、彼に言われました。

「かの王女はカリンガセーナーといい、容姿の美しいことで地上では有名である。天賦の容姿の点で、彼女にふさわしい夫はない。ただヴァツァ王のみは彼女の夫にふさわしく、また彼女を妃に迎えたいと望んでいるが、ヴァーサヴァダッター妃に対する気兼ねから公然と求婚していない。容姿すぐれた夫を望むかの王女も、やがてソーマ・プラバーの口からヴァツァ王のことを聴き、ヴァツァ王を夫に選ぼうと思い、彼を恋慕するようになるであろう。彼女の結婚式が行われない間に、彼女が恋い焦れているヴァツァ王に姿をかえ、行ってガーンダルヴァ式*の結婚で彼女を妻とするがよい。こうすれば、美女カリンガセーナーはそなたの妻となるであろう。」

と、シヴァ神から教えられたマダナ・ヴェーガは神の前にひざまずいて感謝した後、カーラ・ク

ータ山*の斜面にある自分の館に還りました。

話かわって、ソーマ・プラバーは夜になるといつも自分の宮殿に還りましたが、夜があけると天空を飛ぶ車に乗って、カリンガセーナーのところへ来ました。ある日、カリンガセーナーがソーマ・プラバーと一緒に、タクシャシラー城に行って遊んでいましたとき、ソーマ・プラバーに言いました。

「ねえ、わたしがいまお話し申上げることを誰にもお話しにならないで下さい。わたしの結婚が近づいたと思われます訳を聴いて下さい。わたしを貰いに、多くの王が使者を此処に遣わしてこられます。父はそのような人々を引見はしますが、そのまま帰します。ところが、シュラーヴァスティー*にプラセーナ・ジット*という王がいますが、その王の使者だけを父は厚く迎えました。父は母と相談をして、

『この王は名家の出である。』

とて、わたしの夫とすることに両親の意見が一致したと思います。と申しますのは、この王はクル族およびパーンダヴァ族*の父方の祖母であるアンバー*とアンビカー*とが生れた家の生れだからです。ですから、両親がわたしをシュラーヴァスティーのプラセーナ・ジット王に嫁がせようとしていることは確かなのです。」

と、カリンガセーナーから聴きますと、ソーマ・プラバーは悲んで、あたかも第二の頸飾りのように、涙の雨を降らせました。カリンガセーナーがソーマ・プラバーに涙の訳をたずねますと、

地上世界を隈なく見ているソーマ・プラバーは語りました。

「若さ、容姿、家柄、勝れた気質および財産、これらは求婚者に望ましい条件ですが、これらの中で若さが第一で、家柄などは二の次です。プラセーナ・ジット王は、わたしの見たところでは、老齢です。茉莉花にこそ生れが大切ですが、老齢の人にとっては家柄はなんの役に立ちましょう。雪のように白い男と一緒では、あなたは冬の寒さにひしがれた蓮華の池さながらに、あなたの顔は萎れた蓮華の花となり、あなたは憐れな身となりましょう。そのゆえに、あなたが可哀そうになったのです。しかし、ヴァツァ王ウダヤナが、福徳ある方よ、あなたの夫になるならば、これほど嬉しいことはありません。この地上に於いて、容姿、魅力、家柄、勇気および財力の点で、ウダヤナ王に匹敵する王者はありません。あなたがあなたにふさわしいこの王を夫とせられるならば、創造主があなたに発揮した美の手腕は立派に実を結ぶのです。」

と、ソーマ・プラバーが意図して語った言葉によって、あたかも機械で推進させられたかのように、カリンガセーナーの心はヴァツァ王に飛んでゆきました。

そして、王女はソーマ・プラバーに

「ヴァツァ王という方はどんな方ですの。ねえ、どういう家柄に生れた方ですの。また、何故にウダヤナという名ですか。わたしに話してください。」

とたずねました。そこで、ソーマ・プラバーが話をしました。

「お聴きなさい、お話をしましょう。ヴァツァという地上の装飾たる国土があります。その地

にカウシャームビーという都城がありますが、まさしく第二のアマラーヴァティー*です。かの王はその地を統治していますので、ヴァツァ王と言います。福徳ある方よ、ヴァツァ王の家系を話しますから、聴いてください。パーンダヴァ族のアルジュナ*に、アビマヌユ*という子がありました。軍勢の円形陣を潰滅するのに長じたこの人によって、クル族の軍勢は滅ぼされたのです。アビマヌユの子がバラタ族の頭梁であったパリークシット*王で、パリークシットの子が蛇祭を執行したジャナメージャヤ*です。その子がカウシャームビーに都したシャターニーカ*で、神とアスラの戦に於いて多くのダイティヤたちを殺して戦死しました。この王の子がサハスラーニーカ王で、世間の称讃の的となり、インドラ神がこの王の許に車を派遣したので、王は天国へ行って帰ってきました。この王と王妃ムリガーヴァティーとの間に生れたのが、ウダヤナ王です。彼は月種族*の飾りで、世間の人々の眼には喜悦であります。彼の名には訳があります。お聴きなさい。この勝れた生れの王の母ムリガーヴァティーが妊娠したとき、妊娠時の異常嗜慾から血で浴みをしたいと望んだのですが、彼女の夫は罪を犯すことを怖れて臙脂などで風呂をつくり、彼女はそれに這入りました。ガルダ族の鳥が彼女を生肉と思って攫ってゆきましたが、運命の力によって彼女を生きたまま東方の山に捨て去りました。ジャマダグニ仙が彼女を見て、夫との再会が必ず来ると慰めましたので、彼女はジャマダグニ仙の隠棲処に留まっていました。このようなことは彼女の夫が天女ティロッタマーを蔑にしたことによって、天女が彼女を呪詛したために起ったことでして、彼女は暫くの間夫と別れていなければなりませんでした。そして、日を経て、東方の山に

あるジャマダグニ仙の隠棲処で、あたかも天が新月を生むかのように、息子を生みました。神々はこの子が東方の（ウダヤ）山で生れましたので、

『生れたるウダヤナは一切の大地の大王たるべく、またこの子は一切のヴィディヤーダラの覇王たる子を生まん。』

と、神々は天空から姿なき声で語られ、この子をウダヤナと名づけました。

サハスラーニーカ王はマータリ（インドラ神の車の御者）から事情を聴き、呪詛の終るのに望をつないで、ムリガーヴァティー妃のいない生活を辛うじて過しました。呪詛が終ったとき、彼は東方の山からたまたま来た一人のシャバラ（蛮族の一）から、自身が妃に与えていました証拠の品を手に入れました。そのとき、天上の声が真実を得ましたので、彼はシャバラを先導にして東方の山に赴きました。其処で彼は希望の成就のごときムリガーヴァティー妃と心の王国のごとき息子のウダヤナに会いました。二人を連れて首都カウシャームビーに帰りますと、息子の徳が勝れているのに満悦して、この子を皇太子に灌頂しました。そして、ヤウガンダラーヤナなど大臣の息子たちを太子の輔弼としました。この王子が国政の重責を担う年齢になりますと、サハスラーニーカ王は国政を王子に委ねてムリガーヴァティー妃と永く楽しい生活を送り、時経てウダヤナ太子を王位に即かせた後、老齢の王は王妃と大臣たちを連れて長途の旅に出ました。このようにして、ウダヤナ王は父祖からの王国を得た後、ヤウガンダラーヤナを友として、大地をのこらず征服して統治したのです。」

と、ソーマ・プラバーは簡単にウダヤナ王の物語をしまして、再びカリンガセーナーに言いました。

「このようにヴァツァ国を統治していますのでヴァツァ王というのです。麗わしい容姿の姫よ、彼はまたパーンダヴァ王家の生れですから、月種族の生れです。そして、東方の山で生れたゆえに、神々は彼にウダヤナという名を授けたのです。しかも、この世に於いて容姿の勝れている点では、カンダルパ（恋の神カーマの異名）でさえも彼に及びません。三界の美女よ、あなたにふさわしい夫は、この王のみです。美女を妃に望んでいるかの王もまた、美しいことでは世に名高いあなたを、必ずや望んでいます。しかし、かの王にはチャンダ・マハーセーナ王の娘のヴァーサヴァダッターという妃があります。彼女は彼を深く愛して親族を捨て、ウシャーやシャクンタラー*などのように処女の羞らいもかなぐり捨て、彼を夫に選んだのです。この王と妃との間に、ナラヴァーハナダッタという王子が生れましたが、この王子は将来ヴィディヤーダラ族の覇王になると神々が宣言されました。従って、ヴァツァ王はこの妃に遠慮して、あなたを懇請しないのです。わたしは彼女を見ましたが、天賦の美しさでは到底あなたには及びません。」

と、ソーマ・プラバーが言いますと、ヴァツァ王を恋したカリンガセーナーが彼女に語りました。

「よく判りました。でも、両親の膝下にいるわたしに何ができましょう。あらゆることを知りつくして、しかも神通力を持っていられるあなたこそ、このことに就いて、わたしの頼りにする唯一人の方です。」

と、カリンガセーナーが言いますと、ソーマ・プラバーが

「そのすべては運命です。このことに就いて、こういう物語を聴いてください。」

と言って、この物語を彼女に話してきかせました。

〔テージャスヴァティー姫の物語〕

ウッジャイニーの都城に、ヴィクラマセーナという王がいました。この王にテージャスヴァティーという、他に比類のない容色の王女がありました。彼女に求婚する王は数多くありましたが、誰も彼女の気に入りませんでした。或る日、彼女が宮殿の露台にいましたとき、一人の男を見ました。その男の姿が美しかったので、運命のしからしめるところ、彼女はこの男に会いたいと思いました。そして、自分の侍女に命じて自分の心の中をその男に告げさせました。侍女はその男のところへ行き、

「あなた、此処から見えますあの孤立した神殿で、今夜王女さまが来られるのを待っていて下さい。」

と言いまして、そのような不敵な所行をためらって嫌がる男に漸く納得させました。侍女はその男に別れてテージャスヴァティーの許に帰り、太陽を眺めて立っていました彼女に、その旨を告げました。しかし、その男は同意しましたものの、恐怖から何処かへ逃げてしまいました。蛙は

赤い睡蓮の茎を味わうことはできないのです。

話かわって、勝れた家柄のソーマダッタという王子が、父の死後、父の友人であったヴィクラマセーナ王に会いにやって来ました。簒奪者に王国などを奪われたこの若くて美貌の王子は、夜間にひとりで来て、たまたま侍女が王女との逢曳を男に約束させた神殿でその夜を過そうと思って、其処に這入りました。夜中になって、王子が其処にいますと、恋に盲目となりました王女が近づいてきて、彼が誰であるかを見定めもしないで、彼をみずから選んだ夫にしました。賢明なソーマダッタ王子は運命の授けてくれた彼女を黙って喜んで妻としましたが、彼女こそ彼が将来に於いて王位の栄光に再会することを告げ知らせる花嫁でありました。王女はやがて彼が勝れて美貌であることを知り、創造主に騙されなかったと考えました。彼等両人は直ちに睦み合い、約束をして別れました。一人は自分の館に帰り、一人は其処で夜を過しました。

翌朝、王子はヴィクラマセーナ王の王宮に赴き、侍従を通じて自分の名を告げ、許されて王の前に参入しました。迎え入れられた王子はヴィクラマセーナ王に、王国が簒奪されたことなどの苦悩を物語りましたので、王は王子に敵の掃蕩に助力することを約束しました。そして、以前から嫁がせようと考えていました娘のテージャスヴァティーをソーマダッタ王子に嫁がせようと決心し、大臣たちに自分の計画を語りました。すると、侍女の口から王女の冒険についてあらかじめ聴いていました妃が、そのことを王に告げました。王は不幸が避けられたばかりでなく、あたかも烏と椰子の実の物語*のように、偶然に希望が成就したことを知り、驚いていますと、一人の

大臣がそのとき王に申しました。

「運命はまこと勝れた人々の目的の成就を見まもっています。たとい彼等が気づいていなくても、召使が主人を見まもっていますように、見まもっているものであります。陛下、この点について、こういう物語をお話し申上げましょう。お聴きください。」

〔婆羅門ハリ・シャルマンの物語*〕

或る村に、ハリ・シャルマンという婆羅門がいました。この婆羅門は貧乏で、馬鹿で、職業もなく、惨めな暮しをしていました。しかも、子供が沢山に生れて、前生の悪業の果実を味わねばなりませんでした。彼は家族をつれて乞食をしながら諸方をさまよい歩き、遂にストゥーラダッタという長者の世話になりました。彼は子供たちを長者の家の乳牛などの番人にし、自分の妻をその家の下女にして、自分はその家の走り使いをしながら、近くに住んでいました。

あるときストゥーラダッタの娘の結婚式の饗宴が行われ、花婿の仲間やその行列の一行が大勢来ました。そのとき、ハリ・シャルマンは乳酪や肉などを喉につかえるまで食べたいと希望をつないで、家族とともに長者の家にいました。彼はその時を待ち望んでいましたが、誰も彼のことを考えませんでした。こうして食物を貰えないで失望しました彼は、夜になると妻に言いました。

「わたしが愚かで貧乏なために、此処でもこのように馬鹿にされるのだ。だから、策略を用い

て、贋の知慧を見せびらかして、ストゥーラダッタから尊敬される身となろう。機会があったら、お前はわたしが神通力をもっていると、あの男に告げよ。」

と言いまして、色々と考えた後、人々が寝静まると、花婿が乗ってきた馬をストゥーラダッタの家から盗み去り、遠くに隠しておきました。朝になると、花婿の仲間はあちらこちらと馬を探しましたが、見つけることができませんでした。すると、この不吉な出来事に心惑い、馬盗人を探しているストゥーラダッタのところに、ハリ・シャルマンの妻が近づいて、

「わたしの夫は学識があり、占星学などに通じています。夫はあなた方の馬をきっと探しだしましょう。何故わたしの夫にお訊ねにならないのですか。」

と言いました。この言葉を聴きますと、ストゥーラダッタはハリ・シャルマンを呼ばせました。すると、ハリ・シャルマンが

「わたしは昨日忘れられていた。今日、馬が盗まれると、思い出された。」

と言いましたので、ストゥーラダッタは

「わたしたちはあなたのことを、すっかり忘れていました。わたしたちを許してください。」

と、婆羅門をなだめ、

「誰が馬を盗んだのか、話してください。」

と頼みました。すると、ハリ・シャルマンは偽りの図面を描いて、

「此処から南方の国境に盗人たちは馬を隠しています。夕方に遠くへ連れ去られるまでに、急

いで行って馬を連れてきなさい。」

と言いました。この言葉を聴きますと、多くの人々は直ちに其処に走り、馬を見つけて、ハリ・シャルマンの学識を賞讃しながら、馬を連れかえりました。こうして、ハリ・シャルマンは学者であると皆のものから尊敬され、またストゥーラダッタからも崇められて、その家で幸福に暮しました。

さて、月日が経って、あるとき王宮内から黄金・宝玉などが夥しく盗賊に盗み去られました。盗人がわかりませんので、神通力があるとて有名だったハリ・シャルマンを、王は急いで呼び寄せました。彼は召喚されますと、時間を引きのばそうと考えて、

「明日、申しあげましょう。」

と言いますと、王は彼を部屋に入れて十分に警護させました。彼は自分の贋の学識に沈みこんでいました。

その王宮に、ジフヴァーという婢女がいました。彼女は兄と共謀して王宮内から財宝を盗んだのでしたが、ハリ・シャルマンの学識を怖れ、彼の動静を探ろうとして、夜中に彼のいる部屋に近づき、戸に耳をあてました。ハリ・シャルマンはただひとり部屋にいて、贋の学問を喋った舌を責めて、

「舌(ジフヴァー)よ、享楽を渇望して、汝は何ということをしたのだ。悪行をなしたる者よ、今こそ汝はここにて罰を受けよ。」

と言いました。この言葉を聴きますと、ジフヴァーという下女は神通力のあるハリ・シャルマンに見破られたという恐怖から、巧みに手段を講じて、彼のところに這入りこみました。そして、足下に平伏して、贋の賢人に

「婆羅門さま、財宝を盗んだと、あなたさまに見破られましたジフヴァーと申しますのは、わたしでございます。わたしは財宝を盗み出しますと、それをこの宮殿の裏にある遊園の柘榴の樹の下の地下に埋めました。ですから、なにとぞお許しくださいませ。わたしが持っております黄金は少しですけれども、これをお受けくださいませ。」

と申しました。この言葉を聴きますと、ハリ・シャルマンは厳かに彼女に言いました。

「行け。余は過去・現在・未来の一切を知っている者だ。だが、余は懐に飛びこんできた哀れなそなたを見捨てはしない。そなたが手に入れたものは、何によらず余に返すのだ。」

と、彼が言いますと、下女のジフヴァーはそれに同意して、そこから急いで出てゆきました。ハリ・シャルマンは驚いて考えました。

「幸運はあたかも悪戯のように成就すべからざることを成就させる。此処で不運が身近に逼ってきたとき、突然にわたしは目的を成就した。自分の舌(ジフヴァー)を咎めていると、盗人のジフヴァーが自分の前に平伏した。罪は隠しても、まこと恐怖から暴露するものだ。」

などと思いめぐらしながら、彼はその夜を楽しく過しました。

その翌日、ハリ・シャルマンは偽りの学問を巧みに誇示して、王を庭園に連れてゆき、埋めて

ある財宝を掘り出させ、盗人がその一部を持って逃げた、と言いました。そこで、満悦した王は彼に村落を与えようとしました。すると

「聖典なしに、人間の到達しえられないこのような聖智を、どうしてこの男が持つことができましょうか。ですから、この男は盗人と共謀して、悪事で生活しているに相違ありません。従って、別の手段でもう一度ためしてみるのがよろしゅうございます。」

と、大臣の一人が王に耳うちしました。そこで、王は蓋のある新しい水差の中に蛙を入れて、みずからそれをハリ・シャルマンに渡して言いました。

「婆羅門よ、この水差の中に入れてあるものがあなたに判るならば、わたしはあなたにこの上ない尊敬を捧げましょう。」

と、王が言うのを聴きまして、ハリ・シャルマンは遂に自分の破滅の時が来たと思いました。すると、その途端に、幼いときに父が戯れに彼につけた「蛙」という綽名を思い出しました。婆羅門ハリ・シャルマンは神に促がされて、その語を用いて自分を嘲り、突然にこのように言いました。

「蛙よ、この水差は今日突然に、無力で善良なお前が無理に殺される道具になった。」

と、ハリ・シャルマンが言う言葉を聴きまして、彼に示されたものを言いあてましたので、人々は、

「ああ、何という偉大な聖賢であろう。この方は水差の中の蛙のことさえも知っている。」

とささやいて、彼を賞讃しました。王はハリ・シャルマンの卜占に関する知識を尊重し、満足して、彼に黄金、傘蓋、車駕とともに村落を授けました。そして、ハリ・シャルマンは忽ちに藩侯のようになりました。

「このように、浄業の人々は運命によって善き目的を成就するものであります。ですから、王女テージャスヴァティー姫は運命によって似合わしからぬ人を斥けて、お似合いのソーマダッタ王子と逢曳されたのです。」

と、大臣の口から聴きまして、ヴィクラマセーナ王はラクシュミー（美と幸運の女神）のごとき王女を、ソーマダッタ王子に嫁がせました。こうして、ソーマダッタは義父の軍を率いて敵軍を征服し、自分の王国を回復して、妻のテージャスヴァティーとともに幸福に暮しました。

「このすべて、運命の特別な恩恵によるものであります。この世に於いてあなたにお似合のヴァツァ王とこのように美しいあなたと結ばせることを、運命でなくして誰にできましょう。カリンガセーナーよ、このことに関して、わたしに何ができましょう。」

と、ソーマ・プラバーから秘かに聴きました王女カリンガセーナーは、ヴァツァ王との結婚を熱望するようになり、それを熱望するあまりに肉親に対する危惧や羞らいの心がゆるむに至りました。そして、三界の唯一の燈火である太陽が沈みはじめると、アスラ・マヤの娘ソーマ・プラバーは彼女の申出に心を決めた友カリンガセーナーに、翌日の再会までの別れを惜しんで、天空を飛んで自分の館に帰ってゆきました。

五

こうして、その翌朝、ソーマ・プラバーがカリンガセーナーに近づきますと、カリンガセーナーは彼女を信頼して打明けた話をしました。

「父は必ずわたしをプラセーナジット王に嫁がせましょう。わたしはこのことを母から聴きました。しかも、この王が老齢であることを、あなたは見られました。しかし、ヴァツァ王はあなたがあのようにお話しになりましたので、わたしの耳を通ってわたしの心に這入りこみ、わたしの心を奪ってしまいました。ですから、まずプラセーナジット王をわたしに見せてください。それから、ヴァツァ王のいるところへ連れて行ってください。」

と、カリンガセーナーが言いますと、ソーマ・プラバーはこの心せく王女に

「どうしても行かなければならないのでしたら、空を飛ぶ車に乗って行きましょう。しかし、あなたは侍女たちをみな連れて行かねばなりません。あなたは再び此処に帰ることはできないでしょう。あなたは再び両親を見ることもなく、また思い出すこともないでしょう。愛する人を得たあなたは、遠くにいるわたしをさえ忘れてしまうでしょう。わたしはあ

なたの夫の宮殿には近づきませんから。」

と語りました。この言葉を聴きますと、王女は泣きながら言いました。

「では、ヴァツァ王を此処に連れてきてください。あなたがいなければ、わたしは其処に一瞬も留まっていることはできません。ウシャーは侍女のチトラレーカーにアニルッダを連れてきて貰ったではありませんか。あなたはこの話をご存じでしょうが、わたしからこの物語を聴いてください。

〔ウシャーとアニルッダの物語〕

アスラのバーナにウシャーという有名な娘がありました。彼女は夫をえるためにガウリー女神(シヴァ神の妃パールヴァティーの異名)を祀り、恩寵を授けられました。女神が

「夢の中でそなたと交わる人がそなたの夫となるであろう。」

と仰せられましたが、彼女は夢の中で天上の貴公子に似た一人の男を見ました。彼女はガーンダルヴァ式の結婚でその男と夫婦の契を結んで、夜明けに眼が覚めました。夢の中で見た夫を、彼女は現実に見ることはできませんでしたが、夫婦の契を結んだしるしを見まして、ガウリー女神の恩寵を思い出し、不安に駆られるとともに怖ろしくなり、また驚きました。彼女は夢の中で見た愛人がいないので悄ぎこんでいますと、その訳を侍女のチトラレーカーが訊ねますと、彼女はすべてを打明けました。チトラレーカーは神通力をえていましたので、恋人の名もその他の特徴も判らないウシャーに、このように申しました。

「ウシャーさま、これが女神の恩寵の結果です。この点について、これ以上に言うことはありません。しかし、何の手がかりもないあなたの愛人をどうして探し出せますか。見て判るのでしたら、神、アスラ、人間の世界を描きますから、その中でその人を教えてください。そうして頂けましたら、その人を連れてきましょう。」

と、チトラレーカーから言われますと、ウシャーは同意しました。チトラレーカーが色鉛筆で全世界を順次に描きます。すると、ウシャーが

「この人です。」

と、嬉しそうに震える指で、ドヴァーラヴァティー*城に住むヤーダヴァ族のアニルッダ*を指しました。すると、チトラレーカーが

「あなたは世にも尊きハリ(ヴィシュヌ神)の孫*であるアニルッダを夫にし幸福な人です。しかし、この人は此其から六万由旬離れたところに住んでいます。」

と言いました。この言葉を聴きましたウシャーは、つのる思慕の情に駆られてチトラレーカーに言いました。

「白檀のように冷たいあの方の胸の中に、今日抱かれることができないならば、激しい恋の焔に焼かれて、わたしは死んだも同じです。」

という言葉を聴きまして、チトラレーカーは愛する友を慰めて、すぐに空中に飛び上ってドヴァーラヴァティー城に赴きました。彼女は大海の真中に大廈高楼の櫛比したドヴァーラヴァティー城を見ましたが、そのさまはマンダラ山*の頂が再び海中に投げこまれたかのように見えました。都城に到着して、睡っていましたアニルッダを起し、夢の中で見たためにウシャーがアニルッダに恋したことを語りました。そして、ウシャーが夢の中でしたことをその通りに物語りましたので、ウシャーに会いたいと焦るアニルッダを連れ、神通力の威力で忽ちにドヴァーラヴァティーから帰りました。そして、空中を飛んで、愛人を待ち焦れている友ウシャーの部屋に秘かに這入らせました。ウシャーはアニルッダが現実に月に似た姿を現わしたのを見まして、海の波のように騒ぐ心は彼女の四肢の中に留まっていることができませんでした。こうして、彼女はチトラレーカーが連れてきました愛人と幸福に月日を過しましたが、愛人アニルッダはまこと生命の権化さながらでありました。ウシャーの父バーナはそれを知って怒りましたが、アニルッダは自分の勇気と祖父(ヴィシュヌ神)の威力によって、バーナを負かしました。ウシャーとアニルッダの両人はドヴァーラヴァティー城に帰り、山の娘(パールヴァティー)とシヴァ神のように、片時も離れられぬ身の上となりました。

「このように、あるとき、ウシャーはチトラレーカーの力で愛人と結ばれました。あなたはチトラレーカーより偉大な力を持っていられると思います。ですから、ヴァツァ王を此処に連れてきてください。早くしてください。」

と、カリンガセーナーの言うのを聴きまして、ソーマ・プラバーが言いました。

「天女チトラレーカーは他人を連れてくることもできます。しかし、夫以外の他人に触れることのできないわたしのごときに、何ができましょう。ですから、ヴァツァ王のいるところへ、あなたを連れて行ってあげましょう。そのまえに、あなたに求婚しているプラセーナ・ジットをお見せしましょう。」

と、ソーマ・プラバーが言いますと、カリンガセーナーは承諾して、ソーマ・プラバーの用意した魔法の車に一緒に乗りました。彼女は財宝をもち、侍女を連れて車に乗り、両親に知られずに空中に出発しました。御車に拍車をかけられた馬が鋭い刀の刃を顧みないのと同様に、恋に駆られた婦人は前途にある山も谷も見ないからです。

まずシュラーヴァスティーに到着して、老齢で白くなったプラセーナ・ジット王が猟に出ているのを遠くから見ました。王の周囲には数多くのチャーマラ(王位の幟標としての払子)があって王の所在がはっきりと知られましたが、それはたびたび波立って、

「この老人から去れ。」

と、遠くから彼女をこばんでいるかのようでありました。ソーマ・プラバーは笑いながら、

「御覧なさい。御両親があなたを嫁がせようとなさったプラセーナ・ジット王はこの人ですよ。」

と、指さしました。カリンガセーナーは
「この王は老齢に求婚されたのです。どんな女がこの人を夫に選ぶでしょうか。あなた、わたしを早く此処からヴァツァ王のところに連れて行ってください。」
と、ソーマ・プラバーに語り、直ちに一緒に空中を飛んでカウシャームビーの都に赴きました。雌のチャコーラ鳥*が甘露の光線を輝かせる月を眺めるように、カリンガセーナーは心をはやらせて、友から促がされて遊園にいるヴァツァ王を見ました。彼女は眼を瞠り、手を胸にあてて、
「あの方はここからわたしの中に這入ってしまった。」
と言っているかのようでありました。
「ねえ、今日、ここでヴァツァ王に会わせてください。あの方を見て、わたしは一瞬も待っていることができなくなりました。」
と、カリンガセーナーが言いますと、ソーマ・プラバーが言いました。
「わたしは今日、ある不吉な前兆を見ました。ですから、今日は静かに人知れずこの遊園にいなさい。遠くへ行ったり来たりしてはいけません。明朝、わたしが来まして、策略を用いて会わせましょう。わたしの心を家とする方よ、わたしはいま夫の家に帰りたいのです。」
と、ソーマ・プラバーは言って、カリンガセーナーを其処にのこして去りました。ヴァツァ王も、その遊園から自分の宮殿に帰ってゆきました。
すると、其処にのこされたカリンガセーナーは、前兆に通暁した友から予め禁ぜられていたに

もかかわらず、侍臣をヴァツァ王の許に遣わして、自分の口上を申述べさせました。恋が新らしく若い女の心を征服したときには、制御しえられないのです。侍臣は直ちに赴いて、ヴァツァ王の侍従を通じて来意を告げ、宮殿に這入ってヴァツァ王にこのように言上しました。
「陛下、タクシャシラーの統治者たるカリンガダッタ王の息女カリンガセーナーといわれる姫は、陛下が殊のほか眉目秀麗であらせられると聞き、此処にて陛下をおんみずから夫に選ばんがため、肉親を捨て、従者を連れて、空中を飛ぶ魔法の車に乗って、この地に到着されました。王女を此処にお連れいたしましたのは、王女の親友にて人眼に触れず旅行をなしうるソーマ・プラバーでありまして、アスラのマヤの娘、ナラクーバラの妻であります。陛下にこの旨を言上いたしますために、わたくしは派遣されました。なにとぞ、王女さまをお迎えになってくださいませ。お二人はまこと月光と月輪のように結ばれんことを。」
と、カリーガセーナーの侍臣から聴きまして、ヴァツァ王は
「よろしい。」
と答え大いに喜んで、侍臣に黄金や衣服などを贈ってもてなしました。そして、首相ヤウガンダラーヤナを召して、
「カリンガダッタ王の娘でカリンガセーナーという、この世に容色の誉高い王女が、みずから余を夫に選んで、此処に来た。かの王女を拒むべきではないゆえ、何時彼女と結婚すべきか、早く申せ。」

と言いました。このようにヴァツァ王から言われました宰相ヤウガンダラーヤナは、王の将来を慮って、すぐさまこのように考えました。

「カリンガセーナーは何と言っても三界にきこえた容色の女(ひと)である。彼女ほど美しい女は他にない。神さえも、彼女に恋い焦れている。ヴァツァ王がこの王女と結婚すれば、王は他の一切を捨てて顧みないであろう。そのときは、ヴァーサヴァダッタ妃は生命をなくすであろうし、またナラヴァーハナダッタ王子を死ぬであろう。また、パドマーヴァティー妃も、王子に対する愛情から、生き永らえることは困難であろう。そうなれば、この二人の妃の父のアヴァンティ国王チャンダ・マハーセーナ王もマガダ国王プラディョータ王も、生命を失うかも知れず、あるいはまたわれわれに敵対するかも知れない。このように、一切の破滅が起る惧れがある。しかし、この結婚をとめることは不適当だ。とめたがために、王の情熱はいやますかも知れぬ。従って、なんとか都合のよい成行を見るまで、結婚を延期するようにしよう。」

と、ヤウガンダラーヤナは考えて、ヴァツァ王に語りました。

「陛下、カリンガセーナー姫がみずから陛下の家に嫁いでこられまして、姫の父王が陛下の藩侯になられますとは、陛下はまことに幸運であらせられます。ですから、天文博士に諮問されまして、黄道吉日を選んで、掟に従って挙式されるべきであります。何と申しましても、姫は偉大な王者の王女であります。今夜はともかく姫を適当な宮殿に御案内し、侍衛の者をお遣わしになって、それから衣服や装飾品をお贈りなさるのがよろしゅうございます。」

と、首相から言われましたヴァツァ王は大いに喜んで同意し、特別の配慮を払って、このすべてを取計いました。こうして、カリンガセーナーは宮殿に這入り、自分の望みが適えられたと思って、上機嫌でした。

さて、思慮深いヤウガンダラーヤナは直ちに王宮を退出して、自分の邸に帰って考えました。

「延期ということは不吉な所行を避けるのに役立つものである。例えば、嘗てインドラ神が婆羅門を殺して逃亡したとき、ナフシャ*が神の王国を簒奪し、シャチー(インドラの妃)に懸想した。シャチーは神々の教師(ブリハスパティ神)の許に逃げて、保護を受けた。この神は

『シャチーは今日お前のところへ行く。いや、明日だ。』

と言って、激しい言葉で婆羅門に呪詛されてナフシャが滅ぼされるまで、時を稼いだ。そして、インドラは再び以前のごとく神の王国に君臨した。このように、カリンガセーナーのために、わたしは王に時間を過させなければならない。」

と熟慮して、大臣は秘かに天文博士の全員と相談して、結婚式の日どりを遙かに離れた日附に定めることにしました。すると、ヴァーサヴァダッター妃がその一部始終を知り、大宰相を自分の宮殿に召喚しました。ヤウガンダラーヤナが宮殿に這入って王妃の前に平伏しますと、王妃は泣きながら言いました。

「大臣よ、嘗てあなたは

『王妃さま、わたしがいますかぎり、パドマーヴァティーのほかには、王は対等の地位の妃を

もつことはないでしょう。』

と言われました。カリンガセーナーがいまヴァツァ王と結婚しようとしているのを御覧なさい。彼女は美しい方です。また、王は彼女に心を惹かれていられます。とすれば、あなたは嘘つきです。わたしはもはや死んだも同然です。」

と、王妃が語るのを聴きまして、大臣ヤウガンダラーヤナが言いました。

「御安心ください。王妃さま、わたしが生きていますかぎり、そのようなことがどうして起りえましょうか。しかし、王妃さまはこの点について王さまに反対されてはなりませぬ。むしろ我慢なされて、王の意を迎えられて愛情をおつくしになってくださいませ。病人は意に逆っては、如何に言葉をつくしても、医者の言いなりにはなりません。しかし、意を迎えて医者がなだめすかせば、言いなりになるものです。人は流れに逆って引張られても、川を渡ることはできませんが、流れに従って連れてゆかれるときには、たやすく川を渡ることができましょう。ですから、あなたのお傍に王さまが来られましたときには、御自身の顔色をかくされて、いつもと変らぬ心づくしをおつくしなされませ。

『カリンガセーナー姫と結婚なされば、姫の父王が味方となって、王国は繁栄します。』

と言われまして、暫く王さまが姫と結婚するということを御承諾なさいませ。このようになされましたならば、王さまはお妃さまの度量の大きいことをお知りになり、お妃さまに対する王さまの愛情はいや増して、慇懃をつくされましょう。そして、王さまはカリンガセーナー姫が掌中にあると考えられて、お焦りにならないでしょう。人間の渇望は妨げられますと、かえって欲望はつのるものであります。パドマーヴァティー妃にも、このことを教えてあげてくださいませ。このようにすれば、王さまはわたくしどもの延期にいなやは申されませぬ。こうして、なにとぞわたくしの策略の威力を御覧ください。まこと、賢者は難事に際して判り、勇者は戦闘に於いて知られるのであります。ですから、お妃さま、決してこれ以上失望なさらないでくださいませ。」

と、ヤウガンダラーヤナが王妃を励ましますと、王妃が彼の言葉に敬意を表しましたので、彼は其処から退出しました。

ヴァツァ王は、その日は夜も昼も、二人の妃の部屋には行きませんでした。彼の心はカリンガセーナーがこのようにみずからの意志で、彼を夫に選んだことが嬉しく、彼女との新らしい似合いの結婚のことに夢中になっていました。そして、王妃とヴァツァ王とその首相とカリンガセーナーとは、それぞれに自分の館で、得がたい喜びに胸を躍らせたり、大きな心配に心をおののかせて、あたかも大饗宴の夜のように、寝ないでその夜を過しました。

六

こうして、その翌朝、術策にたけた大臣ヤウガンダラーヤナは彼を待ちもうけているヴァツァ王の前に伺候して

「陛下とカリンガセーナー姫との御結婚に適した黄道吉日を、何故に直ちに諮問されないのでございますか。」

と上奏しました。この言葉を聴きますと、王が言いました。

「余もそのように考えている。姫なしでは余の心は一瞬も安んぜないのだ。」

と、人のよい王は語って、王座の前に侍る侍従に命じて、天文博士たちを召させました。大臣とあらかじめ諜し合せていました天文博士たちは、王から諮問されますと、

「六ヵ月後に黄道吉日が参ります。」

と語りました。この言葉を聴きますと、ヤウガンダラーヤナは巧みに怒りを装うて、言いました。

「この何も知らぬ輩は駄目です。嘗て陛下が聖賢だと仰せられて崇められた博士がいます。あの博士は今日参っておりませぬゆえ、あの博士におたずねになりまして、適当な手段を御決定なさいませ。」

と、大臣の言うのを聴きまして、ヴァツァ王は不安な心で、その博士を召させた。この博士も延期の約束をしていましたので、黄道吉日を諮問されますと、熟考したのち六ヵ月後と定めました。そこで、ヤウガンダラーヤナは失望を装うて、ヴァツァ王に

「陛下、いかが取計いましょうや、御指図のほどを。」

と言いました。黄道吉日を待ち焦れていました王は情なく思いましたが、思いなおして

「カリンガセーナー姫にたずねよ。姫が何というか、聴いてみよ。」

と言いました。ヤウガンダラーヤナは

「御意。」

と答えて、二人の天文博士を連れてカリンガセーナーの許に赴きました。カリンガセーナーは鄭重に彼を迎えました。カリンガセーナーの美貌を見て、ヤウガンダラーヤナは

「この姫をえたならば、王は溺れて王土のすべてを捨てるであろう。」

と考えました。そして、姫に

「あなたさまの御結婚の黄道吉日を決定いたしたく存じまして、天文博士二名を連れて参上いたしました。如何なる星宿の下にお生れになりましたか、なにとぞお告げたまわりたく存じます。」

と語りました。この言葉を聴きまして、カリンガセーナーが生れた星宿を扈従の者が告げましたので、二人の天文博士は大臣との約束に従って、占うふりをして

「黄道吉日はやはり六ヵ月の後にありまして、それ以前にはありません。」

と言って、黄道吉日を再び六ヵ月の後に決定しました。黄道吉日が非常に遠いことを聴いて、カリンガセーナーは落胆しました。すると、彼女の扈従の者が

「御夫婦が生涯幸福であらせられますためには、まず黄道吉日をこそ選ぶべきであります。その日が遠いとか近いとかは問題ではありません。」

と語りました。扈従の者のこの言葉を聴きまして、ヤウガンダラーヤナたち一同は

「まことにその通りであります。」
と言いました。また、ヤウガンダラーヤナは
「もし黄道吉日が選ばれないときには、わたくしどもの御姻戚となられますカリンガダッタ王は悲しまれるでありましょう。」
と語りました。カリンガセーナーは気力も失せて、
「あなたがたの決定された通りにいたしましょう。」
と言ったまま、黙ってしまいました。彼女の言葉を聴きまして、ヤウガンダラーヤナは別れの挨拶をし、天文博士を連れて、ヴァツァ王の前に伺候して、その旨を奏上しました。こうして、ヤウガンダラーヤナは策略によって王に思いとどまらせて、自分の館に帰りました。
王の結婚の時機を延ばすのに成功しましたヤウガンダラーヤナは、残りの仕事を完遂するために、ヨーゲーシュヴァラという親友のブラフマ・ラークシャサ*を憶い出した。このラークシャサは以前の約束に従って、ヤウガンダラーヤナが心の中に思っただけで姿を現わし、大臣に敬礼をして
「如何なる御用で、わたしを憶い出されましたのですか。」
と言いました。そこで、大臣は王の情熱をそそったカリンガセーナーの事件をのこらず語ったのち、更に言葉を続けて
「友よ、わたしは時を稼いだ。その間、君は姿をかくしてカリンガセーナーの所行を看視して貰いたい。あの姫に比肩するような美女はこの三界にいないのであるから、ヴィディヤーダラなどは必ずやひそかにかの姫に懸想しているに相違ない。だから、もし姫がシッダ（シヴァ神の扈従）かヴィディヤーダラと逢曳し、君がそれを見つけたならば、万事好都合なのだ。天上の情夫は変装していても、睡っているときには正体が突きとめられる。と言うのは、天上の人々は睡眠のときには本来の姿になるものだからである。このように、君の眼力によって、かの姫の悪事がわれわれに見つけられるならば、王は彼女に惚れこまなくなるであろうし、われわれは目的を成就しうるであろう。」
と語りました。このように大臣から言い含められましたブラフマ・ラークシャサは
「策略を用いて、わたしが彼女に暴行を加えるか、あるいは彼女を殺してはいけないのですか。」
と言いました。この言葉を聴きますと、大臣ヤウガンダラーヤナは語りました。
「それは非常に不法なことであるから、してはいけない。正法に逆らうことなく自己の途を行く者が、所期の目的を達成しようとするときには、神は援助を垂れたまう。されば、友よ、君の友情によって、われわれが王事を完遂しうるように、君は彼女がみずから招く罪障をみつけて貰いたいのだ。」
と、勝れた大臣から命ぜられましたブラフマ・ラークシャサは、神通力によって自分の姿を隠して、カリンガセーナーの館に忍びこみました。

さて、話かわって、カリンガセーナーの友ソーマ・プラバーは再び彼女の前に現われました。マヤの娘は王女に夜の間に起ったことを訊ねた後、かのラークシャサが聴いているのも知らないで、王女に語りました。

「今日、午前中に、わたしはあなたを探して此処に来ました。ヤウガンダラーヤナの姿を見ましたので、姿を隠してあなたの傍にいました。そして、あなたがたのお話を聴き、わたしにはすべての事情が判りました。わたしがとめたにも拘わらず、あなたは昨日何故にこのようなことをされたのですか。不吉の前兆を除かないで、なにか事を行うとき、それは望ましくない結果に終るものです。こういう物語を聴いてください。」

〔ヴィシュヌダッタと七人の愚かな仲間の物語〕

むかし、アンタル・ヴェーディー*にヴァスダッタという婆羅門がいました。彼にヴィシュヌダッタという息子が生れました。このヴィシュヌダッタが十六歳になりましたとき、学問を習得するために、ヴァラビーの都に行こうとしました。すると、婆羅門の子供七人が彼の仲間に加わりました。彼は名門の生れであり賢明でしたが、これらの七人は愚か者でした。彼等はお互いに見捨てないという誓を交したのち、ヴィシュヌダッタは夜間に両親に知られずに出発しました。彼等が出発すると、間もなく、前途に不吉の兆が突然に現われたのを見まして、ヴィシュヌダッタは同行の友人たちに言いました。

「ああ、不吉の兆が現われた。今日は引返すのがよい。成功するためには、瑞兆が現われたときに、再び出発しよう。」

と言うのを聴きまして、七人の愚かな仲間は言いました。

「馬鹿な恐怖は考えないことにしよう。われわれは前兆を怖れたりはしないのだ。君は前兆を怖れるのなら、行くな。われわれは今日即刻出発するのだ。明日、親族の者たちがわれわれの企てを知ったならば、離さないだろう。」

と、これらの無智な輩が言いますので、互いに見捨てないという誓約に縛られて、ヴィシュヌダッタは罪障の消滅者ハリ（ヴィシュヌ神）を念じながら、同行しました。その夜明けに、彼は再び別の不吉な前兆を見て、彼等に語りましたが、愚かな仲間の者たちは彼を嘲りました。

「旅行を怖れる臆病者め、一歩ごとに烏におびえる君を連れてきたことこそ、われわれの不運というものだ。他にこれほど縁起の悪いことがあろうか。」

などと、彼等が彼の言葉を嘲りましたので、ヴィシュヌダッタは仕方なく彼等と旅を続けましたが、黙ってしまいました。

「勝手気儘な行動をする馬鹿者に、忠告をすべきではない。あたかも糞便に化粧するのと同様に、侮蔑を受けるにすぎない。多くの馬鹿者の中に墜ちた賢者は、波の上に落ちた蓮華の花のように、一人では流される。だから、わたしは今後、善い忠告にせよ、悪い忠告にせよ、言わない

ことにして、黙ったままで旅行することにしよう。運命が幸福をもたらすであろう。」

などと、ヴィシュヌダッタは考えながら馬鹿者たちと旅をつづけ、その日の暮方に、シャバラ族の村落に到着しました。夜になって、村の中を歩きまわり、若い女が住む家に辿りつき、その女に宿を頼みました。彼女が一部屋を提供してくれましたので、ヴィシュヌダッタは連れの者たちと一緒に其処に這入りました。すると、七人の仲間は直ぐに睡ってしまいましたが、非人の家に泊ったので、彼のみは寝ずにいました。無智な輩は大胆に睡るのですが、道理を知る人はどうして睡ることができましょう。暫くすると、一人の若者が秘かに家の中に這入ってきて、女の傍に忍びこみました。女はその男と長い間睦言を交して戯れ、愛慾に疲れた二人ははからずも睡りこんでしまいました。ヴィシュヌダッタは燈火の洩れる戸の隙間から一部始終を見て、あきれはてて、このように考えました。

「ああ、何の因果で淫奔な女の家に来たのだろうか。確かにこの男は女の情夫で、あの女が処女で嫁いだ夫ではない。さもなければ、あのようにおそるおそる事を運ぶわけはない。あの女が浮気な心の持主であることは、最初から判っていた。しかし、われわれは他に宿が得られないので、お互いの相談でここに来たのだが……。」

と、このように考えていますと、家の外で人声がきこえてきました。すると、シャバラ族の若い酋長が剣を携えて、ヴィシュヌダッタたちの泊っている部屋に這入ってきて、七人の仲間が睡りこんでいるのを見廻しながら

「お前たちは何者だ。」

と、ヴィシュヌダッタに訊ねましたので、彼はこの男がその家の主人であると思い、

「わたしどもは旅人です。」

と、酋長に答えました。すると、このシャバラは奥の部屋に這入っていって、彼の妻が情夫と寝ているのを見て、睡っている情夫の頭を刀で斬りおとしました。しかし、妻を虐げもしなければ、起しもしないで、刀を床（ゆか）の上に置いて、そのまま寝床にねてしまいました。燈火の光でこの有様を見て、ヴィシュヌダッタは

「妻を殺さないで、情夫を殺したことは正しい。しかし、このような所行をしながら、その場に安心して睡るとは、素晴らしい勇気のあるわざだ。勝れて強い心の持主だ。」

と考えました。ヴィシュヌダッタがこのように考えていますと、この悪妻が眼を覚まし、情夫が殺されて、夫が睡っているのを見ました。彼女は起き上って、情夫の屍を肩に載せ、一方の手でその頭を抱えて、出てゆきました。彼女は急いで外に出ると、屍体と頭と一緒に積み上げた灰の中に投げこんで、こっそり帰ってきました。ヴィシュヌダッタも出て行って、遠くからそれを見て、寝ている仲間の間に這入って、もとの通りにしていました。すると、この兇悪な女は帰ってきて奥に這入ると、睡っている夫の頭を刀で斬りおとしました。そして、出て行って、召使たちに聞えるように

「ああ、酷い目に会ったんだよ。旦那さまが旅人たちに殺された。」

と、大声をあげて怒鳴りました。すると、召使の者たちがその声を聞いて走りあつまってきて、主人が殺されているのを見て、兇器を振りあげてヴィシュヌダッタたちに襲いかかりました。仲間の者たちが驚いて飛び起きましたが、殺されそうになりましたので、ヴィシュヌダッタが急いで言いました。

「あなたがたは婆羅門殺しの罪を犯さないでください。これはわれわれのしたことではない。これは他の男に惚れたこの悪性の女のしたことですぞ。わたしは半分開いた戸の隙間から一部始終を見ていたのだし、外に出てこの女のしたことも見たのだ。暫く待ってくれるなら、それを話そう。」

と、ヴィシュヌダッタはシャバラ族の人々を制止し、彼等に一部始終をのこらず話しました。そして、彼等を案内して、塵芥の捨場に女が投げ捨てた情夫の殺して間もない屍体と頭とを見せました。すると、女も顔を青ざめて白状しましたので、其処にいたすべての人々は女を非難して

「他の男に惚れこんで恋の虜となった悪い女は、敵の手にある刃のように、敵味方の区別なく酷いことをするし、誰でも殺しかねません。」

と言って、ヴィシュヌダッタたちすべての者を放免しました。七人の仲間はヴィシュヌダッタを賞讃して

「われわれが夜寝ていた間に、君はわれわれの守護の宝燈となってくれた。君のお陰で、われわれは不吉な前兆の結果として生じた死の糊口から逃れることができたのだ。」

と言い、悪口を言うことをやめて、ヴィシュヌダッタに頭を下げました。そして、翌朝、彼等はヴィシュヌダッタとともに、自分たちの目的地に向けて出発しました。

このように、ソーマ・プラバーがカリンガセーナーに秘かに物語を語ったのみか、更に言葉を続けて言いました。

「このように、あることに従事する人々に現われる不吉の前兆は、延期あるいはその他の方法で阻止されないかぎり、友よ、不幸をもたらすのです。こうして、遅鈍な人々は賢者の言葉を軽蔑し、軽挙妄動して結局苦しむのです。従って、前兆が不吉であるにも拘わらず、昨日あなたが御自分を迎えて貰うために、使者をヴァツァ王の許に派遣されたのは、賢明な所行ではありませんでした。ですから、運命の女神はあなたの結婚を障礙なく定めるでしょうが、あなたは不吉な星のときに家を出てきましたので、そのために結婚式はずっと遅れるのです。それに、神々でさえあなたに恋い焦れています故、あなたはこの点に注意すべきです。また、政略の手練手管に長けた大臣ヤウガンダラーヤナのことを考えなければなりません。王が愛慾に溺れることを慮って、彼はなんらかの妨害をするかも知れませんし、また結婚式が挙行された後にでも、故障を生ぜしめるかも知れません。彼は行の正しい人ですから、友よ、あなたを非難したりはしないでしょう。また、他の妃たちには、どんな事があっても、十分に注意して下さい。この点について、物語をいたしましょう。お聴きください。」

〔カダリーガルバーの物語〕

この世にイクシュマティーという都城があります。その近くに、同名の河がありますが、いずれもヴィシュヴァーミトラ仙が創造しました。その近郊に大森林があり、其処にマンカナカという聖仙が庵を営んで、足を上にあげて苦行を行じていました。そのとき、メーナカーという天女が衣を風になびかせて、天空を飛来するのを見ました。すると、好機を摑んだカーマ（愛の神）のために、彼の心は乱され、青々としたカダリーガルバ樹に、聖仙の精液が滴りました。すると、忽ちに、容姿が殊のほかに麗わしい娘が生れました。偉大な聖仙の精液は無駄なく瞬間に実るからです。彼の娘はカダリーガルバ樹*に生れましたので、カダリーガルバーという名をつけました。あたかも嘗てガウタマ仙が天女ランバーを見て射出した精液から生れたドゥローナの妻クリピー*のように、カダリーガルバーは父の庵で成長しました。

あるとき、マドヤ・デーシャ*生れのドリダ・ヴァルマン王が狩猟に夢中になって、馬の走るにまかせて遠くに駆けて、この庵に這入りました。彼は樹皮をまとうたカダリーガルバーを見ましたが、彼女の美しさは聖仙の娘にふさわしい衣服によって、一段と美しさを増していました。王は彼女を見て、彼の心は彼女に占められて、後宮の姫妾たちの入りこむ余地はなくなりました。王が

「ドゥシャンタ王がカンヴァ仙の娘シャクンタラーを妻とした*ように、この聖仙の娘を妻に迎えたいものだ。」

と考えていますと、薪とクシャ草を携えたマンカナカ仙の来るのが見えました。王は馬をおり、仙の足下に平伏しました。そして、訊ねられますと、自分の身分を聖仙に告げました。すると、聖仙はカダリーガルバーに

「愛児よ、客人のこの王者のために、そなたはアルギヤ*を用意しなさい。」

と命じました。

「はい。」

と答えて、彼女は恭しく王をもてなしました。王が聖仙に

「あなたはこのように美しい娘御をいずれより得られましたか。」

と訊ねますと、聖仙は彼女の出生やカダリーガルバーという名の由来を、王に話しました。王は聖仙がメーナカーを思うて生れた娘は天女であると思い、熱心に彼女を聖仙に懇願しました。聖仙は娘カダリーガルバーを王に授けました。古昔の聖仙の行為は神聖な直観に基づいて、ためらうことがないからです。天女の群は神通力によってこのことを知り、メーナカーに対する愛情から集まってきて、カダリーガルバーに婚礼の仕度をさせました。そして、そのとき、彼女の手に芥子の実を与えて、

「あなたが後ほどそれとわかるように、これを途中に蒔きなさい。夫がいつかあなたを疎んじ

て、あなたが此処に帰ってきたいと思うときには、生えたこの草によって、あなたは道を知ることができるでしょう。」

と言いました。結婚式が終りますと、ドリダ・ヴァルマン王はカダリーガルバーを自分の馬に乗せて、其処を出発しました。王の扈従の軍勢も到着して、王は花嫁を連れて、自分の王城に帰りましたが、花嫁は途中に芥子の種を蒔きつづけました。王城に帰還した王は一部始終を大臣たちに語って、他の妃妾たちが嫉視するにも拘わらず、カダリーガルバーと暮しました。

すると、ドリダ・ヴァルマン王の皇后が深く悲しんで、自分が嘗て大臣のために尽してやったことを思い出させた後、大臣に語りました。

「王はいま新らしい妃にうつつを抜かして、わたしを見捨てられました。ですから、わたしにとっては仇敵のあの妃が逃げ帰るようにしてください。」

と言いますと、この言葉を聴いた大臣が申しました。

「お妃さま、わたくしのごとき者が君主の妃を殺したり、また別れさせたりすることは、よくありません。これは詐欺やその他の術策に長けて、しかもこのようなことをする男と一緒になっている乞食の女のすることです。と申しますのは、魔術に長けたこれらの女は、猫を被って、何処の家にでも出入し、阻止されることがないのですから、どんなことでも出来ないことはないのです。」

と、大臣が申しますと、皇后は羞じたかのように顔を赤らめて、

「有徳な人々が非難されるようなことは、もう何でもありません。」

と言いました。しかし、大臣の言葉を胸にしまって、大臣が退出しますと、侍女の口を通して、ある乞食女を召しました。皇后は自分の望みを初めからすべて物語り、そのことが成就すれば多くの財貨を与えると約束しました。この性悪な女行者は貪欲の心から

「お妃さま、そのようなことは、たやすいことでございます。あなたさまのために、きっとやりとげましょう。わたしは種々の術を非常に多く知っておりますから。」

と、女行者は皇后を慰めて退出しました。しかし、彼女は自分の家に帰りますと、恐れおののいたかのように、このように考えました。

「ああ、軽率にも皇后さまの前で約束したのはわたしの激しい貪欲のせいで、誰を嘲ってもいけないのだが、そのような智慧はわたしには全然ない。他の場処でと同じように、王宮で詐欺瞞着をすることはできぬ。お偉い方々はきっとそれを見破って、わたしを逮捕するだろう。だが、ただ一つ頼みの綱があるかも知れぬ。親友に床屋がいるが、あの男はこのような策略に長けている故、この仕事をなんとかうまくやるかも知れぬ。」

と思いつくやいなや、その床屋のところへいき、財宝を獲得できるようになる希望をすべて話しました。すると、老齢で奸智に長けた床屋は考えました。

「有難てえ、金儲けの仕事が今日は転げこんできたわ。王さの新らしい花嫁さまは、絶対に殺してはならぬ。お守りせねばならぬて。あのお方の父御は天眼を持ってござるで、何もかも暴か

れるというもの。ともかく、そのお妃さまを王さまから離しておいて、皇后さまをたんまりとしゃぶることにしようぜ、お偉い方というものは、御自分に都合の悪い秘密を握っているしもじもの者の言うことをよく聴くものだ。暫く経ってから、お妃さまを王さまに会わせてさ。王さまと聖仙の娘御とが俺さまを援けてくださるように、このことをお話し申しあげることにしよう。こうすれば、俺は何も悪いことをしたことにならないし、そのうえ暮しの費用を長いこと得られるというものだ。」

と考えて、この床屋は性悪な女行者に言いました。

「お婆よ、俺が万事うまくはからってやるよ。だが、魔法の力で王さまの新らしいお妃を殺してしまうのはよくないな。いずれ王さまはいつか知って、俺たちをみんな殺すだろうし、女殺しの罪を背負いこむことになるしな。それに、また、お妃の父御の聖仙さまが俺たちに呪いをかけられるだろうしな。だから、智慧を働らかせてさ、お妃さまも幸せに暮すし、俺たちも金儲けができるように、お妃さまを王さまから別れさすのが、最上の得策というものさ。こうするのは、俺にとっては、いともたやすいことさ。俺の智慧でできないことは、なにひとつないんだよ。俺さまのお智慧のほどを、まあお聴き。話してあげよう。

〔王と床屋の女房の物語〕

あのドリダ・ヴァルマン王の父御は御乱行のお方だったんだ。俺はこの王さまの召使での、俺に似つかわしい仕事をしていたという次第さ。この王さまが、ある日御散歩なさっていてさ、俺の女房を見られたという訳さ。俺の女房は当時別嬪で垢ぬけしていたからさ、王さまは途端に御執心という次第、早速お伴の方に訊ねられて

『床屋の女房にござります。』

と申しあげたところ

『床屋に何ができるか。』

との御諚で、この悪王さまは俺の家にお上りになっての、俺の女房を思いのままにお愉しみになって、お帰館という次第さ。俺は丁度その日は何処かへ出かけていてさ、家にいなかったんだ。次の日、俺が家に這入ると、女房の様子ががらりと変っているんだ。訳を問いつめると、女房の奴め、とくとくと逐一白状に及んだ次第さ。王は俺がとめることができないのをよいことにして、たびたびやってきては、女房をなぐさんで、女房の奴をおだててしもうた。王は不倫の行に酔いしれて、やってよいことと悪いことの区別も判らなくなった始末さ。森の火事が風に煽られると、森は藁のようなものさ。だから、それを遮る手だてがないのでな、俺は食いものを減らして、仮病を使ったのさ。それから、俺は大きな溜息をつきながら、青い顔して痩せてさ、王さまの前へ出たんだ。すると、王さまは俺が大儀そうなのを見てさ、意味ありげに御下問という次第、

『ほう、どうしてそんなになったのだ。話すがよかろう。』

だってさ。繰返してたずねられたので、俺は王さまに御宥恕をお願いして、ひそかにお答え申しあげたんだ。

『陛下、わたしの女房は魔女でございます。わたしが睡りますと、あいつはわたくしの臓腑を肛門から引きだして啜り、そして元通りに腹の中へおさめておくのでございます。そのため、わたくしは痩せてしまいました。滋養物をいつも食べましても、これではどうして肥えることができましょうか。』

と申上げるとさ、王さまは心配になって、お考えになったという訳さ。

『まこと、あの女は魔女かな。余はあの女に何故迷わされたのかな。余は食物でよく肥えているんだが、あの女は余の臓腑までも啜るのかな。とにかく、今夜、策略を用いて、あの女を自分でためしてみよう。』

と考えられてさ、直ぐにわたしに食物を食べさせてくださったんだ。そこで、俺は家に帰って、女房の前で涙を流したんだよ。女房が訳を訊ねたんで、俺は言ったよ。

『ねえ、お前、俺が言うことを誰にも喋るのじゃないぜ。まあ、お聴き。王さまの肛門にヴァジラ（武器の一種）の刃のような鋭い歯ができたんだ。今日、俺が仕事をしていたときに、俺の剃刀は噛み砕かれてしまった。こうして、俺の剃刀はいつもいつも噛み砕かれてしまうだろう。俺はどうしたらいつも新らしい剃刀を手に入れることができよう。だから、俺は泣いているんだ。俺の家の暮しの道が絶たれたのだからだよ。』

と、俺が女房に言うとさ、女房の奴、夜になって王さまが寝た隙に肛門に生えた奇蹟の歯を検べようと決心したんだ。この世が始まって以来、そんなものがある筈はないんだが、女房の奴はそれが嘘とは気付かなかったんだ。賢い女でも、悪智慧のある男の言葉には瞞されるものさ。さて、その夜のことだ、王さまがやってこられて、思う存分に女房をお愉しみになったんだが、俺の言うたことを思い出して、いかにも疲れはてたというように睡ったふりをしていなさった。すると、女房の奴は王さまが睡ったと思ってさ、歯を探ろうと思って手をそうっと王さまの肛門に伸ばしたという訳さ。女房の手が肛門にとどいた途端に、王さまは飛び起きて、

『魔女だ、魔女だ。』

と叫んだかと思うと、顫えあがって出ていったんだよ。それからというものは、王さまが怖れて相手にしなくなったものだから、女房の奴は俺で満足してさ、俺にぞっこんという次第なんだ。こんな風に、俺はむかし智慧を働らかせて、女房を取り戻したんだよ。」

と、床屋は女行者に語ったのち、言葉をつづけて申しました。

「だから、お婆よ、お前さんの望みは智慧を働らかせたらうまくゆくよ。どうしたらよいか、話してやるよ。お聴きよ。誰でもよいから後宮の老僕をうまくたらしこんで、王さまに秘かに

『お妃のカダリーガルバーさまは魔女でございます。』

と言わせるんだ。お妃は森のお生れだから、腹心の召使を持っていない。だから、どの召使だっ

て、金で釣りさえすれば、たやすくこちらの言うことをきかせることができるよ。それから、王さまが老僕の言葉に耳を傾けて疑いだしたら、なんとかして人間の手や足などをカダリーガルバーの部屋に入れるんだ。夜が明けて、王さまがそれを御覧になった途端に、老人の言ったことは本当だと思われるよ。王さまはカダリーガルバーを怖がって、自分から捨てるよ。こうなれば、皇后さまは仇敵の妃がいなくなるから、幸福になられるだろうし、お前さんを有難がって、俺たちにたんまり御褒美もあろうというものさ。」

と、床屋が言いますと、女行者は同意して、皇后のところに出かけ、その通り申上げました。皇后は策略を用いて、その通りにしました。王は眼のあたりに切られた手足を見まして、カダリーガルバーを魔女だと信じ、この妃を見捨てました。そこで、満足された皇后は秘かに褒美を授けましたので、女行者と床屋とは望み通りの褒美を貰って喜びました。

さて、ドリダ・ヴァルマン王に捨てられましたカダリーガルバーは、王が呪詛されることに心を傷めながら、王宮を出てゆきました。彼女は以前に来た道を辿って父の庵に帰りましたが、嘗て蒔いた芥子の実が生い繁って、その道を知ることができました。父のマンカナカ仙はカダリーガルバーが突然に帰ってきたのを見まして、娘になにか過失があったのではないかと咄嗟に考えましたが、誓願の力によって一切の事情を知り、カダリーガルバーを慰めたのち、彼女を連れて、みずから王宮に出かけました。そして、平伏して迎えた王に、聖仙は皇后が他の妃に対する嫉妬のあまりに企んだ偽の芝居のことを物語りました。すると、そのとき、かの床屋がやって来まし

て、王にありのままに話しましたのち、さらに

「陛下、このようにして、わたくしはカダリーガルバーさまをお別れさせましたのですが、策略を用いて皇后さまの御気持を和げまして、カダリーガルバーさまが皇后さまから調伏の呪詛をかけられないように、お守り申しあげました。」

と申しました。この言葉を聴きますと、王は偉大な聖仙の言葉が正しいことを知り、カダリーガルバーを深く信頼して、彼女を再び妃としました。王は庵に帰る聖仙を送った後、

「この男は余に忠誠を尽している。」

とて、床屋に褒美を授けました。まこと、王者というものは奸智に長けた男の食いものになります。こうして、ドリダ・ヴァルマン王は皇后の嫉視にも拘わらず、カダリーガルバー妃と幸福に暮しました。

「殊のほかに美しいカリンガセーナーよ、このようなたぐいの多くの誣告が、同じ夫の寵を争う妃妾たちから、なされるのです。あなたは黄道吉日が遥か後日に延期されたのです。それに、わたくしども知るをえない活動をされる神々でさえ、あなたに恋慕しています。ですから、あなたは今ヴァツァ王だけに捧げられたこの世の唯一の宝であるあなた御自身を、あらゆる攻撃から護らねばなりません。あなた御自身の長所が他人に憎悪の心を起させるのです。あなたは今、未来の夫の宮殿に住んでいられるのですから、わたしは今後あなたのお傍には参りません。勝れ

た婦人は友人の夫の館には行かないものです。それに、わたしは夫からも禁じられています。わたしの夫は天眼を有していますゆえ、わたしがいくらあなたを愛しているからとて、隠れて此処に来ましても、すぐ見つかりますので、それもできません。今日でも漸くのことで許しをえて参りましたのです。此処ではもはや何もすることはありませぬから、わたしは家に帰ります。でも、夫が許してくれますならば、羞恥を忘れて、此処に来ましょう。」

と、アスラ王の娘ソーマ・プラバーは涙を浮べて、涙の雨に顔を洗われた王女カリンガセーナーに語り、王女を慰めた後、陽も傾いたので、空を飛んで自分の館に帰ってゆきました。

七

こうして、自分の生れた国も肉親も捨てた王女カリンガセーナーは、去ってしまった親友ソーマ・プラバーのことを思いながら、ヴァツァ王との結婚式が延期されましたので、あたかも森から迷い出た牝鹿のように、カウシャームビーに留まっていました。また、ヴァツァ王はカリンガセーナーとの結婚を巧みに延期させた天文博士たちに少なからず不快を覚えましたが、どうにもなりませんでした。カリンガセーナーに対する恋情に遣瀬ない王は、心をまぎらせるために、その日ヴァーサヴァダッター妃の部屋に行きました。すると、予め首相ヤウガンダラーヤナから教えられていました妃は、顔の色も変えずに、特別に心をこめて王をもてなしました。王は

「カリンガセーナーの事件を知っているにも拘わらず、妃は何故怒らないのだろうか。」

と考え、その訳を知りたいと思って

「妃よ、カリンガセーナーという王女が、わたしを夫に選んで、此処に来たのを知っていますか。」

と語りました。王妃は顔色も変えないで言いました。

「知っております。わたくしは非常に嬉しゅうございます。と申しますのは、幸運の女神がわたくしどものところへ来られたのですもの。あの姫と結婚されましたならば、姫の父上のカリンガダッタ大王もあなたの御威光に服することになりますし、そうなれば世界は完全にあなたの御威光の下にあることになります。あなたの御繁栄、あなたの御幸福こそ、わたくしの幸福なのです。あなたがそのようになられることは、以前から判っていました。他の諸王さえ恋い焦れるという姫に恋い慕われるあなたのような方を夫にもつわたくしが、どうして幸福でないでしょうか。」と、ヤウガンダラーヤナに予め教えられていましたヴァーサヴァダッター妃から、このように言われましたヴァツァ王は心の中で悦びました。王は妃と酒宴を催し、その夜は彼女の部屋にやすみましたが、夜半に眼を覚まして、篤と考えました。

「カリンガセーナーと寵を競うようになるというにも拘わらず、それを許して、余にこのように黙従するとは、妃はまことに大きな度量だ。余がパドマーヴァティーと結婚したときにも、妃が生命を捨てなかったのは運命の力であろうが、この憐れな妃はどうしてカリンガセーナーを辛

抱することができようか。従って、もし、彼女に不幸が起れば、一切は破滅しよう。わが子も、義兄も、舅も、パドマーヴァティーも、また王国の運命も、みなヴァーサヴァダッターにかかっている。これ以上のことを言う必要はない。とすれば、余はどうしてカリンガセーナーと結婚することができようか。」

と、このように考えて、夜が明けると、ヴァツァ王は其処を出ました。そして、次の晩には、パドマーヴァティー妃の館に行きました。ヴァーサヴァダッターから教えられていましたパドマーヴァティーも、ヴァツァ王が来ますと教えられた通りに心をくばり、王から訊ねられると、教えられた通りに答えました。

こうして、次の日、二人の妃が心も言葉も一つであることを思い、ヤウガンダラーヤナに二人の妃のことを賞讃しました。好機をつかむのに巧みな大臣ヤウガンダラーヤナは、王がカリンガセーナーとの結婚を躊躇するに至ったと察して、静かに言いました。

「陛下の御希望の通りにはならないと、わたくしは存じております。カリンガセーナー姫と結婚されますことは、怖ろしい結果になると思います。お二人のお姫さまがそのように仰せられましたのは、必ずや生命を捨てることを深く決意なされたからです。貞淑な婦人は夫が他の女に心を奪われたときや、夫が死んだときには、その心の中は他からは判りかねますが、快楽に無頓着になり、死を決心するようになります。女にとって、深い愛情が妨げられるのは、堪えられないからであります。陛下、この点について、シュルタセーナ王の物語をお聴き下さい。」

〔シュルタセーナ王の物語〕

南方の土地にあるゴーカルナ*という都に、シュルタセーナという王がありました。この王はその王家の装飾で、学識を備えていました。この王はなに一つ欠けることなく幸福でしたが、自分に相応わしい妻のえられないことが、唯一つの不満でありました。あるとき、王がこの不満を思いながら、そのことを話しますと、アグニ・シャルマンという婆羅門が申しました。

「陛下、わたくしは二つの奇蹟を見ました。お話し申しあげましょう。お聴きください。わたくしが聖地巡礼に出かけましたとき、パンチャ・ティールティー霊場*に着きました。五人の天女が聖仙の呪詛のために鰐となり、聖地巡礼に来ましたアルジュナによって救われたという聖地です。わたくしは其処で五夜のあいだ断食した人々をナーラーヤナ天*の従者にするという霊験あらたかな水で沐浴をしまして立去ろうとしますと、一人の農夫が田の真中で歌をうたいながら鍬で耕しているのを見ました。この農夫に一人の巡礼者が道を訊ねましたが、一心不乱に歌をうたっていました農夫には聞えませんでした。すると、巡礼者は怒って罵倒しました。農夫は歌をやめて巡礼者に言いました。

『ああ、巡礼の方ですかい。あんたは徳ちゅうものをちっとも知らんね。俺は馬鹿だけど、徳ちゅうものの本体を知っとるがね。』

という言葉を聴きまして、巡礼者は好奇心を起して

『お前さんは何を知っとるのかね。』

とたずねましたので、農夫が話しました。

『まあ、この木蔭に這入りなされや。お話しますで、お聴きなされ。』

〔三人兄弟の婆羅門の物語〕

この土地に、婆羅門の三人兄弟がいましただ。ブラフマダッタ、ソーマダッタ、ヴィシュヴァダッタといってな、徳行の高い方々じゃった。上の二人はお嫁さんがあったけど、末の方だけはまだお嫁さんを貰ってなかっただよ。俺はこの方々の作男だったんだが、末のヴィシュヴァダッタさんはこの俺と一緒になってな、怒りもなさらんでお二人の兄さんの言いなりになって、仕事をなさっていましただ。そんな訳で、二人の兄さん方はの、弟御がおとなしくて、智慧が足りず、お人よしで正道を踏みはずせず、糞真面目で疲れを知らぬ奴だと思ってござっただ。すると、あるとき、二人の兄嫁さんたちがこの方に惚れてさ。そうっと言寄ったんだ。ところが、この末のヴィシュヴァダッタという方はの、お二人の兄嫁を母御のように扱いなさってさ、肘鉄をくわしただ。すると、二人の兄嫁というのがそれぞれ旦那のところへ行ってさ、

『あんたの末の弟が内緒でわたしに言寄ったんですよ。』

と、告げ口したんだよ。二人の兄さんは心中大いに怒ったわけさね。どうも悪い女房の口にだまされると、善いも悪いも判らなくなるものだね。そこで、兄さんたち、ヴィシュヴァダッタさんに、

『畑の真中にある蟻塚を掘れ。』

と言いつけましただ。

『そうしよう。』

と、二つ返事でさ、畑に行って、蟻塚を鋤で掘りだしただ。俺は

『黒い毒蛇がいるから、そんなことするもんじゃねえ。』

と、口を酸っぱくしてとめたんだが、そう言っても、

『どうでもよい。』

と、蟻塚を掘りつづける始末さ。二人の兄さんがこの人をいたみつけようとしてさ、そんなことを言いつけたのにさ、それを拒みもしないんだからね。ところがさ、掘っていると、黒蛇じゃなくて黄金が一杯つまっている壺が出てきただ。徳というものは、善人たちのところに現われるもんだね。俺はとめたんだけど、ヴィシュヴァダッタさんはその壺を持っていって、兄さんたちにみな上げてしまったのさ。兄さんたちを真底尊敬していたんだね。すると、二人の兄さん方というのが、弟の金を取ろうと考えてさ。金を出して人殺しを傭ってさ、弟さんの手足を斬りおとしてしまったんだ。そんなにされてもさ、この方は怒りなさらないのさ。すると、その功徳で、こ

の方の手足はもと通りに生えただよ。

『このことを見て以来ちゅうものは、俺は全然怒らんことにしただ。それに、あんたは苦行者じゃというに、今日までも怒ることを解脱していられんじゃないか。怒らぬ人は天国に行くだよ。さあ、見ていてごらんよ。』

と言うたかと思いました途端に、この農夫は現身を捨てて、天に昇りました。これがわたくしの見ました奇蹟であります。もう一つの奇蹟をお聴きください。」

と、シュルタセーナ王に言いまして、婆羅門は再び言葉をつづけました。

「それから、さらに聖地巡礼の旅をつづけまして、海浜を歩いていましたとき、ヴァサンタセーナ王の国に到着しました。その土地で、食物の布施を受けようとしまして、王の建てられました救護所に這入ろうとしますと、婆羅門たちが

『そちらの方には王女さまがいられるから、そちらへ行ってはならぬ。姫はヴィデュット・デュヨーターといわれる。聖仙でも、姫を見るときは、カーマ（愛の神）の矢に射られて心狂い、生命を全うしない。』

と申しましたので、わたくしは答えました。

『わたしはいつも第二のカンダルパ（恋の神カーマの異名）ともいうべきシュルタセーナ王を見ている故、わたしにとっては特に取りたてて言うほどのことではない。シュルタセーナ王が地方の巡狩など

に行幸されるとき、良家の婦女子が不貞を侵さないようにと、護衛の人々が彼女たちを王の見えない他の場所に連れ去るのだ。』

と申しますと、救護所の主任と王家の司祭官とは、わたくしが陛下に仕える者と知って、饗宴に列席させるために、わたくしをヴァサンタセーナ王のところに案内しました。そして、わたくしは王女ヴィデュット・デュヨーターを見ました。まこと、愛の神カーマが世を魅了するために用います神変不可思議な術の化身かと思われるほどでありました。わたしもこの王女を見まして、心のさわぐのをおさえるのに長い時間を要しましたが、

『もしこの王女がわれわれの主君の妃となられたならば、王は必ずや王国を忘れてしまわれるであろう。しかし、この話はどうしても王に話さねばならない。さもないと、ウンマーディニーとデーヴァセーナ王の事件が必ずや起るであろう。』

と考えました。」

〔ウンマーディニーとデーヴァセーナ王の物語〕

むかし、デーヴァセーナ王の国に、商人の娘でウンマーディニーという、世間を魅了しつくすような絶世の美女がいました。この娘の父がデーヴァセーナ王に娘のことを話しましたが、王が義務を怠るようになるのを怖れました婆羅門たちが、ウンマーディニーには不吉の相があると申

しましたので、王は彼女を娶りませんでした。そこで、ウンマーディニーはデーヴァセーナ王の首相に嫁ぎました。

あるとき、ウンマーディニーが窓辺にいるのを王が見ました。そのとき、王は遠くから彼女の美しいまなざしを見まして、彼女と結婚しなかったことが悔いられて、あたかも蛇の毒にうたれたかのように気を失い、その後は快々として楽しまず、食事もとらなくなりました。彼女の夫をはじめとして、各大臣から彼女と結婚することを慫慂されましたが、正義を愛するデーヴァセーナ王は彼女と結婚せず、彼女を恋い慕うて、遂に死にました。

「従って、同じような騒動が陛下の御身体に起りましては、わたくしが陛下を害ったことになると存じまして、今日ここに参りまして、この不思議なお話を申しあげるのでございます。」

と、あたかも恋の神の命令にも似た言葉を婆羅門アグニ・シャルマンから聴きますと、シュルタセーナ王の心はヴィデュット・デュヨーターに奪われてしまいました。そこで、王は直ちにこの婆羅門をヴァサンタセーナ王の許に派遣して、ヴィデュット・デュヨーターを速かに迎える手段をつくして、姫と結婚しました。こうして、王女ヴィデュット・デュヨーターは、あたかも日光が太陽と離れないように、シュルタセーナ王の肉体から離れることができなくなりました。

さて、大富豪の商人の娘でマートリダッターという処女が、みずからの容姿に自惚れて、シュルタセーナ王をみずから夫に選んで、王の許に参りました。王は非法を犯すことを怖れて、この

商人の娘と結婚しました。すると、ヴィデュット・デュヨーターはそれを知りまして、心臓が破裂して死にました。王は近づいて愛妃が死んだのを見まして、愛妃を抱いて悲しんでいましたが、突然に息が絶えてしまいました。すると、商人の娘マートリダッターは王の屍を焼く火に這入りました。* こうして、その王国もすべてこの王の死とともに滅び去りました。

「ですから、陛下、長い間の愛情が破れることは堪えがたいものであります。自尊心をもたれるヴァーサヴァダッター妃さまの場合には、特にそうでありましょう。従って、陛下がカリンガセーナーを娶られますならば、ヴァーサヴァダッター妃さまが生命をなくされることは必定です。また、パドマーヴァティー妃さまも同じでありましょう。お二人の生命は一つなのですから。そうなれば、ナラヴァーハナダッタ王子さまはどのようになられるでしょうか。また、そうなれば、陛下のお心も、その悲しみに到底堪えられないことは明白であります。かくて、大王さま、一切は忽ちに破滅してしまいましょう。しかも、お二人のお妃さまのお言葉が少しも動揺していられませぬのは、お二人とも生命を捨てることを深く心中に決意されていて、他に心を奪われていられないことを十分に示しております。ですから、陛下は御自身のためをはかられるべきであります。動物でさえ、自己防護を知っております。況んや陛下のように智慧ある方々はなおさらであります。」

と、首相ヤウガンダラーヤナから聴きますと、ヴァツァ王ははっきりと思い直し、大臣に語りま

した。

「その通りだ。その点に疑いはない。余の一切は破滅するであろう。従って、カリンガセーナーとの結婚は余になんの利益があろうか。天文博士たちが黄道吉日は遙か後日だと申したのは、まことに時宜に適したことだった。余をみずから夫に選んだ婦人を捨てても、それほど非法を犯したことにはならないであろう。」

と、ヴァツァ王が語るのを聴きまして、ヤウガンダラーヤナは悦んで、考えました。

「われわれの仕事は望み通りに殆んど完成した。方便という流れから給水されて、適当な場所と時とに培われるとき、政治という大樹で実を結ばないものがあろうか。」

と、大臣ヤウガンダラーヤナは考え、適当な場所と時とを熟慮した後に、ヴァツァ王に恭しく拝礼して、自分の館に帰りました。

ヴァツァ王はヴァーサヴァダッター妃の許に行き、心中を顔にあらわさずに迎える妃を慰めて、言いました。

「何をわたしが言おうとしているか、判っているでしょう。水に生える蓮華と水との間柄のように、そなたの愛情がわたしの生命なのです。どうして他の女の名を口にすることができようか。でも、カリンガセーナーは強引に余の宮殿にやってきたのです。よく知られている通り、ランバーは強引に苦行を行じているアルジュナに近づき、アルジュナに拒まれると、彼を呪詛して去勢しました。彼は呪詛を受けたまま奇蹟の姿を現じて、女装をして一年間ヴィラータ王*の王宮にいました。ですから、わたしはそのときカリンガセーナーを拒まなかったのです。そなたの希望でないことを、わたしはどうしてすることができよう。」

と、ヴァツァ王は妃を慰めましたが、王に対する愛情に頰を染めたかのように、妃が酒の酔に頰を紅潮させましたので、王は妃の残酷な決心が真実であったことを知りました。ヴァツァ王は宰相の卓越した手腕によって事を未然に防ぎえたことを悦び、その夜はヴァーサヴァダッター妃と過しました。

さて、話かわって、ヤウガンダラーヤナが嚮にカリンガセーナーの所行を日夜監視することを依頼した友人のブラフマ・ラークシャサが、丁度その夜、自分の考で帰ってきまして、宰相に語りました。

「カリンガセーナーの宿泊する宮殿の内外に、わたくしはいつも留まっていました。だが、神も人間も其処に来るのを見かけませんでした。ところが、今日夕刻に、わたくしが宮殿の屋根に隠れていますと、突然に空中から微かな音が聴えてきました。そこで、わたくしは神通力でその原因をつきとめようとしましたが、できませんでしたので種々検討しました結果、このように考えました。

『これは必ずやカリンガセーナーに懸想して空中をさまよう或る天界の人の音に相違ない。わたくしの神通力がどうしても成功しなかったのであるから、何か穴を見つけねばならない。寝ずの番をする熟練者は敵の鎧にある穴をさえ容易に見つけるのだ。それに、宰相は天界の人々さえ

彼女に惚れている、と言われましたし、また彼女の友のソーマ・プラバーも同じことを語ったのを聴いている。』

と決心して、そのことをあなたにお話しするために此処に参りました。今、是非おたずねしたいのですが、なにとぞ話してください。あなたが王に

『獣でさえも自分自身を護る。』

と言われましたのを、わたくしは神通力によって姿を見られないで聴きました。この点について例証がありますならば、賢者よ、わたくしに話してください。」

と、ヨーゲーシュヴァラから言われましたヤウガンダラーヤナが語りました。

「友よ、あるのだ。その物語をしよう。聴きなさい。」

〔猫鼬と鸚鵡と猫と鼠の物語〕

むかし、ヴィディシャー城*の郊外に、大きな榕樹があった。この大樹に、猫鼬と鸚鵡と猫と鼠の四匹の動物がそれぞれ巣をつくって住んでいた。猫鼬と鼠とは根元にある穴の中に別々に棲み、猫は幹の中央にある大きな洞穴に棲んでいたが、鸚鵡は他のものが近づきえない梢の蔓草の巣にいた。これらの中で、鼠は他の三動物から食われる運命にあり、また猫を除く三動物は猫に食われる危険があった。鼠と猫鼬と鸚鵡とは夜間に歩き廻って食物を探したが、鼠と猫鼬の場合は猫

に対する恐怖からであり、鸚鵡はその本性からであった。猫は夜となく昼となく鼠を捕えようと近くの麦畑を大胆に歩き廻っていたが、他のものたちはそれぞれに適当な時に食物を索めて秘かに麦畑に行かねばならなかった。

あるとき、チャンダーラ種（賤民種性の一）の猟師が其処へやってきて、畑を歩き廻った猫の足跡を見つけて、それを殺すために畑のまわりに罠をかけて帰った。夜間に、鼠を探しに出た猫がその麦畑に這入って、罠にかかってしまった。すると鼠も食物を索めて其処へ秘かにやってきて、猫が罠にかかっているのを見て、喜んで踊った。鼠が畑に這入っているとき、鸚鵡と猫鼬とが同じ道を通って遠くからやってきて、猫が罠にかかっているのを見て、鼠を捕えようと望んだ。鼠は遠くから彼等を見て驚いたが、考えた。

「もし俺が猫鼬や鸚鵡の怖れている猫のところへ逃げるなら、猫は罠にかかっているとはいえ、一撃で俺を殺すであろう。猫から離れておれば、猫鼬と鸚鵡とが俺を殺すだろう。このように敵に包囲されて、俺は何処へ行こうか、どうしようか、ああ、とにかく窮地に墜ちている猫のところへ逃げよう。俺には罠を噛み切ることができるのだから、猫は自身を救うて貰うためにも、俺を護ってくれるだろう。」

と考えて、鼠はそっと猫に近づいて、

「あなたが罠にかかられたのは、本当にお気の毒です。ですから、わたしが切ってあげましょう。心の正しい者は敵であっても、共同生活をすることによって、敵を愛するようになります。

しかし、あなたのお心の中が判りませんので、わたしはあなたを信用することができないのです。」
と言った。この言葉を聴くと、猫は言った。
「君、安心したまえ。罠を嚙み切ってくれるなら、君はわたしの生命の恩人だから、今日以後、君はわたしの友人だよ。」
と、猫が言うのを聴くや否や、鼠は猫の腹の下に逃げこんだ。それを見て、猫鼬と鸚鵡とは諦めて帰っていった。そこで、罠に苦しんでいる猫が鼠に
「君、もう夜も明けかけたし、急いで罠を嚙み切ってくれたまえ。」
と言ったが、鼠は猟師が来るのを待ち焦れて、ゆっくりと罠を少しずつ嚙み、ただ歯の音だけをさせて嚙み切っているといつわり、嚙み切るのを長びかせたのだ。間もなく、夜が明け、猟師が近づいてくると、鼠は猫に促がされて、急いで罠を嚙み切った。罠が切られると、猫は猟師を怖れて逃げてしまったので、危うく死を免れた鼠は穴の中に逃げこんだ。その後、猫が鼠を呼んだけれども、鼠は猫を信用せず、
「時と場合によっては、敵も友となることがあるが、いつもそうとは限らない。」
と言った。
「このように、鼠のごとき動物でさえ、多くの敵から智慧によってわが身を護った。ましてや

人間の間では、なおさらのことである。あのとき、わたしが王に語って君が聴いた言葉は、王妃の生命を護ることによって、王自身の所行を慧智によって誡しめようとしたものなのだ。慧智こそ如何なる時にも最上の友であって、勇気がそうなのではない。ヨーゲーシュヴァラよ、その例にこういう物語を聴かせよう。」
と、ヤウガンダラーヤナは言葉を続けた。

〔プラセーナ・ジット王と財宝を失った婆羅門の物語〕

むかし、シュラーヴァスティー城に、プラセーナ・ジットという王があった。ある日、一人の婆羅門がこの都にやって来た。この婆羅門は籾のついた米を食べていたので、一人の商人が有徳の聖者であると思い、ある婆羅門の家に逗留させた。其処に滞在している間、この商人は婆羅門に毎日籾のついた米やその他の施物を贈っていたが、他の大商人たちも次第にそれを知って、数多の贈物をするようになった。このようにして、この貧相な男は遂に千ディーナーラ*の黄金を蓄えたので、森に行って孔を掘り、その黄金を地中に埋めたのであった。そして、毎日一度は其処へ行って、それを検べていた。ある日、その孔が掘られて黄金のなくなっているのを見て、彼の心はつぶれ、心に空洞ができたのみならず、四方さえ空洞のように思われた。逗留している家に泣きながら帰ってくると、訳をたずねられたので、一部始終をのこらず話した。彼は霊場へ行っ

て、断食して生命を捨てようと決心したが、彼に食物を施していた商人がそれを知って、他の者たちと一緒にやって来て、この婆羅門に語った。

「婆羅門よ、財産のために、何故あなたは生命を捨てようとなさるのか。財宝というものは、非時の雲のように、突然にやって来て、去るものですよ。」

などと慰めたけれども、彼は死の決心を思いとどまらなかった。吝嗇な者にとっては、財宝は生命より重大であるからだ。こうして、この婆羅門が死ぬる目的で霊場へ赴こうとしているとき、プラセーナ・ジット王がそれを聞いて、親しく彼のところへ来られた。そして、

「婆羅門よ、そなたがディーナーラ貨幣を地中に埋めた場所を知る何かしるしがあるのか。」

と訊ねられた。婆羅門が

「森の中の其処には小さな樹があります。陛下、わたくしはその根元に財貨を埋めましたのでございます。」

と答えたので、王は

「その財貨を探し出して、そなたに返してやろう。もし、探し出すことができなければ、余の宝蔵からそれを与えよう。生命を捨てるではない。」

と語られて、彼が自殺しようとするのを思いとどまらせ、彼を商人に預けて、王宮に還られた。そして、王は頭痛であると仮病を装い、侍従に命じて太鼓を鳴らさせて、すべての医者を招集した。そして、余人を遠ざけて、一人一人を召し、

「そなたの患者は誰か。何人なのか。またどんな薬を用いているか。」

と訊ねた。医者たちは一人一人王の質問にのこらず答えたが、その中の一人の医者が質問される順番が来ると、このように言った。

「陛下、商人マートリダッタが病気でございまして、ナーガバラー（薬草の一）を薬にするように処方を与えて、今日が二日目でございます。」

という言葉を聴かれると、王は早速にその商人を召されて、

「ナーガバラーを誰か採ってきたか。」

と訊ねられた。

「陛下、下男でございます。」

と、商人が申したので、王は直ちにこの商人の下男を召喚された。

「お前がナーガバラーを探しに行って樹の根元を掘ったとき、見つけたディーナーラ貨の財宝を持主の婆羅門に返せ。」

と仰せられると、その下男は驚き怖れ、直ちに白状して、ディーナーラ貨幣を持ってきた。王は断食している婆羅門を召して、それを返したのであるが、こうして奪い去られて再び返ってきたディーナーラ貨幣は、この婆羅門にとっては、自分の生命に匹敵するほど貴重なものだったのだ。

「このように、プラセーナ・ジット王は樹の根元から持ち去られた財貨を、婆羅門のために、

其処に生ずる蘖草を知って取り返してやったのであるが、これは王の慧智によってである。このことから知られるように、慧智は常に勇気に打勝つものである。まこと、このような場合に、勇気が如何なることを成就しえようか。従って、ヨーゲーシュヴァラよ、君は君の智慧によって、カリンガセーナーの何等かの欠点が知られるようにすべきだ。それに、神もアスラも彼女に惚れているのだし、また君は夜間に空中で何者かの音のするのを聞いているではないか。こうして、彼女の欠点がなにか知られたならば、不吉なことが彼女に起るであろうが、われわれには関係はないのだ。そうなれば、王は彼女に心を惹かれないようになるであろうし、またわれわれは彼女に対して非法を行ったことにならないであろう。」

と、賢明なヤウガンダラーヤナからすべてのことを聴きまして、ブラフマ・ラークシャサのヨーゲーシュヴァラは満足して、ヤウガンダラーヤナに言いました。

「アリハス・パティ神を除いて、攻略の点であなたに匹敵しうる人があろうか。あなたの輔弼によって、王国の大樹は甘露（不死不老の霊薬）を灌がれたのです。わたくしはカリンガセーナーの所行を、慧智と能力のすべてを捧げて、見守りましょう。」

と言って、ヨーゲーシュヴァラは其処を出て行きました。

その頃、カリンガセーナーは宮殿の露台に出ては、露台などを逍遥するヴァッツァ王の姿を見て、見る度ごとに息を呑んでいた。彼女の心は恋慕の焔に焼かれて、蓮華の糸で作った腕環や頸飾りを帯び、また身体には栴檀を塗ってはいましたけれども、平静をうることはできませんでした。

さて、話かわって、マダナ・ヴェーガというヴィディヤーダラ王は、嘗てカリンガセーナーを見て、恋の神の矢に射られて深傷を負うていた。彼は彼女を得るために苦行を行じて、シヴァ神から恩寵を授かっていましたけれども、彼女は他の男に心を惹かれ、その男の土地にいましたので、容易に彼女を得ることができませんでした。そこで、このヴィディヤーダラ王は機会を摑もうとして、夜になればカリンガセーナーの住む宮殿の上の天空を飛び廻っていました。彼の苦行に満足されたシヴァ神の命令を思い出して、彼はある夜自己の神通力によって、ヴァッツァ王の姿となりました。そして、その姿でカリンガセーナーの宮殿に這入りますと、門衛に恭しく迎えられました。

「結婚の日の延びたのに堪えられなくて、大臣たちにも秘密で此処に来ました。」

と語りました。カリンガセーナーは彼の姿を見て起き上りましたが、嬉しさに身体はふるえ、心はおののきました。そのために、彼女の帯びている数多くの装飾品が微かな音をたてましたが、その音は

「この人はヴァッツァ王ではない。」

と、彼女に注意を与えるかのようでありました。こうして、ヴァッツァ王の姿をしたマダナ・ヴェーガは漸く彼女を安心させて、ガーンダルヴァ式によって彼女を妻としました。そのとき、ヨーゲーシュヴァラは神通力によって、誰にも覚られずに、其処に這入って、このさまを見たのでしたが、眼前にヴァッツァ王の姿を見て驚き、心が迷いました。彼は早速にヤウガンダラーヤナの許

に行って、その旨を報告しましたが、ヤウガンダラーヤナの命令により巧みに、ヴァツァ王がその夜はヴァーサヴァダッター妃の傍にいることを知りました。ヨーゲーシュヴァラは宰相の言葉に悦び、カリンガセーナーの情夫の寝た姿を見るために、カリンガセーナーの宮殿に引き返しました。そして、カリンガセーナーが睡っている臥床の中に、マダナ・ヴェーガが本来の姿で睡っているのを見ました。マダナ・ヴェーガの神通力も、睡っている間は効を奏せず、姿をかえる力を失っていましたので、彼の汚れのない蓮華の足にはまぎれもないヴィディャーダラ族の標識である傘蓋と旗の紋がありました。大いに喜んだヨーゲーシュヴァラはヤウガンダラーヤナの許に帰り、見たままを告げて嬉しそうに

「わたくしのごとき者はなにも知りませんが、あなたは政略の眼でなんでも知っていられます。あなたの輔弼によって、王にとって成就しがたいことも成就しました。太陽のない天空、水のない水槽はなんの役にたちましょう。大臣の輔弼のない王国がなんになりましょう。真実のない言葉がなんになりましょう。」

と語りました。このように語ったヨーゲーシュヴァラと別れたヤウガンダラーヤナは、悦びをおさえることはできませんでした。翌朝になると、直ちに、彼はヴァツァ王に会うために参殿しました。いつものように王の前に伺候しますと、王がカリンガセーナーに関してなすべきことを尋ねましたので、ヤウガンダラーヤナは話のあいだに

「陛下、姫は不貞です。陛下が手に触れられるに値しません。姫はプラセーナ・ジット王に会

うために、みずから進んでかの王の都城に赴きました。かの王が年老いているのを見まして失望し、陛下の容色を得ようとして此処に来られました。しかも、今では、他の男との逢瀬を楽んでいます。」

と語りました。この言葉を聴きまして

「良家の生れである姫がどうしてそのような振舞をしようか。また、誰が余の後宮の中に忍びこむことができようか。」

と、王が語りますと、賢明なヤウガンダラーヤナが答えました。

「陛下、では、本日陛下にそのことをお見せしましょう。天上のシッダたちなども、姫に懸想しています。人間がどうして彼等に対抗できましょう。また、陛下、誰が天界の人々の行動を妨げることができましょうか。ですから、陛下が親しくお出かけになって、御自身の眼で御覧になってください。」

と、大臣が語りますと、ヴァツァ王は夜になって大臣と一緒に出かけようと決心しました。

ヤウガンダラーヤナはそれからヴァーサヴァダッター妃の許に赴き

「お妃さま、陛下がパドマーヴァティーさまより他の方と結婚なさらないようにしましょう、とお約束しましたことを、わたくしは今日やり遂げました。」

と語りました後、カリンガセーナーの所行をのこらず物語りました。ヴァーサヴァダッター妃は深く頭を垂れて、ヤウガンダラーヤナに祝意を述べ

「わたしはあなたに教えられた通りにして、その果実を摘んだのです。」
と言いました。

こうして、夜になって人々が寝静まると、ヴァツァ王とヤウガンダラーヤナとはカリンガセーナーの館に出かけました。人知れず館に忍びこみました王は、カリンガセーナーの傍にマダナ・ヴェーガがその真の姿で睡っているのを見ました。王がこの大胆不敵な男を殺そうと思いましたが、このヴィディヤーダラは神通力によって眼を覚まし、直ぐさま館を出て天に昇りました。すると、その途端に、カリンガセーナーも眼を覚ましました。寝床が空なのを見て
「ヴァツァ王がわたしよりさきに起きて、睡っているわたしを放っておいて出て行かれたとは、どうしたことであろうか。」
と、独り言を言いました。この言葉を聞いて、ヤウガンダラーヤナがヴァツァ王に語りました。
「聴いてごらんなさい。姫は陛下の姿をしたあの男に瞞されたのです。わたくしは神通力によってあの男のことを知り、いま陛下にお見せしました。しかし、あの男は神通力を持っていますので、殺すことはできません。」
と語り、二人は一緒にカリンガセーナーに近づきました。すると、カリンガセーナーは二人を見て、恭しく起き上って
「上さま、たった今、何処かへ行かれて、どうして大臣をお連れになってこられましたのですか。」

とたずねますと、ヤウガンダラーヤナが
「カリンガセーナーさま、あなたさまは神通力によってヴァツァ王の姿をした誰かに瞞されて、その方と結婚されたのです。ここにいられますわたしの主君と結婚されたのではありません。」
と言いました。この言葉を聴きますと、カリンガセーナーは心臓を矢で射ぬかれたかのように劇しく身もだえて、眼に涙をたたえて
「ガーンダルヴァ式でわたくしと契を結ばれながら、シャクンタラーをドゥシャンタ王が忘れ
*たように、あなたはわたしをお忘れになったのでございますか。」
と、ヴァツァ王に言いますと、王は顔をうつむけたままカリンガセーナーに
「まこと、わたしはあなたと契を結ばない。わたしはいま此処に来たばかりだ。」
と、言いました。ヤウガンダラーヤナは
「さあ、参りましょう。」
と、王を誘って王宮に帰ってゆきました。

こうして、ヴァツァ王が大臣と一緒に立去りますと、肉親を捨ててあたかも群を離れた牝鹿のように他国に留まり、象に踏みしだかれた蓮華さながらに、蓮華のごとき顔容は愛慾にすさみ、黒蜂の群にも似た黒髪の束も解けみだれ、処女を失いましたカリンガセーナーは途方に暮れ、天を仰いで
「ヴァツァ王の姿をしたどなたかと、わたしは契を結びました。その方はなにとぞ姿を現わし

てくださいませ。その方はわたしの処女性の夫です。」
と言いました。その声を聴いて、かのヴィディヤーダラ王は神々しい姿で、頸飾りや腕飾りを輝かせながら、天から降臨しました。
「あなたはどなたですか。」
と、カリンガセーナーがたずねますと、ヴィディヤーダラ王が彼女に語りました。
「容姿美しき方よ、余はマダナ・ヴェーガというヴィディヤーダラ王である。嘗て、父の家にいるそなたを見染めて、苦行を行じ、マヘーシュヴァラ神（シヴァ神の別名）から
『そなたを妻にすることができる。』
という恩寵を授けられた。そなたはヴァツァ王に心を惹かれていたので、余はヴァツァ王の姿をして、ヴァツァ王とそなたの結婚式が行われるまえに、秘かにそなたと契を結んだのだ。」
と、マダナ・ヴェーガの言葉の甘露がカリンガセーナーの耳に這入ると、彼女の心の蓮華はいくらか蘇生しました。
マダナ・ヴェーガは美しいカリンガセーナーを慰めて安心させ、また彼女に黄金の塊を与えました。そして、彼女の心に、みずからに相応わしい勝れた夫に対する愛情が湧いてきますと、彼は再び天上に飛び上って帰ってゆきました。カリンガセーナーは、夫の住処である天界には人間が到達しえられないこと、情熱のために父の家を捨ててきた以上、父の家には再び帰られないことを考えて、マダナ・ヴェーガの許しをえて、ヴァツァ王の宮殿に住むことにしました。

八

さて、ヴァツァ王はカリンガセーナーの比類のない美しさが忘れられず、ある夜マンマタ（愛の神カーマの異名）に取憑かれました。彼は床から起き上り、手に剣をたずさえて、ひとりで彼女の館に這入ってゆきますと、彼女は恭しく出迎えました。王がカリンガセーナーに妻になってくれるように懇願しましたが、彼女は
「わたしは人妻です。」
と拒みました。王が
「そなたは三番目の男を夫にした淫奔な女だから、そなたに近づいても余は姦通の罪を犯したことにはならぬ。」
と言いますと、カリンガセーナーは答えました。
「王さま、わたしはあなたと結婚するために此処に参りました。しかし、ヴィディヤーダラ王マダナ・ヴェーガがあなたの姿をして、意のままにわたしを妻としたのです。ですから、彼一人がわたしの夫です。わたしがどうして淫奔な女なのでしょうか。このような不運は、肉親を捨てて、自分の思いのままに振舞って、心迷うた女にはありがちのことです。ましてや、王女の場合、そうでありましょう。それに、このことは、不吉の前兆を認めた友が『してはいけない。』と忠告

したにも拘わらず、あなたの許に使いを出したわたしの愚かさが招いた結果です。もし、あなたが力ずくでわたしにお触れになりますならば、わたしは生命を捨てます。良家の女は、たとい如何なることがありましても、夫に辱しめを与えることはできません。王さま、こういうお話を申しあげましょう。お聴きくださいませ。」

〔インドラダッタ王と商人の妻の物語〕

むかし、インドラダッタというチェーディ*国の大王がありました。この王は人間の肉身が滅することを知って、栄光の肉身を冀い、自己の名声のためにパーパ・ショーダナ霊場に大神殿を建立しました。そして、深い信仰から、いつも其処に参詣していました。また、人々もこの霊場で水浴をするために、其処へ行きました。

あるとき、夫が旅行に出ている商人の妻が霊場で水浴をするために其処に来ているのを、王は見ました。彼女は輝くばかりの美しさの甘露を滴らし、数々の魅力に飾られていて、あたかもカンダルパ（愛の神カーマの異名）の動く宮殿のように、美しい女でした。そして、

「汝とともに、一切を征服せん。」

と、五本の矢を持つ神（愛の神カーマ）が、彼女に対する愛情から、二つの箙の光輝で彼女の両足を抱いているかのようでありました。インドラダッタ王が彼女を見たとき、彼の心は途端に彼女の虜とな

りました。王は自制心を失い、遂に彼女の家を探り出し、夜になって彼女の家に行きました。王が彼女を口説きますと、その女は

「あなたは人民の保護者です。人妻に触れるのは、あなたの御身分にふさわしくありません。もし無理にわたしにお触れになりますならば、あなたは甚だしい非法をなされたことになります。わたしはたちどころに死にます。わたしは汚辱に堪えることはできません。」

と言いました。女がこのように言うにも拘わらず、王が暴力を振おうとしました。操を破られるという恐怖から、彼女の心臓が忽ちに破裂してしまいました。それを見て、王は驚きあわて秘かに逃げ帰りましたが、王はその罪を苦にして間もなく死にました。

と、この物語をしましたカリンガセーナーは、おそるおそるヴァツァ王に恭しくお辞儀をして、さらに言葉をつづけました。

「こういう訳ですから、わたしの生命を奪うような非法なことをお考えにならないでくださいませ。此処に参りましたわたしを憐れんで、なにとぞ暫くの間此処に住まわせてくださいませ。もし、それがいけないのでございますならば、わたしは他のところへ参ります。」

と、カリンガセーナーから聴きますと、正法を知るヴァツァ王は思いなおして、欲情もなくなり、カリンガセーナーに

「姫よ、あなたの夫と此処に御自由にお住みなさい。わたしはあなたにこのようなことを二度

と申しませんから、どうか怖がらないでください。」

と言って、自分の宮殿に静かに帰ってゆきました。すると、マダナ・ヴェーガが二人の話すのを聴いていまして、降臨して

「愛する妻よ、よくぞ振舞った。そなたがあのように振舞わないときには、余はそなたの所行を堪えることができないゆえ、幸福は決してこなかったであろう。」

と言ってカリンガセーナーを喜ばせ、その夜を彼女と一緒に過しました。そして、その後、ヴィディヤーダラ王は彼女の許に通ってきました。カリンガセーナーは人間の身ではありましたが、ヴィディヤーダラ王を夫にして、天上の楽しみを享受しながら、ヴァツァ王の宮殿の中で暮していました。ヴァツァ王も、彼女に対する妄執から解放され、大臣の言葉を思い出しては、王妃と王子と王国とを救うことができたのを悦びました。また、ヴァーサヴァダッター妃と大臣ヤウガンダラーヤナとは、策略というあらゆる望みをかなえさせる蔓草の果実をみのらせることができて安心したのでした。

こうして、日が経つと、カリンガセーナーが妊娠して、蓮華の顔容は青ざめ、異常嗜慾が生じました。盛りあがった二つの乳房は、乳首が少しく黒味を帯びて、あたかも愛の神の宝をいれた瓶に喜びの封印がはられているかのようでありました。すると、夫のマダナ・ヴェーガが来まして、カリンガセーナーに言いました。

「カリンガセーナーよ、われわれ天界の者には

『人間の胎に妊ったときには、それを捨てて遠くに行かねばならぬ。』

という掟がある。嘗てメーナカーはシャクンタラーをカンヴァ仙の庵に捨てたではないか。そなたは前生に於いては天女であったが、そなたの強情によってシヴァ神の呪詛を受けて、今では人間となっているのだ。また、そのせいで、貞節であったにも拘わらず、淫奔だと言われるようになった。だから、生れる子をよく護りなさい。わたしは自分の館に帰るけれども、そなたがわたしを心に浮べさえすれば、わたしは直ちに姿を現わそう。」

と言って、泣き悲しむカリンガセーナーを慰め、彼女に金塊を与えたのち、ヴィディヤーダラ王は彼女に心を残しながらも、掟に従って去ってゆきました。カリンガセーナーは友に頼るように生れてくる子供に望みを托して、ヴァツァ王の腕の蔭に庇護されて、ヴァツァ王の宮殿に留まりました。

話かわって、アムビカー女神の夫(シヴァ神の異名)は、シヴァ神に焼かれて肉体のなくなった夫(愛の神カーマ)を再び返して貰おうとして苦行を行じたラティ(カーマの妃)に

「嘗て余に焼かれたそなたの夫は、余に対して不遜の所行があったが故に、人間の胎に生れ、いまヴァツァ王の家にナラヴァーハナダッタという名で生れている。されど、そなたは苦行を行じて余を宥慰したことにより、人間の胎に入ることなく、そなたを人間界に生れさすであろう。かくして、そなたは夫と再会するをえよう。」

と語られたのち、創造主に

「カリンガセーナーは天界の血をひく子を生むであろう。汝は女神の威力によって、その子をこのラティと代え、ラティの天上界の身体を変えて人間界の女児に造り直せ。」

と命ぜられました。創造主はこの命令を奉じて、地上に下りました。時が来て、カリンガセーナーが分娩しますと、創造主は男児が生れた瞬間に神威力でその子を奪い去り、人知れずラティを女児として其処に置きましたので、その場にいた人々は日中に突然に月輪が昇って輝きわたるかのような女児が生れるのを見ました。生れでた女児はその部屋を光輝で照り映えさせ、部屋にともされた宝燈の焔の列は恥じらって、その光をかげらすかのようでありました。カリンガセーナーは比類ない女児が生れたのを見まして、男児が生れたことよりも一層喜びました。

さて、ヴァツァ王は、王妃ならびに大臣とともに、カリンガセーナーにこのように美しい女児の生れたことを聴きました。そのとき、王はシヴァ神に促がされて、ヤウガンダラーヤナのいるところで、突然にヴァーサヴァダッターに言いました。

「あのカリンガセーナーは天女で、呪詛のために人間界に墜ちたのだということをわたしは知っている。従って、彼女に生れた娘はさぞ神々しく、素晴らしく美しい容色であろう。とすれば、その女児は王子ナラヴァーハナダッタに容色の点では似合いであろう。王子の妃であるべきだ。」

と、ヴァツァ王が言うのを聴きまして、ヴァーサヴァダッター妃は

「大王さま、あなたは何故に突然にそのようなことを仰せられます。両親の家系の清浄な王子が、どうしてカリンガセーナーのような淫奔な女の胎に生れた娘に似合いでございましょう。」

と言いました。ヴァツァ王が

「それは自分から言ったことではない。誰かがわたしの体内に這入って、わたしに言わせているようだ。それに

『前世の定めによって、かの娘はナラヴァーハナダッタの妻となる。』

と、天上の声の語っているのが聞えたように思われる。また、カリンガセーナーは良家の生れで、貞淑な妻である。淫奔な女だという噂が生じたのは、彼女の前世の所行のせいなのだ。」

と言いますと、大臣ヤウガンダラーヤナが語りました。

「陛下、スマラ（愛の神カーマの異名）がシヴァ神に焼かれたとき、ラティが苦行を行じたと聞いております。シヴァ神はそれを嘉せられて、夫を取戻すことを願うラティに

『そなたは人間界に転生して、肉身を持って人間界に化身したそなたの夫と再会せよ。』

と、恩寵を授けられました。そして、王子さまがカーマの化身であるということは、既に以前に天上の声の宣言されたところであります。そして、シヴァ神の命で、ラティが人間の姿に化身したのであります。しかも、今日、産婆がわたくしに秘かにこのように申しました。

『以前に胎児がまだカリンガセーナーの胎内にありますときに、わたくしが巧みに見ましたのとは、全く異っていることを今日わたくしは知りました。この奇蹟を見まして、お話し申しあげようと思って参りました。』

と、産婆が申しましたので、わたくしは今はからずも思いあたりました。これは必ずや神々が神

威力によってカリンガセーナーの子を奪って、カーマの化身である王子さまの妻たるべき娘として、人間の胎内から生れないラティを置いたに相違ありません。天界の方々はある理由により運命の定めるままに地上に化身することがありますが、これらの方々は罪障がありませんので、人間の胎に生れることはありません。陛下、この女児の家柄は問題ではありません。従って、カリンガセーナーの娘は、いま申しあげました通り、運命の定めるところによって、王子さまの妻たるべき方であります。」

と、ヤウガンダラーヤナが言いますと、ヴァツァ王も、ヴァーサヴァダッター妃も、

「その通りである。」

と、心の中で同意しました。そして、宰相が退出しました後、王は王妃とその日を楽しく飲酒その他の娯楽に過しました。

こうして、日が経つにつれて、カリンガセーナーの娘は、神威によって前生の思い出を消されたまま、次第に大きくなりましたが、彼女の容姿の美しさもそれとともに増してゆきました。彼女は母親のカリンガセーナーや扈従の者たちから、マダナ・ヴェーガの娘であるからとて、マダナ・マンチュカーという名で呼ばれました。彼等は

「姫の美しさは他のすべての美人たちの容姿にまさるに相違ない。さもなければ、姫の前に出たとき、他の女たちが醜く見える筈はない。」

と言いました。

ヴァーサヴァダッター妃はマダナ・マンチュカー姫が殊のほかに美しいことを聞いて、見たいと思い、ある日、姫を自分の傍に連れてこさせました。そのとき、ヴァツァ王も、ヤウガンダラーヤナも、あたかも焔が蠟燭の燈心にまとわりつくように、姫が乳母の顔に抱きついているのを見ました。一座の人々は姫の容姿が比類なく美しくて、彼等の眼に甘露のようであるのを見て、姫はラティの化身に相違ないと思わない者はありませんでした。ヴァーサヴァダッター妃は世間の人々の眼に饗宴であるナラヴァーハナダッタ王子を連れてこさせました。すると、王子は蓮華の顔を輝かせて、マダナ・マンチュカーを見つめました。そのさまは蓮華の花が昇りゆく太陽の輝きを仰ぐにも似ていました。マダナ・マンチュカーも顔を輝かせて、眼を喜ばす王子を見つめて飽きませんでした。あたかも若いチャコーラ鳥の雌が美しい月を眺めて飽くことがないのと同じでありました。その後、この二人の幼児は眼ざしの鎖で結び合わされたかのように、一瞬といえども離れていることができませんでした。

さて、年月を経て、ヴァツァ王はナラヴァーハナダッタ王子とマダナ・マンチュカー姫の結婚は神の定めたところであると信じ、二人の結婚式の挙行の準備をしました。カリンガセーナーはそのことを知って大いに喜び、未来の娘婿に対する愛情から、ナラヴァーハナダッタ王子に心を注ぎました。ヴァツァ王は大臣たちと謀って、王子のために自分の宮殿に似た館を別に造営させました。そして、王は王子が皇太子としてふさわしい勝れた徳を具えていることを見て、諸々の調度品を集めて、吉祥の日を選んで灌頂式を行い、王子を皇太子の位に即かせました。まず、王

子の頭に父王の喜悦の涙がはふりおち、ついでヴェーダの聖典の偉大な祭詞で清められた聖地の水が灌がれました。王子の蓮華の顔容が灌頂式の水で洗われると、不思議にも天の四方の顔も清浄となりました。母のヴァーサヴァダッター妃たちが瑞祥の華鬘の花を王子に投げかけると、天もそのとき天上の花環の雨を降らせました。神々の太鼓のとどろきの競うように、喜び鳴らす楽器の反響が空中に響き渡りました。其処にいた人々は、誰一人として、灌頂された太子に拝礼しない者はありませんでした。

　それから、ヴァツァ王は自身の側近者の勝れた息子たちで王子の遊び友達であった者を召し、太子の側近としました。宰相ヤウガンダラーヤナの息子マルブーティを太子附の大臣に、将軍ルマンヴァットの息子ハリシカを太子附将軍に、また侍従イティヤカの息子ゴームカを太子の侍従に、王の司祭官の甥のヴァイシュヴァーナラとシャーンティ・ソーマの両名を太子附の司祭の職に任命しました。このように、これらの人々がヴァツァ王から太子の側近者に任命されますと、花の雨が天から降り、それにつづいて、

「これら側近の者たちは、太子のために一切を成就させるであろう。しかも、ゴームカは太子の最も信頼する側近となるであろう。」

と、天上の声が聞えてきました。ヴァツァ王は大いに喜んで、彼等に衣服や装飾品の数々を授けました。また、王が臣下の者たちに財貨の雨を降らせると、彼等は財貨の山に包まれて、貧乏という言葉は一語も聞かれなくなりました。そして、都城は、風にあおられ吹き流された絹の旗や

幟の列に呼び寄せられたかのように、集まってきた踊子や楽人の群で溢れました。カリンガセーナーは未来の女婿の祝典に参列しましたが、ヴィディヤーダラ族のラクシュミー（美の女神）が化身して、太子に侍ずいているかのようでありました。また、ヴァーサヴァダッター妃、パドマーヴァティー妃、カリンガセーナーの三人が歓喜して踊りましたが、この三人の女性（にょしょう）は王者の三威*さながらでありました。遊園の樹木は、からみつく蔓草が風に揺ぐにつれて、踊るかのようでありました。五感をもつ生物はなおさらでありました。

　こうして、灌頂式を終えました太子ナラヴァーハナダッタは、勝利の軍象に乗って、式場を出ました。都城の女たちは太子を見上げて、青色、白色、赤色の眼ざしを太子に注ぎかけましたが、そのさまはあたかも青蓮、炒米および紅蓮の供物を捧げるかのようでありました。太子は都城の守護神に参拝した後、楽人たちが讃頌を歌うなかを、大臣を従えて自分の館に這入りました。カリンガセーナーは、太子がみずから自由になしうるよりも遙かに多く、天上の食物や飲みものを贈り、また未来の女婿に対する愛情に打ち負かされて、太子の大臣、友人および扈従の者たちに、美しい衣服や神々しい装飾品を贈りました。このようにしてヴァツァ王たちすべての人々は、甘露を味わうにも似た素晴らしいその日を、大祝典のうちに過しました。

　こうして、夜になると、カリンガセーナーは娘の結婚のことを考えて、友のソーマ・プラバーのことを憶った。彼女がアスラのマヤの娘を心に思い浮べた瞬間に、ソーマ・プラバーの夫の偉大な智者ナラクーバラが美しい妻に語りました。

「カリンガセーナーが今日そなたに憧れて、そなたのことを思い浮べている。だから、カリンガセーナーのところへ行って、彼女の娘のために、天上の楽園を造ってあげなさい。」
と語った後、マダナ・マンチュカーの未来および過去の物語を聴かせて、妻のソーマ・プラバーをカリンガセーナーの許へ行かせました。ソーマ・プラバーは、久し振りに親友カリンガセーナーの頸を抱いて安否を訊ねた後、
「あなたは偉大な神通力のあるヴィディヤーダラ王と契を結びました。そして、あなたの娘はシヴァ神の恩寵によってラティの化身です。しかも、あなたの娘は、ヴァツァ王から生を享けたカーマの化身ナラヴァーハナダッタの妻になると、前生から定められています。この王子はヴィディヤーダラ族の神聖王国を統治するでありましょう。そして、あなたの娘は、たとい王子が将来多くの妃妾をもつことがあっても、その第一として尊敬されるでありましょう。あなたは前生に於いては天女であったのですが、インドラ神に呪詛されて、地上に化身したのです。残りの仕事を完全に成しとげた暁には、あなたは呪詛から解放されましょう。このことはみな、わたしの夫から聴きました。ですから、あなたは思い悩むことはありません。あなたはあらゆる幸福を享けるでしょう。わたしはあなたの娘のために、地下界にも、地上にも、また天上にもないような楽園を、此処に造りましょう。」
と言い、みずからの神通力で楽園を造営した後、別れを悲しむカリンガセーナーと別れて帰ってゆきました。こうして、その翌朝、人々は突然に天から地上に墜ちたナンダナ園のような遊園を

見て、驚嘆しました。
さて、ヴァツァ王はそのことを知って、妃妾を連れ、大臣を伴い、扈従の者たちを率いて、ナラヴァーハナダッタ王子と、この遊園に出御しました。遊園には、いつも花と実をつけた樹木が茂り、数々の宝玉の柱、壁、芝生や池沼があり、金色の鳥が飛びかい、神々しい芳香のある微風がそよいで、別の天国が神々の国から地上に天降ったかのようでありました。そのとき、ヴァツァ王はこの素晴らしい光景を見て、心をこめて歓待するカリンガセーナーに
「これはどうしたことなのですか。」
と尋ねました。すると、カリンガセーナーはみなの人々が聴いているところで、ヴァツァ王に答えました。
「造一切主ヴィシュヴァ・カルマンの化身で、偉大なアスラのマヤという方があります。この方はユディシュティラ王*とインドラ神のために、美しい都城を造営した方ですが、この方の娘にソーマ・プラバーという方があって、わたしの親友であります。この方が夜の間にわたしのところへ来られて、わたしの娘のために、深い愛情から、神通力によって、この神々しい楽園を造られたのです。」
と語りました後、マダナ・マンチュカーの過去および将来について、ソーマ・プラバーが告げましたことを、残らず王に話しました。そして、カリンガセーナーの語りましたことが、其処にいました人々が嘗て知ったところと一致することが判り、すべての人々は訝しく思う気持もなくな

り、殊のほかに喜びました。そして、ヴァツァ王は妃や王子と一緒にカリンガセーナーに歓待されて、その日はこの楽園で楽しく過しました。

その翌日、王が参詣のために神殿に行きますと、美しい衣服をつけ燦然たる装飾を帯びた多くの婦人を見ました。王が

「みなさんはどういう方ですか。」

と尋ねますと、彼女たちは

「わたくしたちは学識で、あの女たちは技芸です。みんな、あなたの王子さまのために、此処に参りました。わたくしたちは今から行って、王子さまの中に這入ります。」

と言って姿を消しましたので、ヴァツァ王は驚異の念にうたれて帰館しました。王はヴァーサヴァダッター妃と大臣たちにこのことを語り、彼等は神のこの恩寵を歓喜しました。

あるとき、ヴァツァ王の指図で、ヴァーサヴァダッター妃が琵琶を手にしていましたとき、ナラヴァーハナダッタが這入ってきました。王妃が琵琶を弾きますと、王子が母后に

「この琵琶は調子が狂っています。」

と、遠慮しながら言いました。父王が

「そなたが琵琶を弾いてみなさい。」

と言いますと、王子は琵琶を弾きましたが、天上界の楽師ガンダルヴァたちをさえ驚嘆させるほどでありました。このように、父王はあらゆる学識や技芸を王子にためしてみましたが、王子は

そのいずれにも通暁して、みずからあらゆることを知っていました。

ヴァツァ王は王子があらゆる才能を具えていることを知って、カリンガセーナーの娘マダナ・マンチュカーに踊りを教えました。彼女が諸〻の技芸に上達するにつれて、月輪が虧けるに従って海の波が荒くなるように、ナラヴァーハナダッタの心は落着かなくなりました。王子は姫が身振り巧みに歌い踊るのを見て喜びましたが、姫の表情や身振りの中には愛情の命令が表わされているかのようでありました。姫も甘露のような愛人の姿を一瞬でも見ないときには涙が溢れて、暁に露に濡れた白蓮の池に似ていました。ナラヴァーハナダッタ王子も、姫の顔を見ないではいられませんでしたので、いつも楽園に出かけてゆきました。カリンガセーナーも、未来の女婿に対する愛情から、傍に娘のマダナ・マンチュカーを連れてきて、王子を楽しませました。また、太子の侍従ゴームカは、主人の心を知って遊園にながく留まらせようとして、カリンガセーナーにいろいろの物語を話して聴かせました。王子はゴームカがこのように彼の心を摑むのに巧みなことに満足しました。まこと、仕える主人の心を洞察することは、その心を得る最高の方法である。ナラヴァーハナダッタは遊園の中にある音楽堂で、マダナ・マンチュカーに踊りなど数々の技芸を教えましたが、恋人が踊っているときには、あらゆる楽器を演奏して、勝れた楽人たちさえ恥ずかしく思うほどでした。王子はまた四方から集まって来ました学匠たちと討論して彼等を論破し、象、馬、戦車に通暁し、武器および矢に巧みであったばかりでなく、また絵画および書籍にも深い造詣をもっていました。学識がみずから夫に選んだナラヴァーハナダッタ王子は、

このようにして、少年時代を送りました。

あるとき、ナラヴァーハナ太子はゴームカをはじめとして側近の者たちをためそうと思い、自身はよく知っていたのであるが、彼等に王者の治政の要諦*をたずねました。彼等は互いに相談した後

「あなたはすべてを知っていられることですが、わたくしどもに御下問になられましたのですから、それを申しあげます。」

と言って、治政の精髄を語りました。

「王者はまず五感の馬に乗って馴らし、愛慾とか怒りなどの内部の敵を征服し、他の仇敵に勝利をうるために、まず自身を征服すべきであります。自身を征服しえない者は威力なく、どうして他人を畏服させることができましょうか。次に、その土地の生れであるということなど諸〻の長所をもつ大臣を選び、苦行を修めアタルヴァ・ヴェーダ*に通暁する熟達した司祭官を抱えるべきであります。そして、種々の口実を設けて、恐怖、貪欲、徳義および愛慾の点で、大臣たちを識別し、巧みにその心情を察知して、それぞれに適した仕事を委任すべきであります。また、大臣たちが国事を互いに論じているときに、その言葉が真実であるか、悪意から発せられたのか、愛情から言われたか、あるいは自己の利益に関したものであるかを弁別すべきであります。王者は真実に満足すべきですが、不真実はそれ相応に処罰すべきであります。王はまた密偵を用いて、彼等の所行を常に監視すべきであります。このように、覆われない眼で政事を見つめて茨を根絶

し、財政と司法とを掌握して、王位を確立させることを成就すべきであります。こうして、剛勇と王威と輔弼の三つの威力を具えて、自己と敵との間に於ける相違を考察して、他国の征服に心を用うべきであります。また、信頼するに足って学識がある賢明な人々と絶えず政策を相談し、しかもたとい決定した政策であっても、自己の判断に従って、微細な点に至るまでを検討して、不穏当なれば訂正すべきであります。談判、贈与などの手段に通暁して、国土の保持を期すべきであります。また、媾和および戦争などの六種の戦略*を用うべきであります。このようにして、王者が怠ることなく自己の国土と敵の国土とに注意するかぎり、王者は勝利をかちえて決して敗れることはありません。これに反して、王者が無智であり、愛慾や貪欲に盲目となるときは、王者に誤った道を示す悪い臣下の者たちに引きずられて、陥穽に落ちこんで滅ぼされます。このような悪人どもに遮ぎられた王者の許には、あたかも柵を廻らした稲に農夫が近づくをえないように、他の臣下の者たちは近づくことができません。と申しますのは、このような王者はこれらの悪人どもに秘密を握られて、その思いのままになるからであります。こうして、王者が善人悪人の差別ができないために、幸運の女神は失望して、このような王者から逃げ去ります。従って、王者は自己を克服し、刑罰を正し、人の差別を知るべきであります。そのようであれば、王者は国民の敬慕するところとなり、幸運の容器となりましょう。嘗て、シューラセーナという王は臣下の者のみに頼っていましたが、大臣たちが結託していましたので、王は彼等のために自由にされ、喰われてしまいました。王に忠誠な臣下があって、王がこの人を厚遇しようと思っても、大

臣たちはこの人に一本の藁さえ与えようとしませんでした。しかし、大臣たちに忠実な男があるときには、みずから厚く遇するとともに、王に勧めて、王の贈与に値しないこの男に贈与させました。王はこのことを見て、また次第にこの悪人たちの結託に気がつき、これらの大臣を策略を用いて離間させました。彼等が離間され、彼等の結託が破れると、彼等は互いに陰口をきき合うようになりましたので、王は他から誑されることもなく、王国を完全に治めました。また、ハリ・シンハという王がありましたが、この王は政略の本質をよく弁え、彼に献身する賢明な人々を大臣とし、国境には要塞を設け、財宝を集積していました。また、国民を心服させて経綸を行っていましたので、覇王から攻められましても、負けることはありませんでした。このように、判断と反省とが王国統治の心髄でありまして、これにまさるものは他にありません。」

などと、ゴームカたちはそれぞれに語りました。ナラヴァーハナダッタはこれら側近の者の言葉を信用して、臣下の者の為すべきことを考えるべきではありましたが、予測しえない運命を重視しました。

ナラヴァーハナダッタは座から立って、大臣たちを連れて、待ち焦れる愛人マダナ・マンチュカーに会いに行きました。その館について座につきますと、カリンガセーナーが挨拶もそこそこに、驚きの色を顔に浮かべて、ゴームカに言いました。

「王子が来られるのが遅れましたので、待ち焦れたマダナ・マンチュカーは王子の来られるのを見ようとして、館の露台に登りました。わたしも随いて登っていますと、一人の方が天から降

りて来られました。王冠をかむり、宝剣を携えて、天上の風貌をしていられましたが、この方が

『わたしはマーナサ・ヴェーガというヴィディヤーダラ族の王です。あなたがスラビダッターという天女で、呪詛のために地上に墜ちたことも、あなたの娘が天界の生れであることも、よく知っています。ですから、あなたの娘を頂きたい。このように似合わしい結婚はありません。』

と言いましたので、わたしは突然に笑い出してしまってこう申しました。

『将来あなたがたすべての転輪王となられるナラヴァーハナダッタが娘の婿になることは、神々の定められたところです。』

と申しますと、このヴィディヤーダラ王は稲妻の閃きのように、わたしの娘の眼をくらませて、天上に昇ってゆきました。」

と、カリンガセーナーが語りますと、ゴームカが言いました。

「ヴィディヤーダラ族の者たちは、われわれの主たるナラヴァーハナダッタ王子が生れられたとき、空中の声によって、王子が将来彼等の覇王となることを知り、直ちに王子を害しようとするに至りました。我執の強い者がどうして王者に有力な統御者を望むでありましょうか。ですから、王子はシヴァ神の命によって、化身したガナ（シヴァ神の扈従者の総称）たちに守護されています。このようにナーラダ仙が言われましたことを、わたくしは父から聴いております。従って、ヴィディヤーダラたちはわれわれに敵意を抱き、反抗するのです。」

というゴームカの言葉を聴きますと、カリンガセーナーは自分の身の上に起ったことを憶い出し、

その心配から、

「わたしのように、マダナ・マンチュカーが神通力で誑されないうちに、何故に王子は結婚して頂けないのでしょうか。」

と言いました。ゴームカたちは

「あなた御自身で、このことに就いて、ヴァツァ王に御催促なさいませ。」

と言いました。マダナ・マンチュカーに深く思を寄せているナラヴァーハナダッタは、彼女の顔を飽かず眺めて、その日を過しました。彼女の顔は満開の蓮華さながらで、眼はなかば開いた青い睡蓮のごとく、唇はバンドゥーカ*の花のように可愛らしく、胸はマンダーラ*の花の束のごとく、四肢はシリーシャ樹*のように華奢で、彼女の姿はまこと愛の神カーマが世界の征服のために作った五花の矢のようでありました。

カリンガセーナーは次の日みずからヴァツァ王の許に赴いて、娘の結婚について王に懇願しました。カリンガセーナーが退出しますと、ヴァツァ王は大臣を招集し、ヴァーサヴァダッター妃のいる前で、彼等に語りました。

「カリンガセーナーは娘の結婚を急いでいる。われわれは如何にすべきであろうか。世間はあの身分の高い女性を不貞な女と言うであろう。しかも、われわれは常に世間のことを顧慮しなければならない。嘗て、世間の噂によって、ラーマ王子は妃が貞節であったにも拘わらず、妃を捨てたではないか。また、ビーシュマ*は苦労して兄のためにアンバーを連れ去ったけれども、アン

バーがそれより以前に他の夫に身をまかせていたので、ビーシュマはしぶしぶながらアンバーを捨てたではないか。カリンガセーナーはみずから余を夫に選びながら、誑されてマダナ・ヴェーガに身をまかせた。そのゆえ、人々は彼女を非難するのである。されば、ナラヴァーハナダッタが彼女の娘を、自分にふさわしい妻として、ガーンダルヴァ式によって結婚するようにしよう。」

と、ヴァツァ王が語りますと、ヤウガンダラーヤナが申しました。

「陛下、カリンガセーナーはどうしてそのような不当なことを望みましょうか。彼女も、娘も、天界の人で、普通の女でないことは、しばしばわたくしの見たところですし、わたしの友人の賢明なブラフマ・ラークシャサの申したことであります。」

などと、その座にいた人々が互いに論じていますと、

「余の眼の火によって焼きつくされたカーマは、余によって再びナラヴァーハナダッタとして造られた。カーマの妻ラティの苦行に満足して、余はラティをマダナ・マンチュカーとして地上に生れさせた。ナラヴァーハナダッタは一切の後宮の佳人の首たる彼女とともに、余の恩寵によって敵を征服して、ヴィディヤーダラ族の覇王となろう。」

というシヴァ神の声が空中から聞えてきました。ヴァツァ王と側近の人々は、この尊いシヴァ神の言葉を聴いて、シヴァ神を礼拝し、喜んで王子の結婚式を挙げようと決心しました。そこで、王は予め真実を覚っていました宰相に賞詞を与え、天文博士たちを召して、吉祥な結果をもたらすべき黄道吉日を諮問しました。厚く贈与された天文博士たちは、黄道吉日は日ならずして到来

する、と上申しました。

　こうして、ヴァツァ王はナラヴァーハナダッタ王子の結婚式に必要な準備をととのえましたが、それは王自身の威光にふさわしく、その絶え間ない遂行のために、王の都城も全世界も震動した。結婚式の当日になると、カリンガセーナーは娘の父（ヴィディヤーダラ王マダナ・ヴェーガ）から贈られた天上の装飾品で娘を飾りました。また、ソーマ・プラバーも夫の命令で来ました。マダナ・マンチュカーは天上の花嫁衣裳で飾られて、一層愛くるしく見えました。まこと、月輪も昴星が従うとき、真に美しいではありませんか。天女の群はシヴァ神の命によって彼女を讃える歌をうたいましたが、その姿はマダナ・マンチュカーの美しさにかき消され、あたかも羞じらったかのようにその姿は見えず、ただ慶祝の歌声のみが聞えてきました。天女の群はガウリー女神（シヴァ神の妃パールヴァティーの別名）を讃えて、

　誠を捧ぐる者に恵み垂れたまう
　パールヴァティーよ、勝利あれ。
　汝は今日みずから来りて
　ラティの苦行を成就せしめぬ。

などと、天上の勝れた楽人たちと混声で歌いました。

　さて、ナラヴァーハナダッタ太子は美しく清らかな衣裳を着て、数々の楽器の音が満ちて、マダナ・マンチュカー姫の着座した結婚式場に這入りました。花婿と花嫁は其処で結婚式の目出度い諸儀式を滞りなく終えた後、あたかも諸王の頭に飾られた清純な宝燈に登るかのように、聖火の燃えさかる祭壇に登りました。もし月と太陽とが同時にスメール山の周囲を廻るとすれば、花婿と花嫁とが聖火を右遶するさまは、まことその地上に於ける模写といいうるほどでありました。結婚の祝典の音楽も、二人の結婚を祝う神々が空中に轟かす太鼓の音にうち消され、神々の降らす花の雨は都城の女たちの撒く供物の炒米を凌ぐほどでありました。

　心の寛いカリンガセーナーは、娘婿に宝玉を鏤めた金塊を贈って敬意を表しましたので、他の哀れな地上の王者はもとより、アラカー宮殿の主（財宝の神クベーラ）さえも、王子に比べれば貧乏と思われるほどでした。そして、このように永い間の相思の愛にふさわしく、楽しく嬉しい結婚の儀式を終えた花婿と花嫁は、清らかな数々の装飾をつけた侍女たちに取り囲まれて、歓喜に包まれた後宮に這入りましたが、その有様はまこと純粋で顕著な忠誠の心の溢れた国民の心に喰い入るような光景でありました。ヴァツァ王の都城には、あたかも海に美しい河川の流れこむように、勝れた軍勢に囲まれて、すべての人々の賞讃する勇気をもつ諸王が集まり来って、ヴァツァ王の威光に服従し、頭を垂れて、慶祝の贈物として携えて来た宝玉を捧げました。ヴァツァ王もまた、この大祝典に際して、臣下の者に黄金を頒ち与えましたので、彼の王国内に於いては、母親の胎内にいる胎児のみが黄金色でないほどでありました。また、諸方から集まってきた勝れた楽人や踊

子が満ち溢れて、この世は笛の音、舞踊、歌声、楽器の音でできているかのようでありました。また、都城カウシャームビーはこの祭典に際してみずから踊るかのごとく、風に揺れる旗や幟はまこと踊る際によじり動かす腕にも似て、装飾品で飾られたかのように遊女の化粧が華やかさを添えていました。

　このように、大祝典は永い間にわたって連日盛大に挙行され、友人も親族の者も庶民もすべて歓喜して、満足しない者はありませんでした。そして、ナラヴァーハナダッタ太子はマダナ・マンチュカーとともに、未来の栄光を冀いつつ、永らく願い望んでいましたこの世の幸福を享受しました。

訳　註

ナラヴァーハナダッタ王子の誕生

一〇　カウシャームビー——現在のアッラハーバード州の Kosam に比定される。漢訳仏典に見える憍賞弥。

〃　アーサヴァ酒——甘蔗の濃汁から作った酒、ラム酒の一種。

〃　パラーシャ樹——学名 Butea frondosa. 別名キンシュカ(kinśuka)。『インド文化』第一号口絵を見よ。

一一　パーンドゥ王——『マハーバーラタ』に名高いパーンダヴァ王家の祖先。本書に記されるパーンドゥ王の物語は『マハーバーラタ』第一巻(アーディ・パルヴァン)に詳しく述べられる。

一二　カーマとラティ——カーマは愛の神、シヴァ神の激怒を被り、その眼から発した光によって肉体を焼きつくされた。爾後、アナンガ「身体なき者」と称せられた。この物語は『マハーバーラタ』では簡単に言及されているに過ぎないが、古典文学の詞宗カーリダーサ(四、五世紀)の叙事詩『軍神の誕生』(クマーラ・サムバヴァ)の冒頭に詳しく記されている。ラティはカーマの妃の一人。

一三　ヴィディヤーダラ——ヒマーラヤ山中に住み、シヴァ神に仕え、神通力(ヴィディヤー)を持つ(ダラ)という神話上の種族。

〃　転輪王——原語チャクラ・ヴァルティン。チャクラ(輪宝、現在の戦車にあたる)をまかして四方を征服する覇王の義、転じて正法を以て全世界を統治する理想的な王者とされる。

一五　パータリプトラ——古代に於ける東インド第一の都会。現在の Patna 近郊にその遺跡がある。前五世紀の頃からマガダ国の首都で、漢訳仏典には屢〻「華氏城」と記される。

一八　カニヤークブジャ——現在の Kanauj. 七世紀のハルシャ王の首都。漢訳仏典に見える曲女城。

一九　金剛——原語ヴァジラ。インドラ神の武器とされる。

二〇　マーラヴァ——現在の Malwā.

〃　サラスヴァティー河——ヒンドゥ教徒の聖河とされるが、比定については問題がある。

二一　両眼が聖火のために赤く——ピンガリカーとは「赤い眼をした女」の意。

二六　ジームータヴァーハナの物語——この物語はインド文学史上著名で、七世紀のハルシャ王の戯曲『竜王の喜悦』(ナーガーナンダ)はこの物語を劇化したものである。本書にももう一度記され(第十二篇第十三章)、また十一世紀のクシェーメーンドラが仏教説話を集めた『アヴァダーナ・カルパラター』の末尾に、その子ソーメーンドラが増補した『ジームータヴァーハナ・アヴァダーナ』も、この物語と同巧異曲である。同じくクシェーメーンドラの作で、われわれの『カターサリット・サーガラ』と同系の異本である『ブリハット・カター・マンジャリー』にも、この説話は二度見られる。この説話は起源的には仏教的であると考えられる。

二八　マラヤ山——一般には、現在のマラバール海岸地帯にある西ガッツ山脈の一部に比定されるが、サンスクリット語マラヤ malaya はドラヴィダ系言語で「山」を意味する malai に由来すると考えられ、恐らく北方のヒマーラヤ山に対して南方の山系の一部をさすと思われる。

〃　シッダ——シヴァ神の扈従の一、八種の神通力をもつといわれる半神。

三〇　ヴァッラビー——西インドのカーティヤーワール半島に五世紀頃から栄えた商業地。七世紀にインド旅行をした玄奘は、その旅行記『大唐西域記』の中に、この都市の繁栄を伝えている。

四〇　カーランジャラ山——ブンデルカンド地方にある聖山、現在の名はキリンジェル。

四二　鳥王ガルダと竜族の物語——カドゥルーとヴィナターの物語は既にヴェーダ文献に見え、『マハーバーラタ』第一巻の中に詳しい。カドゥルーとは「赤褐色の女」の意で「大地」を意味し、ヴィナターとは「彎曲した女」の意で「天蓋」を意味する。

四二　乳海を攪拌——『マハーバーラタ』第一巻に語られる神話で、同じく『ラーマーヤナ』にも記され、殊に諸種のプラーナ文献に詳しく記述される。神も鬼霊も互いに協力して、不死の神酒アムリタ(甘露)を得るために、マンダラ山を攪拌用の棒、竜王ヴァースキを縄として乳海を攪拌した。まず、泡の中から月が現われ、ついで幸運と美の女神ラクシュミー、神酒スラーなどが現われ、最後にダンヴァンタリ神がアムリタを容れた白玉の瓶を持って現われたという神話。

四三　クシャ草——祭典に用いられる神聖な草で、尖端がとがった長い葉のある Poa cynosroides に比定される。

五三　習気——原語ヴァーサナー。サンスカーラと同義で、心の中に無意識に残る前生の所行すなわち業の影響。

五五　余力——原語サンスカーラ。前項を見よ。

五六　アルカ樹——学名 Calotropis giganta. かなり大型の葉が祭祀に用いられる。

〃　シャミー樹——Mimosa suma に比定される。聖火の点火に使用される。

五七　愛の神が身体を持って生れた——一一二頁註を見よ。

五九　六政略——王者の行うべき六種の政略。平和、戦争、進軍、宿営、軍を二分すること、有力な王者の援助を得ることの六種。

マダナ・マンチュカー姫の物語

六二　ヴィタスター河——現在の Jhelum 河。

〃　タクシャシラー——現在パキスタンのラーワルピンディの北西サライカラの近郊に遺蹟がある。古代に於いて、北西インドの交通の要衝で、学芸の中心地であった。

六八　ティロッタマー——シヴァ神はこの結果四面となるに至ったという。『印度』三二六頁参照。

〃　ヴィシュヴァーミトラ仙とメーナカー——『マハーバーラタ』一・七一・二二および『ラーマーヤナ』一・六三・五を

見よ。

六八　ヤヤーティ王とシャルミシュター――『マハーバーラタ』一・八一・一一および二・一一・一七を見よ。

六九　コーシャラ国――コーサラともいう。現在のウッタル・プラデーシュの中部にあった古代の王国。アヨーディヤーを首都とした。

〃　アルンダティー――プレヤデス(昴宿)の一つの星、アルコール星。インド古代神話に於いては、ヴァシシュタ仙の妻とされ、貞節の亀鑑とされる。従って、古代インドの結婚式に於いては、花嫁が永く夫の家に留まることを祈って、この星に祈念する。岩本裕『インド文化史の課題』九一頁参照。

七一　クンティー姫とドゥルヴァーサス仙――『カターー・サリット・サーガラ』(一、挿話一一(一一三頁以下)を見よ。

七二　クンディナ――ヴィダルバ國の首都。現在のベラール地方の Kondavir に比定される。

七三　旃陀羅――原名チャンダーラ。賤民の一種。

〃　ニシャーダ――賤民の一種。

七五　ウッジャイニー――現在の Ujjein. 古代マーラヴァ地方の首都で、古代末期に於いては文芸の中心地であった。

〃　アヴァンティー国――マーラヴァ地方(現在の Mālwā)の古名。

〃　カイラーサ山――インド神話に著名で、ヒマーラヤ山中にあると考えられた。富の神クベーラの住処、シヴァ神の楽園のあるところとされる。

〃　翅をもつ山が海に逃げこんだ――マイナーカ山はインドラ神が他の山々の翅をむしりとろうとしたとき、海に逃げこんで、その翅をむしりとられずにすんだという(『マハーバーラタ』七・三・九・一二)。

〃　バーナ――アスラ王の名、シヴァ神の寵臣。ヴィシュヌがバーナの牛をかくしたので、バーナは怒ってヴィシュヌと戦った。このバーナの戦闘については、『ハリ・ヴァンシャ』一七五―一九〇章に詳しい。

七八　ヴェーダ――バラモン教の聖典で、インド最古の文献。辻直四郎『ヴェーダとウパニシャッド』二五―三八頁に詳しい。

八〇　ローハ・ナガラ――位置不詳。

八三　歓喜の権化たる息子は悲哀の塊たる娘に遙かに勝る――宗教的なインド人にとって、祖霊を祀り、家庭の祭事を行うべき男児の出生が特に望まれた。そのためにインド人の日常の重要祭事の中に、妊娠の際に男子の出生を祈願するプンサ・ヴァナの儀式があったし、また法典には、女児のみ生む妻は他の女と代えてよいという規定があった(例えば、『ヤージュナヴァルキヤ法典』一・七三など)。

〃　輪廻――原語サンサーラ。車の輪が廻ってはてしがないように、一切の生類が煩悩と業とによって迷の世界を生れかわり死にかわって巡り、とどまらないこと。

〃　仏陀――原語ブッダ。「覚れる者」の意。

〃　無上の正等覚――仏陀の仏陀たるゆえんである平等円満な智慧の悟。

八五　忍辱仙の物語――怒りを制御した苦行者の物語は仏教説話に多く見られる。『ジャータカ』三一三の「忍辱仙本生」はその代表的作品で、後代の譬喩文学にも屢々見られる。例えば『ブッダ・アヴァダーナ』に見える「忍辱本生」は本篇の物語と同系で、王が怒って、聖仙の二本の指を斬り落し、王はその途端に燃えるような熱を感じたとなっている(Mitra, R.: The Sanskrit Buddhist Literature, p. 55)。

八六　梵――宇宙の根本原理で、梵(ブラフマン)と個人の自我(アートマン)の冥合が解脱であると考えられた。辻直四郎、前掲書、一四七頁以下参照。坂井尚夫『インドの宗教』二八―二九頁。

八八　蟹のごとくに父を食う王子――カウティルヤの『アルタ・シャーストラ』(実利論)に、王者たる者は王子に対しても身を護るべきであるとして「その誕生のときから王を看視すべきである。何となれば、王子は蟹と同じく、その生みの親を食うからである」と、説いている。

〃　クンティ・ボージャ王――クンティ族のボージャ王の意。ヤーダヴァ族の貴族で、後にパーンドゥ王の妃になったクンティーの養父。

八八　チトラ・クータ山——現在のブンデルカンド地方のバンダーの南東約五〇マイルに位する Citrakote または Catarkot 山およびその地方。

八九　スメール山——須弥山、この世界すなわちジャムブ・ドヴィーパ(閻浮提)の中心にありと信ぜられた山。

九〇　メーナカー、ヴィシュヴァーミトラ、シャクンタラー——ヴィシュヴァーミトラ仙がヴァシシュタ仙との争いに敗れ、数千年の苦行を積んだ。これを見て怖れたインドラ神は、神々と相談して、天女メーナカーをつかわして、ヴィシュヴァーミトラ仙の苦行を妨げさせた。五蔵を抑えた仙も遂にメーナカーに誘惑され、恋の奴となった。そして、女児が生れたが、メーナカは嬰児を森の中に捨て残して天に帰った。嬰児は、鳥(原語シャクンタ)に哺み守られたので、シャクンタラーと呼ばれた。シャクンタラーはカンヴァ仙に養われ、後にドゥシャンタ王の妃となる。カーリダーサの戯曲『シャクンタラー姫』の主人公。『マハーバーラタ』一・六八—七五、『パドマ・プラーナ』三・一。

九二　プラマドヴァラー——天女メーナカーとガンダルヴァのヴィシュヴァーヴァスの間に生れた。婆羅門ルルとの物語は『マハーバーラタ』一・八—一二に詳しい。

〃　トリシャンク——アヨーディヤーの王。人間のまま天に昇りたいと思い、ヴァシシュタ仙に大祭を司祭するよう懇請した。ヴァシシュタ仙が拒んだので、仙の百子を用いた。しかし、彼等は王を呪詛し、ために王はチャンダーラ種に墜された。ヴィシュヴァーミトラ仙が彼のために祭祀を行い、神々を招請したが拒否された。怒った仙はトリシャンクを天国に連れていったが、神々から放り出された。墜ちる途中に、ヴィシュヴァーミトラ仙が彼を摑えたので、トリシャンクは宙に釣られた。これが南十字星であるという(『ラーマーヤナ』一・五七)。仏教文学では、トリシャンクはチャンダーラ王として著名である。特に『シャールドゥーラカルナ・アヴァダーナ』。

九五　プシュカラヴァティー——現今の Hasht-nagar.

〃　アヒチャットラ——現在の Bareilly 地方。

〃　イクシュマティー河——クル・クシェートラ地方の河川。

九八　ジーヴァ——原意は「生き永らえよ」の意であるが、ここでは禁厭の言葉である。『カーマ・スートラ』にも、情夫が嚏をしたり、突然に大声をあげたり、急に驚いたりした場合には、遊女は「ジーヴァ」というべきである、と記している。

九九　ビシャーチャと婆羅門の娘の物語——この物語はラ・フォンテーヌの Le petit diable de Papafiguire と同巧異曲であり、またラブレーの『ガルガンチュア物語』第四巻第六七章にも、同様の物語がある。

〃　ヤジュニャ・スタラ——位置不詳。

一〇三　プリトゥ王——この物語は『ハリ・ヴァンシャ』一・四—六に詳しく述べられている。

一〇五　ダイティヤ——アスラ族はディティの子と見做され、ダイティヤといわれる。アスラは本来 asu-ra (神秘的生命を与える者)の意であるが、a-sura (非天)と解され、神に対立するものとして、常に神の敵とされる。

一一〇　シーター妃——大叙事詩『ラーマーヤナ』の主人公ラーマ王子の妃。シーターが魔王ラーヴァナにかどわかされたとき、猿王スグリーヴァがラーマを援けた。ラーマは猿軍の援助を得て、シーターをラーヴァナの居城ランカーから救出することができた。

一一七　ヴァスダッタ城——位置不詳。

一二二　月光石——月光が凝結してできたという宝玉で、月の光を浴びて溶けるという。

一二四　プラジュナプティー——原語は「予見」「予知」の意。来世を予見する神通力をいう。

一二五　リシャバ山——位置不詳。

〃　ガーンダルヴァ式の結婚——親の許諾をえないで、当事者相互の合意により、何等の儀式を行わない結婚形式。『カーマ・スートラ』が最上の結婚形式と賞讃する恋愛結婚。

一二六　カーラ・クータ山——位置不詳。

〃　シュラーヴァスティー——現在のウッタル・プラデーシュの Sahet-Mahet. ゴータマ・シッダルタ(釈尊)の時代に於けるコーサラ(憍薩羅)国の首都。

一二六 プラセーナ・ジット――前項のコーサラ国王。漢訳仏典にいう波斯匿王。
〃 クル族とパーンダヴァ族――大叙事詩『マハーバーラタ』に於いて対立する二王家。
〃 アムバー――カーシ王の娘、ヴィチトラ・ヴィールヤ王妃となったが、王が夭死の後、王の異父弟ヴィヤーサ仙と契ってパーンドゥ王を生む。パーンダヴァ族はこのパーンドゥ王の子孫。
〃 アムビカー――アムバーの姉妹、同じくヴィチトラ・ヴィールヤ王に嫁ぎ、その死後ヴィヤーサ仙と契を結びドゥリタ・ラーシュトラ王を生む。ドゥリタ・ラーシュトラ王はクル族の総帥。
一二八 アマラーヴァティー――インドラ神の住処。
〃 アルジュナ――パーンドゥ王の第二子。射技に長じていた。
〃 アビマヌユ――アルジュナとヤーダヴァ族のクリシュナの妹スバドラーの子。
〃 パリークシット――アビマヌユとマツヤ国王ヴィラータの王女との子。
〃 ジャナメージャヤの蛇祭――『マハーバーラタ』一・三一三―五八に詳し。
〃 シャターニーカ――プラーナ文献に名高いが、この王以後の系譜は諸伝一致せず。
〃 月種族――原名チャンドラ・ヴァンシャ。イクシュヴァークの子孫でアヨーディヤーの王統である日種族(スールヤ・ヴァンシャ)に対立する王統で、クル族およびパーンダヴァ族の王家を含む。
一三〇 ウシャー――アスラ王バーナの娘。アニルッダとの恋愛物語は本書一四〇頁以下を見よ。なお、『ハリ・ヴァンシャ』一七五―一九〇章に詳し。
〃 シャクンタラー――九〇頁註参照。カンヴァ仙の庵で育てられたシャクンタラーは猟に出て迷いこんだバラタ国王ドゥシャンタとガーンダルヴァ式の結婚(一二五頁註)を行った。これがカーリダーサの戯曲『シャクンタラー姫』の発端である。
一三一 鳥と椰子の実の物語――鳥が今にも落ちそうな椰子の実にとまり、そのために実が落ちて鳥を殺したという寓話。今もなおインドに知られていて、既に古く西紀前二世紀のパタンジャリの著書に言及されている。「偶然に」を意味する比喩。

一三三 婆羅門ハリ・シャルマンの物語――グリムの童話集の『物識り博士』と同巧異曲の物語である。「解題」三を見よ。
一四一 ドヴァーラヴァティー――クリシュナの首都。ドヴァーラカーともいう。
〃 アニルッダ――クリシュナの子プラデュムナの子。
〃 ハリの孫――クリシュナはヴィシュヌ神(ハリ)の権化とされる。従って、クリシュナの孫アニルッタはハリの孫と記される。
一四二 マンダラ山――神話的な山の名。乳海の攪拌に際して、攪拌用の棒とされた。
一四四 チャコーラ鳥――鷓鴣の一種、月光で生命をつなぐといわれる。
一四七 ナフシャ――ヤヤーティー王の父で、偉大な征服者とされる。インドラ神の王国の簒奪は『マハーバーラタ』に屢〻記されているが、特に五・一一が詳しい。ナフシャはシャチを妻に望み、聖仙を車に縛りつけ、アガスティヤ仙の頭を踏みつけるなどの乱行をした。その結果、アガスティヤ仙に呪詛されて、地上に蛇として一万年の歳月を送らねばならなかった。
一五二 ブラフマ・ラークシャサ――羅刹の一で、不聖な生涯を送った婆羅門が墜ちたものと信ぜられた。
一五四 アンタル・ヴェーディー――ガンジス河とヤムナー河に挟まれたドアーブ地方。
一六〇 カダリーガルバ樹――バナナの一種。
〃 ドゥローナの妻クリピー――ドゥローナはクル族同盟軍の第二の指揮者。クリピーはシャンターヌ王に発見され、同情心(クリパー)から王によって養育された。
〃 マドヤ・デーシャ――インドの中国地方。ヒマヴァット山脈(ヒマーラヤ山)とヴィンディヤ山脈との中間、聖河サラスヴァティーが沙中に没する地点より東方、ガンガー河とヤムナー河の合流点プラヤーガの西方にある地方(『マヌ法典』二・二一)。

一六一　ドゥシャンタ王がカンヴァ仙の娘シャクンタラーを妻とした——二二四頁および二二六頁の「シャクンタラー」註を見よ。

〃　アルギヤ——arghya. argha ともいう。元来は「客人をもてなすための水」の意で、わが「阿(閼)伽の水」はこの語に由来する。

一七三　ゴーカルナ——マラバール海岸にある霊場地。

〃　パンチャ・ティールティー霊場——位置不詳。

〃　ナーラーヤナ天——ヴィシュヌ神の異名。仏教にいう那羅延天。

一七九　王の屍を焼く火に這入る——寡婦焚死の風習(サティー)を意味する。

一八〇　ヴィラータ王——マツヤ国王。アルジュナのヴィラータ王廷に於ける事件は『マハーバーラタ』第四巻(ヴィラータ・パルヴァン)に詳しい。

一八二　ヴィディシャー——東マーラヴァ地方の中心地。現在の Bhilsa.

一八五　ディーナーラ——金貨の単位。ラテン語 denarius の転訛形。西暦二・三世紀の頃、アラビア海を通ずる東西貿易の結果、ローマ貨幣が多量にインドに流入した。その貨幣がそのままインドで通用したのに基づく。

一九三　シャクンタラーをドゥシャンタ王が忘れた——ドゥシャンタ王とガーンダルヴァ式結婚をしたシャクンタラーは、ドゥルヴァーサス仙の呪いで王の思い出の印の指環を失い、そのために王から忘れられる。シャクンタラーは泣く泣くカンヴァ仙の庵に帰り、王子を生む。偶然のことで指環を手に入れたドゥシャンタ王はシャクンタラーを思い出し、カンヴァ仙の庵に馳せて、再び目出度く結ばれる。辻直四郎訳『シャクンタラー』(昭31刊)を見よ。

一九六　チェーディ——現在のブンデルカンド地方。

二〇五　王者の三威——王者が個人的に抜群であること、良き輔弼および精力の三つをいう。

二〇七　ユディシュティラ王——パーンドゥ王の第一子、パーンダヴァ族の統領。

二一〇　王者の治政の要諦——古代インドの学術の中に『アルタ・シャーストラ』(実利論)がある。前三世紀の初めマウリヤ朝チャンドラグプタ王の宰相と伝えられるカウティルヤの『アルタ・シャーストラ』がその代表的作品で、内容は王道論、行政各論、法律、外交、軍事など古代インドの専制王国の政治論が詳細に論ぜられている。中世には各種の『ニーティ・シャーストラ』(政治論)が展開した。本書はその精髄を要領よく、また判り易く述べている。

〃　アタルヴァ・ヴェーダ——ヴェーダ聖典の一で、吉祥増益と呪詛調伏の呪法に用いられる呪文・祈頌の集録。

二一一　六種の戦略——媾和、戦争、進撃、宿営、軍隊の二分、強力な王者の庇護・援助を求めることの六種をいう。カウティルヤ『アルタ・シャーストラ』の第七巻に詳しく説明されている。

二一四　バンドゥーカ——学名 Pentapetes phoenicea.

〃　マンダーラ——学名 Erythrina indica.『インド文化』第一号口絵を見よ。

〃　シリーシャ樹——学名 Acacia sirissa.

〃　ラーマ王子は妃を捨てた——シーター妃が悪魔の王ラーヴァナの手から救出されたとき、民衆はシーターの貞操を疑った。ラーマは国の女性の貞操観念に悪影響を与えることを怖れ、遂に意を決して、シーターを森に捨てる。しかし、数年の後、ヴァールミーキ仙の援助でその疑いは晴れ、二人は天国に於いて再び結ばれる。

〃　ビーシュマ——クル国王シャンタヌの子、クル族の総帥で、クル軍の最初の指揮者。

解題

一、総　説

本書には『カター・サリット・サーガラ』第四篇の「ナラヴァーハナダッタの誕生」と第六篇の「マダナ・マンチュカー姫」の二篇を収めた。前者は『カター・サリット・サーガラ』(一)に続く物語で、ヴァツァ国王ウダヤナとヴァーサヴァダッター妃との間に生れた唯一人の王子ナラヴァーハナダッタ太子の誕生に至る経緯を描くが、この物語自体はそれほど興味深いものはないが、挿入されている「ジームータヴァーハナ（乗雲太子）の物語」（本書二六頁以下）はインド文学史に著名な物語で、種々の形で各種の作品に採録され、しかも仏教的であることが注目される（二一〇頁註を見よ）。

後者はナラヴァーハナダッタ太子の妃となるマダナ・マンチュカー姫の祖父タクシャシラー王カリンガダッタの物語に始まり、姫の母カリンガセーナーの生いたち、姫の誕生の経緯、姫とナラヴァーハナダッタ太子の結婚に至るまでの物語がインド的な雰囲気の中に縷々と述べられる。その中に点綴される挿話は実に千変万化の妙を示し、冒頭カリンガダッタ王の物語に見られる「商人の息子ラトナダッタの回心の物語」（本書六三頁以下）はインド社会に於ける仏教の地位に

関して貴重な示唆を与えるものとして注目され(『印度学仏教学研究』第五巻第二号所載の拙稿『サンスクリット文学に於ける仏教』(一)参照)、また「ピシャーチャと婆羅門の娘の物語」(本書一〇〇頁以下)と「婆羅門ハリ・シャルマンの物語」(本書一三三頁以下)はヨーロッパの作品にパラレルな説話があって比較文学的に興味深いものがある。また、「猫鼬と鸚鵡と猫と鼠の物語」(本書一八二頁以下)は動物説話として珍らしく、また「王と床屋の女房の物語」(本書一六四頁以下)は庶民説話として面白い。さらに、挿話ないしは挿句として大叙事詩『マハーバーラタ』あるいは『ラーマーヤナ』などに詳しい古代の聖仙、英雄の物語が豊富に引用されている。この最後のものはインド古典文学作品を知る上に極めて重要な意義をもつものであり、またインド人の世界観などを探るのに重要な資料であるが、本書に於いてはその全貌を記す余裕もなく、僅かに「訳註」に於いて、その所在、参考文献に言及するにとどめた。以下には、前記の挿話の一二について、その文献学的ないしは文化史的意義について解説を加えることにする。

二、『カター・サリット・サーガラ』と仏教説話

前述のように、本書に収録されている説話の中に、仏教説話があることは注目すべきことである。その他、「人生を厭うて世を捨てた七人の王女の物語」(本書八三頁以下)、その中に挿入される「商家の若妻に端麗な容姿を驚嘆されて、自身の眼を抉った王子の物語」も、仏教説話であることは疑いえない。さらに、『カター・サリット・サーガラ』全篇の中には、いくつかの仏教説話

が含まれている。例えば、第六十四章に含まれる一連の物語に於いて、その主人公が女に貞節のないことを知って出家することが記されているが、これらは明かに仏教的であり、さらに第六十五章に於いては、二度も主人公が「菩薩の部分的化身」(bodhisattvāṁśa-)と記されている。また、第七十二章では、六波羅蜜(sat-pāramitā)の説明に、一連の菩薩物語が物語られている。ここに言う菩薩とは仏教の究極の目的であるさとりを求めて、衆生に恩恵を与え、宗教的実践を修行して、未来に仏のさとりを開こうとする者の意で、ここに修行される宗教的実践として六波羅蜜が説かれるのであるが、六波羅蜜とは

布施(dāna)　完全な物質的・精神的な恵み。
持戒(śīla)　教団の掟(戒)を完全に守ること。
忍辱(kṣānti)　完全な忍耐。
精進(vīrya)　ひたむきにつとめ励む行為。
禅定(dhyāna)　心を一つの対象に専ら注ぐこと。
智慧(prajñā)　すべての事物や道理を明かに見抜く深い智慧。

の六種で、これらの説話は明確に仏教特に大乗仏教の教理に基づくことが知られる。また、第四十一章に見られる「チトラーユス王と宰相ナーガールジュナの物語」に於いては、宰相ナーガールジュナは「菩薩の化身の生れかわり」とされ、布施・持戒を行し、深い智慧を有したと記され、生れ変って「仏陀と同じ道を歩んだ」とされていて、明かに仏教徒の所伝に基づいたことが知ら

れる。茲に興味あるのは、ナーガールジュナの名はインド仏教史に著名で、西暦二世紀の頃に南インドに出た学匠で、八宗の祖とされるが、この説話は七世紀にインドに求法旅行をした玄奘の『大唐西域記』巻十に竜猛菩薩に関する伝説として記されているところである。すなわち、竜猛とはナーガールジュナ(Nāgārjuna)の訳であるからである。しかも、両者ともラサーヤナ(不老不死の霊薬をつくる学術)の大家と記され、それはまたインドに於ける科学史に一つの問題を投ずるからである。詳しくは、拙著『サンスクリット読本』四五—四七頁を見よ。

　このように、われわれの『カター・サリット・サーガラ』には種々の仏教説話が、あるいはそのまま、あるいは変形して、収載されているのであるが、その中でも文化史的に重要な意義のあるのが、「商人の息子ラトナダッタの回心の物語」である。前述のように、インド社会に於ける仏教の地位に関して貴重な示唆を与えるからである。すなわち、ラトナダッタが父を非難する言葉によれば、仏僧ないし仏教信者は沐浴などの宗教的義務を怠り、勝手気儘な時間に食事をし、頭髪をのこらず剃りおとしているばかりでなく、腰部にボロをまとうているに過ぎなかったし、また仏教は卑賤な生れの者たちが住居を得るために信者になる宗教であったことが知られる。それと同時に、父の言葉によれば、仏教は一切の者に無畏を与える教えであり、不殺生を第一の特色とし解脱を授ける教えであった。また、王の言葉によれば、仏教は「生類を死の恐怖から守る法」であったとされ、わが学界で問題とされているような深遠な(?)教義などは問題でなかったことが知られる。要するに、仏教がインド古代ないし中世初期の社会に於いてはそれほど大きな位置

を占めていなかった事実を示す一齣であり、七世紀のマヘーンドラ・ヴィクラマヴァルマン王の『マッタ・ヴィラーサ』(Mattavilāsa)「酔っぱらいの悪戯」などとともに、インド文化史あるいは社会史の面から見た仏教徒に関する貴重な、しかも興味深い資料であるといわねばならぬ。

三、「婆羅門ハリ・シャルマンの物語」とグリムの「物識り博士」

　この「婆羅門ハリ・シャルマンの物語」とグリムの『子供と家庭のための童話』Kinder＝und Hausmärchen (1812—14) 第九十八話の「物識り博士」Doktor Allwissend の物語との類似は、余りにも著しい。「物識り博士」の物語の梗概は次の通りである。

　クレープス(海老)という貧乏な百姓が、町の博士の入智慧で、雄鶏を書いたABCの本と衣服を買い、『余は物識り博士なり』と広告した。たまたま、お金持の殿さまが金を盗まれ、呼ばれて女房のグレーテと一緒に出かけた。会食の食卓についたとき、最初の召使が御馳走を持ってきたので、百姓は女房をつついて

　「グレーテや、これが最初のだよ。」

と言った。百姓は「この男が最初の料理を持ってきたのだよ。」と言うつもりだったが、召使は金を盗んでいたので、「こいつが最初の盗人だよ。」と言われたと思った。第二、第三の召使も同じ目に遭い、震えあがってしまった。四番目の召使は、お殿さまの命令で、布皿で覆

うた皿を運んできた。お殿さまが
「この下に何があるか言いあてて、ひとつ腕前を拝見させて頂きたい。」
と言った。その品は海老(クレープス)だったのであるが、百姓はどうしてよいか判らなかったので
「やれやれ、可哀想なクレープス(自分の名)め。」
と洩らすと、お殿さまは言いあてたのに驚嘆した。召使たちは心配して、百姓を呼び出し、自分たちがお金を盗んだことを白状し、名前を主人に言わないことを条件に大枚の謝礼を約束しただけでなく、隠匿した場所も教えた。百姓がお殿さまに
「では、お金が何処に隠されているか、ひとつ、わたしの本で探してみましょう。」
と言って、ABCの本を開いて雄鶏を探したが、見つけられなかったので
「お前は中にいるくせに、出てこなくちゃ駄目だよ。」
と言った。すると、博士がもっと外のことを知っているかも知れないと危惧して、煖爐の中に忍びこんでいた五番目の召使が、自分のことを言われたと思い、慄えあがって外に飛び出してきて
「あの人は何でも知っておいでじゃ。」
と叫んだ。物識り博士はお殿さまにお金の在り場を教えたが、誰が盗んだかは言わなかったので、両方から沢山のお礼を貰った。

こうして、両者のモティーフの類似は著しいが、両者の地理的距離は余りにも遠い。しかし、リトゥアニア、モーコの所伝を経て、両者は結びつけられることが指摘されている。モーコの所伝は『シッディ・キュル』Ssiddi-Kür(神通力を授けられた死者)という物語集の第四話に見える。このモーコの物語集はインドの物語集として著名な『ヴェーターラ・パンチャヴィンシャティカー』Vetālapañcaviṁśatikā(憑屍鬼二十五物語)のモーコ語伝本とされるが、インドの原典の忠実な訳本ではなく、インドの原典が二十五篇の物語を含むに拘わらず、このモーコの物語集は十三篇の物語しか含まず、また枠になっている物語は互いに一致するが、他は殆んど一致しない。しかし、そのすべてインドの物語に源流が索められるのであって、そのインド起源であることは疑いえない。

さて、モーコ所伝の『シッディ・キュル』に於いては、水差の中に入れられた蛙、あるいは布巾で蔽われた皿に載せられた海老のことは省略されており、また他の事件もかなり変っている。王の宝物あるいは殿様のお金の代りに、国の繁栄を左右するという魔法の宝石が問題となっている。しかも、それは盗まれたのではなく、王女が見失うのである。また、インド所伝の馬のモティーフの代りに、悪霊に取り憑かれて病気になった皇帝の治療ということが問題になっている。

次に、リトゥアニアの所伝では、主人公は貧乏な田舎者である。この所伝には、われわれの「婆羅門ハリ・シャルマンの物語」と同じく、馬を盗み出す事件が語られている。この田舎者の第二

の手柄は奇蹟的な治療で、『シッディ・キュル』の所伝と一致する。さらに、第三の殊勲は盗まれた宝の発見であるが、この場合宝は三人の召使が盗み出すのである。主人公の貧乏な田舎者が部屋にひとりでいるとき、三人の召使は外で耳を澄ませている。時計が一時をうつと、主人公は「一つだ。」と言う。二時をうつと、「二つだ。」と言う。三時をうつと、「これで三つだ。」と言う。三人の召使は怖ろしくなり、白状して、暴露しないように頼むのである。主人公が厚くお礼を貰ったことは言うまでもない。

また、このモティーフは十六世紀のヘンリクス・バベリウス Henricus Baberius の『機智物語』Facetiae の中に見られるが、この所伝では、貧乏な炭焼男が主人公である。この男は考えるために三日間の猶予を求める。王はこの男に素晴らしい食事を与える。そして、最初の泥棒が窓の外に立っていると、夕方この男は「一つ終った。」と言う。次の日、第二の泥棒が来て、耳を澄ましていると、炭焼男が「二つ終った。」と言う。三番目の泥棒も同じ目に遭う。そこで、皆が白状するのである。

これらの物語に見られるいくつかのモティーフは、あるいは単独に、あるいは種々に組合わされて、各地の民間説話に見られる。インド内地はもちろん、近東地方にもその跡が辿られるが、フランスの民譚にもあり、またフランス中世のファブリオーの中にも見られる。これらのモティーフのこうしたヨーロッパ流伝について、ある学者は、モーコの所伝のあることから、十三世紀の中葉に行われたモーコの大軍のヨーロッパ侵入がこの物語ならびにその他数多くの物語のヨー

ロッパに於ける伝播に大きな役割を果したと考えた。モーコの王族バツゥ(抜都)は一二三七年にロシアに侵入して、モスコー、キエフを攻略し、一二四一年にはワールスタットの戦に於いて北ヨーロッパの諸侯の連合軍を破った。ヨーロッパの内地に深く軍を進めなかったけれども、一二四三年にはバツゥはキプチャク(金帳)汗国を興し、ノヴゴロド、キエフ、スズダル、ガリチなどのルス族の諸侯国を属国として、ヨーロッパ・ロシアの地方に勢威をふるったのであるから、その影響が北海沿岸に達したことも敢て怪しむに足りない。一二四一年にドイツのハンブルクとリュベックの両市が同盟して後のハンザ同盟の基を拓いたのも、直接間接にモーコのヨーロッパ進入の影響であるが、前述のごとくモーコの侵入がインドの物語のヨーロッパ流布の一つの要因をなしたとすれば、モーコの進撃がイギリスに於いて鯡の相場を高騰せしめたという笑えぬ事実とは異って、永続的な影響を民衆の間に遺した点で、改めてわれわれの注意を惹くものがあると言わねばならぬ。

インド古典説話集 カター・サリット・サーガラ（三）〔全4冊〕

1958年12月5日 第1刷発行 ©
1989年3月17日 第2刷発行

定価 450円

訳者 岩本(いわもと) 裕(ゆたか)

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・理想社 製本・田中製本

ISBN 4-00-320663-0